資料

・アンケート結果

・単純集計表

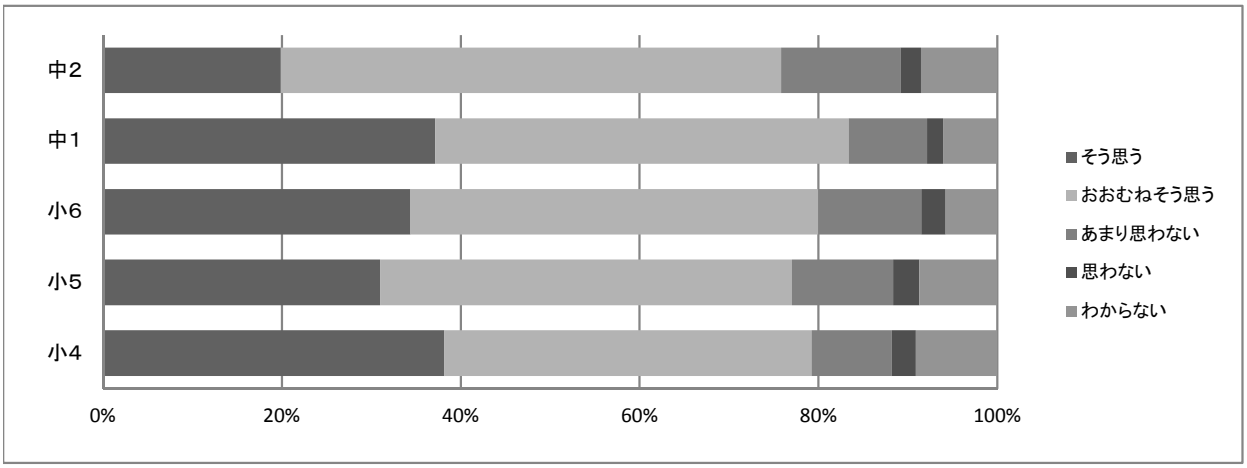
・アンケート用紙等

資料Ⅰ　アンケート結果

1 本市の小中一貫教育のねらい（7項目）に係る内容について

1－1 「9年間を見通した系統的・継続的な学習指導」についての意識

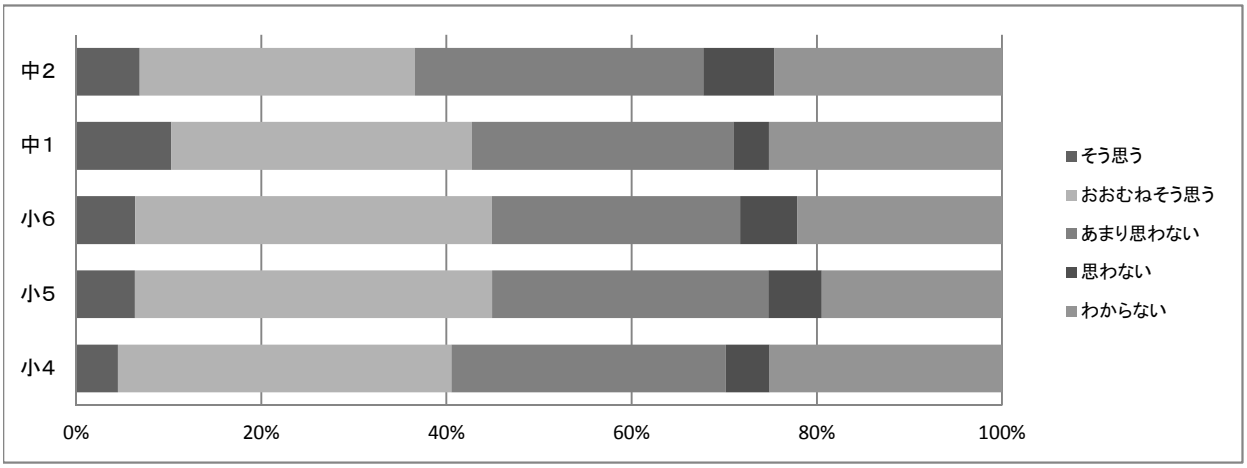
児童生徒　授業はこれまで習ったことやこれから習うことにもふれて進められていると思う。



※ 児童生徒は８割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学校１年生の肯定的回答割合が最も高い。

【児童生徒】
○ 児童生徒は全学年を通じて、系統的・継続的な学習指導を受けていると意識している。

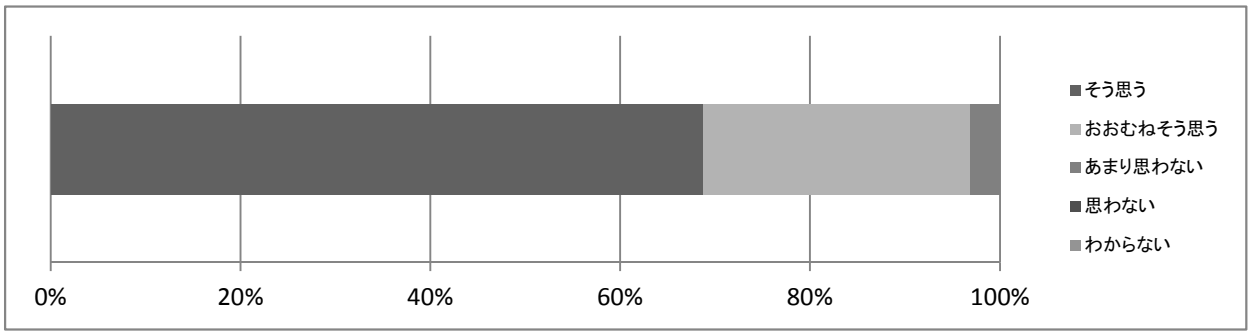
保護者　授業で、これまで習った事や今後習うことにもふれるなど、学習内容のつながりが意識されていると思う。



※ 保護者は４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 保護者は２割程度が「わからない」と回答している。

【保護者】
○ 児童生徒が系統的・継続的な学習指導を受けているとの意識している保護者の割合が４割にとどまっていると同時に、２割程度の保護者が「わからない」と回答している。保護者の系統的・継続的学習指導に対する理解は低い。

学校　小中一貫教育の実施により、9年間を見通した系統的･継続的な学習指導を意識するようになった。



※ ほぼ全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校では９年間を見通した系統的・継続的な学習指導を十分に意識している。

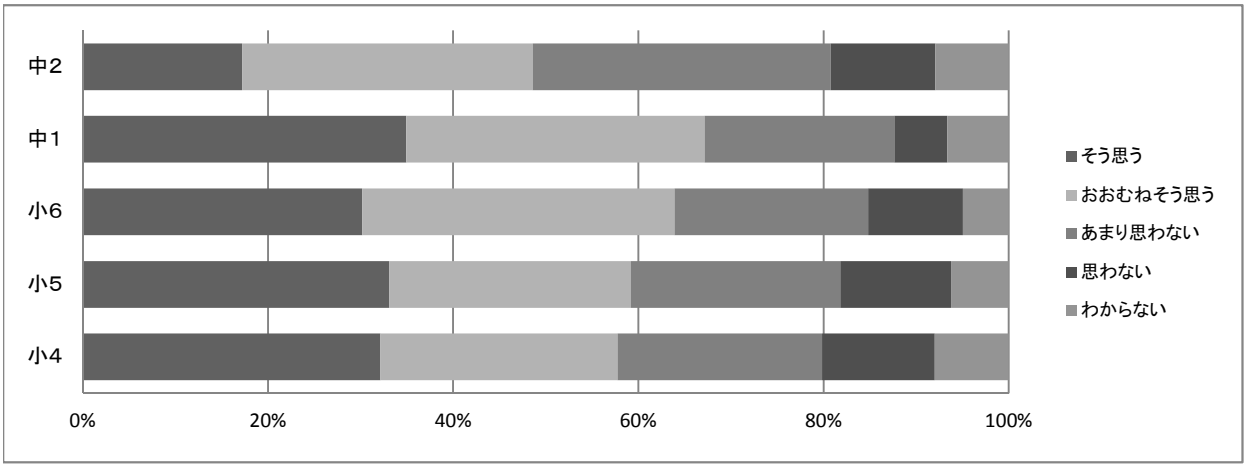
児童生徒は８割程度が「授業はこれまで習ったことやこれから習うことにもふれて進められていると思う」の設問に「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しており、９年間を見通した学習指導を受けていることを意識している。

一方、保護者は期待される回答割合が４割にとどまると同時に、「わからない」が２割程度であり、保護者の理解は低い。

今後も、系統的・継続的学習指導を一層充実させていくと同時に、保護者の理解を高める取組が必要である。

１－２ 「9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導」についての意識

児童生徒　担任の先生だけでなく、他の学級や学年の先生など多くの先生と話したりすることが多くなっていると思う。〔小学校〕
担任の先生だけでなく、他の学級・学年の先生や小学校の先生など多くの先生とかかわることが多くなっていると思う。〔中学校〕



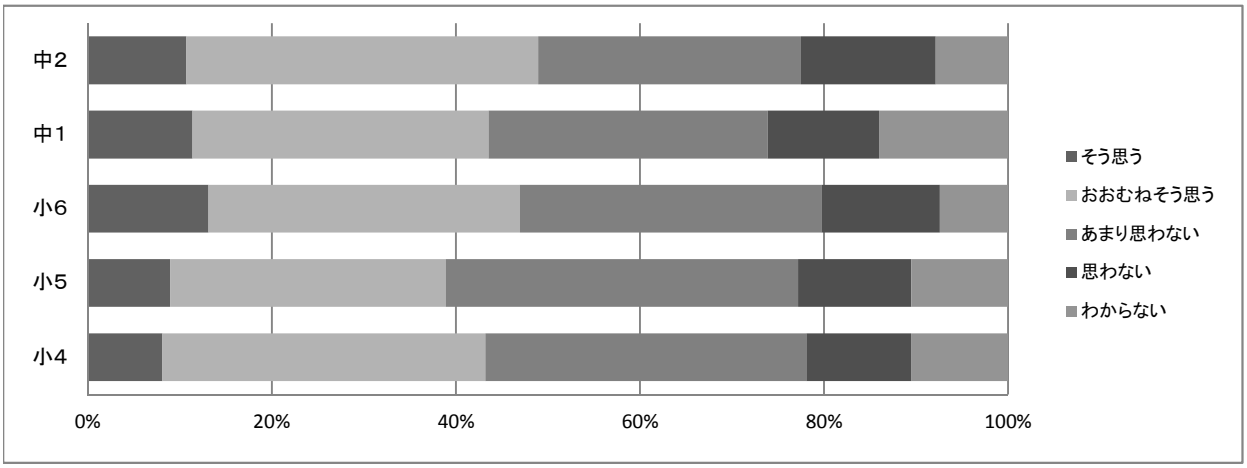
※ 小学校４年生から中学校１年生では６～７割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

※ 肯定的回答割合は中学校１年生が最も高く、中学校２年生で最も低くなっている。

【児童生徒】

○ 小学校６年生、中学校１年生において期待される回答割合が高い。児童生徒は「中１ギャップ」解消を目指した取組である教科担当制や教科連携教員（小中連携加配）による授業（指導）によって系統的・継続的生徒指導を受けていることを意識している。

保護者　担任や学年の先生に限らず、他学年の先生など多くの先生と我が子がかかわりを持っていると思う。

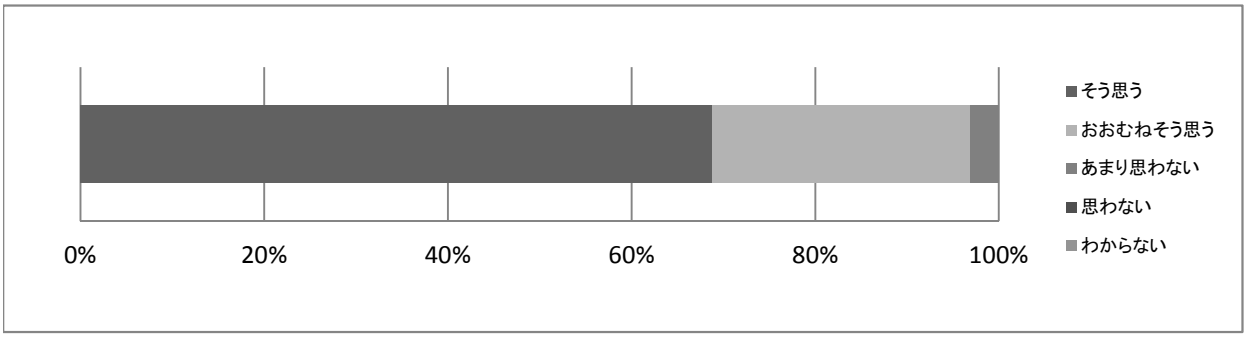


※ 保護者は４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【保護者】

○ 学年による明らかな差はなく、保護者としての共通した意識であると伺える。肯定的回答割合は４割にとどまっており、保護者の系統的・継続的生徒指導への理解は低い。

学校　小中一貫教育の実施により、9年間を見通した系統的･継続的な生徒指導を意識するようになった。



※ ほぼ全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校は９年間を通した系統的・継続的な生徒指導を十分に意識している。

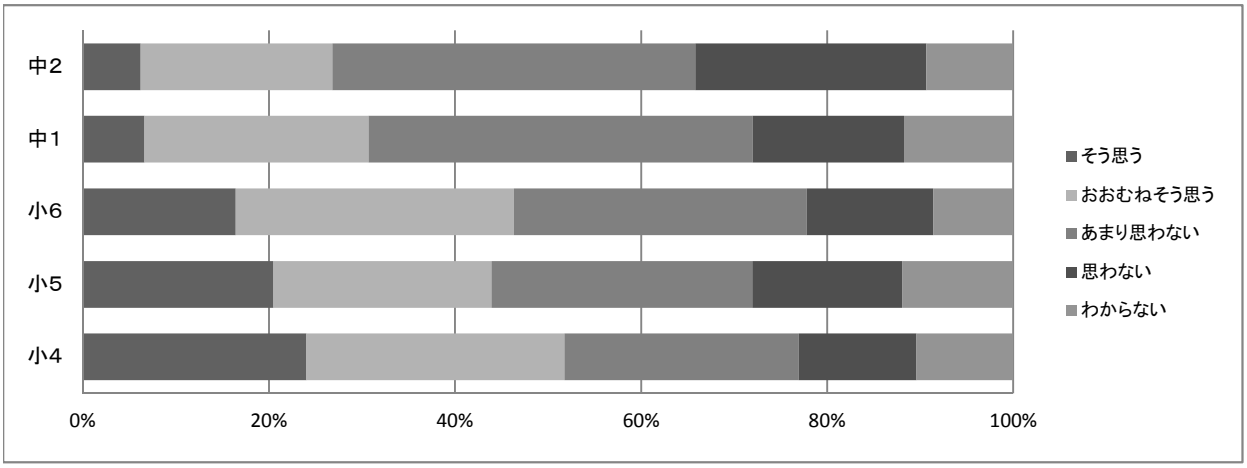
小学生の６割程度が肯定的回答をしていることから、小学生は担任の先生だけでなく他の学級や学年の先生など多くの先生とかかわることが多くなっていることを実感している。あわせて中学校１年生においても肯定的回答割合が高いことから、「中１ギャップ」解消に向けた取組が定着しつつあると言える。

一方、保護者の肯定的回答割合は４割程度にとどまり、担任や学年の先生に限らず他学年の先生など多くの先生と我が子がかかわりを持っているとの意識は低い。

今後も、９年間を見通した系統的・継続的な生徒指導を進めると同時に取組方法などを工夫・改善しながら、保護者の理解を深める取組が必要である。

１－３ 「9年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動」についての意識

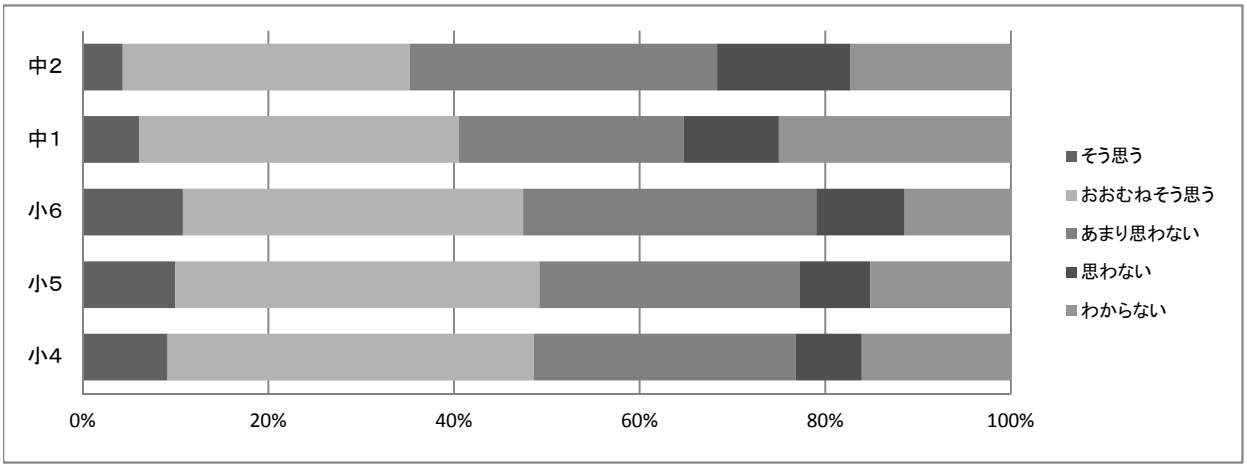
児童生徒　地域を知ったり、地域の人たちといっしょに活動したりする学習が多くなっていると思う。



※ 小学生は４～５割程度が「思う」「そう思う」と回答している。
※ 中学生は３割程度が「思う」「そう思う」と回答している。

【児童生徒】
○ 学年が進むにつれて、地域にかかわる学習、地域の人と一緒に活動する学習が少なくなっていることが伺える。

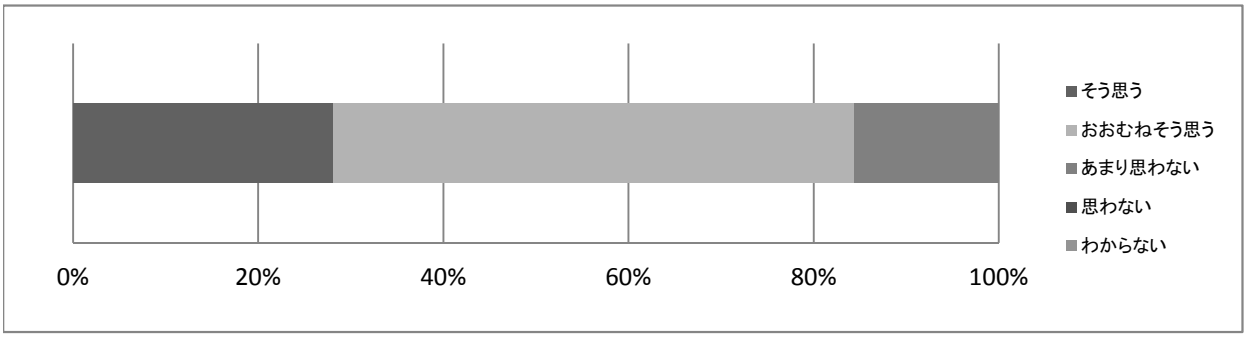
保護者　地域の方を先生として招いたり校区の良さを知る活動など、地域と結びついた教育活動が計画的に行なわれていると思う。



※ 小学生保護者は５割程度、中学生保護者は４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 保護者は１～２割程度が「わからない」と回答している。

【保護者】
○ 学年によっては２割を超える保護者が「わからない」と回答し、地域と結びついた教育活動についての保護者の理解は低い。

学校　小中一貫教育の実施により、9年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動を行うようになった。



※ 学校は８割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 「そう思う」との回答は３割程度と他の項目と比較するとその割合は低い。

【学校】

○ 学校は地域社会との繋がりを重視し、９年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動を行うように意識している。

児童生徒では、「地域を知ったり地域の人たちと一緒に活動したりする機会は多くなってきている」との設問に対して肯定的回答割合は小学生で５割程度、中学生で３割程度と学年が進むにつれて低くなっている。

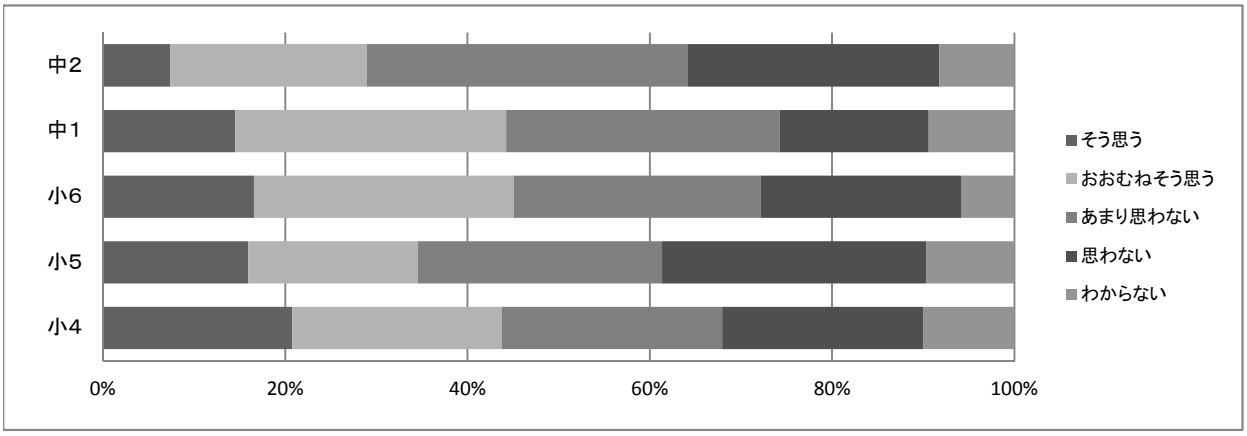
保護者においても「地域の方を先生として招いたり校区の良さを知る活動など、地域と結びついた教育活動が行われている。」との設問に対して肯定的回答割合は４割程度にとどまっている。また、２割の保護者は「わからない」と回答しており、保護者の理解は低い。

児童生徒が地域行事に参加する機会の重要性を学校は意識し以前と比較して増えてきているものの、まだまだ児童生徒、保護者の意識は高まってはいない。

今後は地域との連携した取組の内容をさらに工夫・改善し、結果として児童生徒、保護者の意識を高めていく必要がある。

１－４「児童生徒間の多様な交流活動や地域社会との交流」についての意識

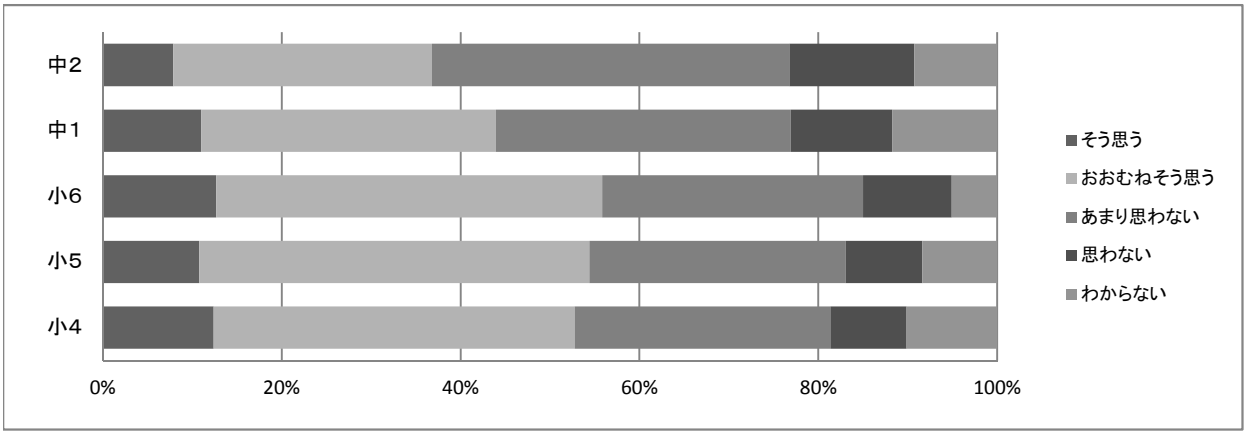
児童生徒　他の学年や近くの小学校、中学校の人といっしょに活動するようになっていると思う。〔小学校〕
他の学年や近くの小学校の人といっしょに活動するようになっていると思う。〔中学校〕



※ 児童は４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学校２年生では３割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【児童生徒】
○ 総じて期待される肯定的回答割合が低く、各中学校ブロックでは児童生徒の交流は進んでいるものの、児童生徒会の交流等、一部の児童生徒を対象としたものが多いことが伺える。

保護者　異学年交流や小・中学校との交流が多く行われていると思う。

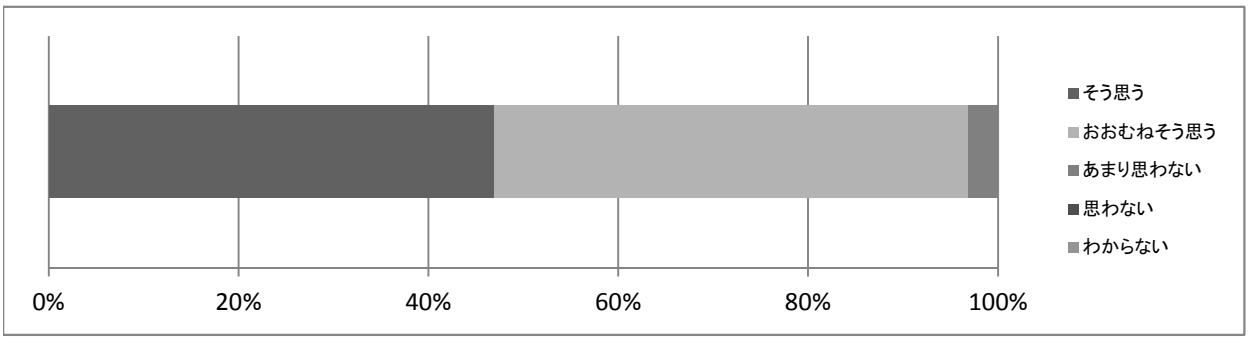


※ 小学生保護者は５割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学生保護者は３～４割程度が肯定的回答をしている。他の設問と比較すると肯定的回答割合は低い。

【保護者】
○ 他の項目と比較して肯定的回答割合は低い。小・中学校間交流についての保護者の理解は低い。

○ 総じて肯定的回答割合は低いものの、その中では小学校６年生保護者の割合が最も高い。この点から「中１ギャップ」解消を目指した取組における小・中交流や小学校６年生においての低学年との交流が定着しつつあると言える。

学校　小中一貫教育の実施により、児童生徒の交流活動や地域社会との交流を行うようになった。



※ ほぼ全ての学校は「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校において、児童生徒の交流活動や地域社会との交流の必要性が認識され、様々な取組が定着しつつあることが伺える。

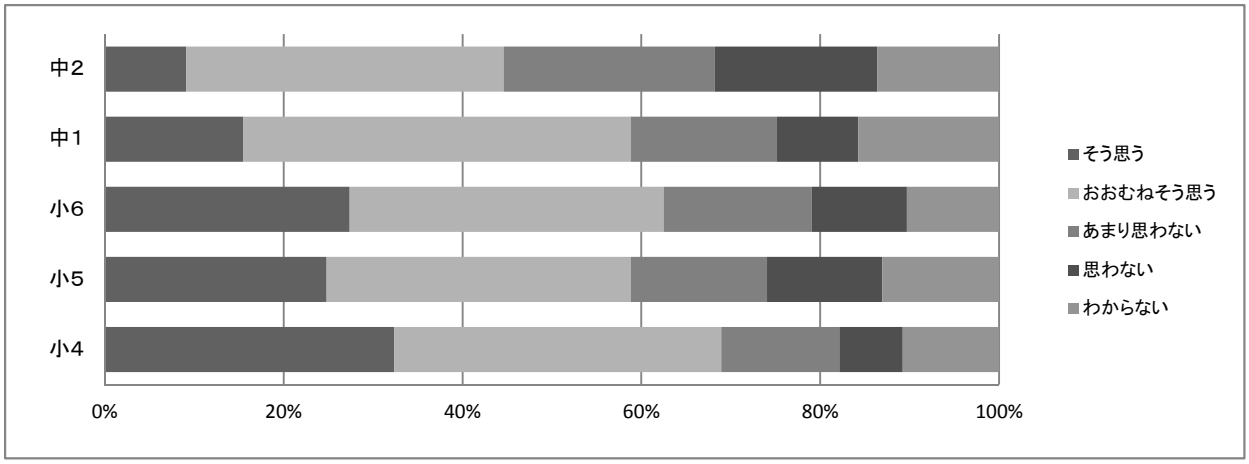
児童生徒交流・地域社会交流についての児童生徒、保護者の肯定的回答割合は低く、意識は高まってはいない。

各校における児童生徒の異年齢交流についてはこれまでにも取り組まれてきたところであるが、小・中の交流活動に関してはまだまだ児童会、生徒会交流などの一部の児童生徒を対象とした取組が多いことから全児童生徒の意識へと繋がっていない。また、地域社会との交流については他の質問項目においても肯定的回答割合が低い。

今後は小学生による中学校での授業体験、部活動体験を始めとして多くの児童生徒を対象とした多様な取組や地域社会との交流活動の充実が望まれる。

１－５「児童生徒一人一人への理解を深めること」についての意識

児童生徒　自分のことを先生がしっかりわかってくれるようになったと思う。

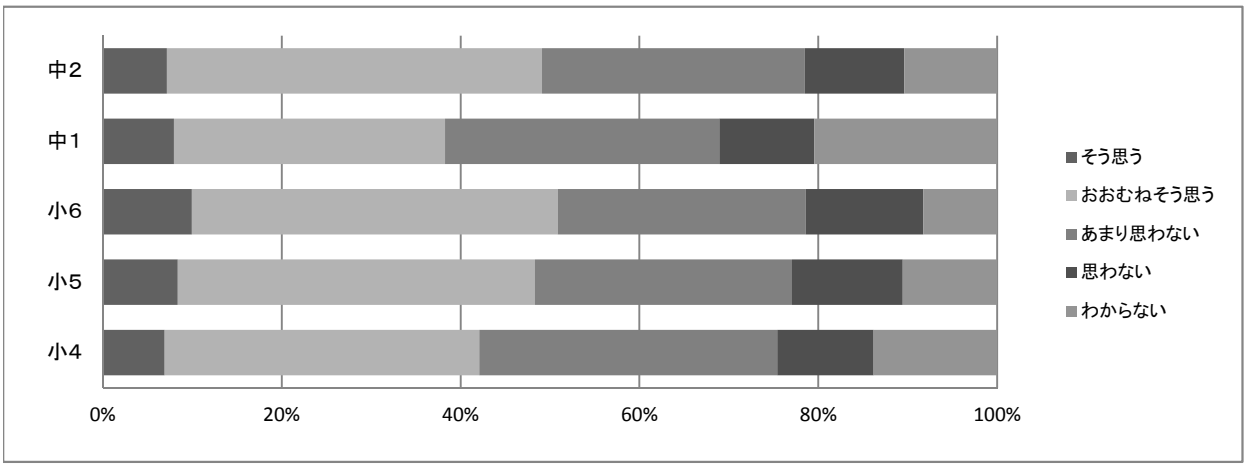


※ 小学生は６割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学校２年生の肯定的回答割合は４割程度にとどまっている。

【児童生徒】

○ 小学校６年生と中学校１年生の差が少ない点については、小学校高学年からの教科担当制により、教員との広く多様な関わりが定着しつつあることが伺える。

保護者　先生は、我が子のことを多方面から深く理解していると思う。

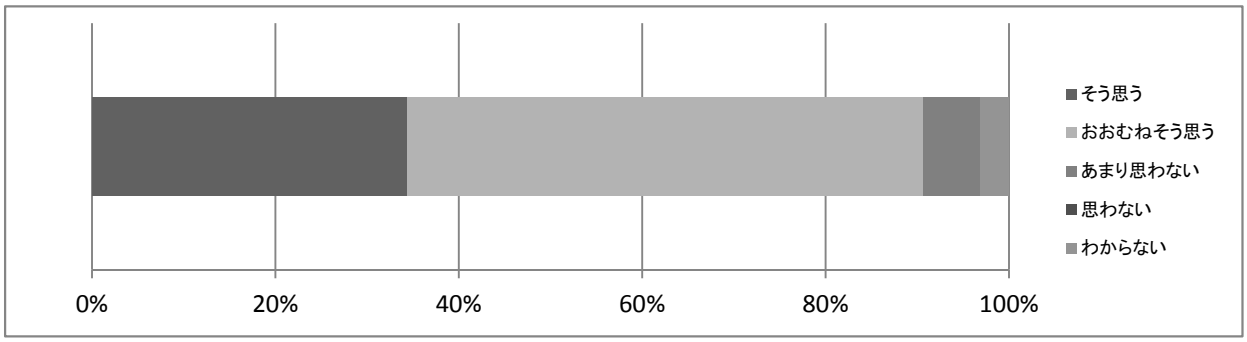


※ 保護者は４～５割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学校１年生保護者の肯定的回答割合は４割程度と最も低い。

【保護者】

○ 中学校１年生保護者の期待される回答割合は低い。これは小学校高学年での一部教科担当制が進んできているものの、中学校進学時における学級担任制から教科担任制へのシステム変更が影響していることが伺える。

学校　小中一貫教育の実施により、児童生徒一人一人への理解が深まった。



※ 学校は９割が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

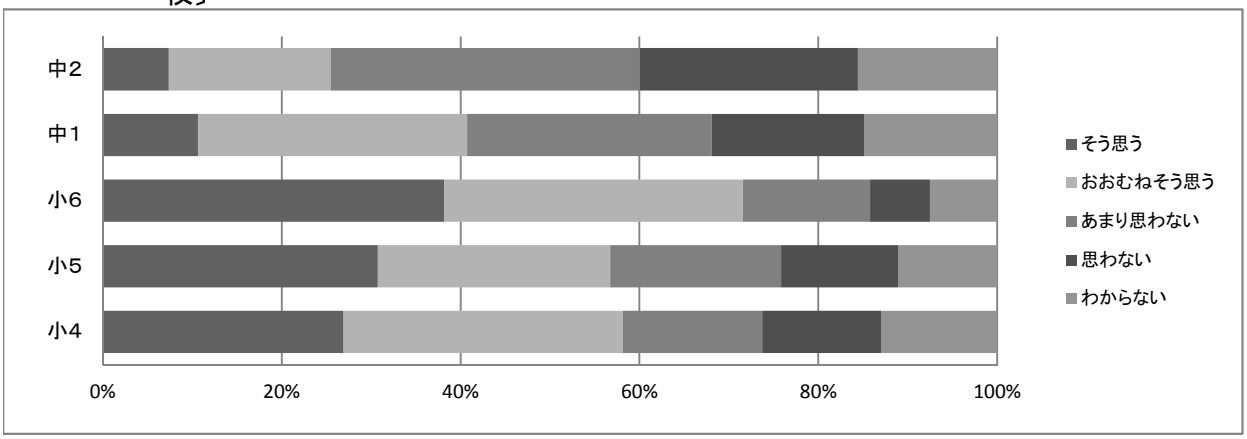
○ 小中一貫教育の実施により児童生徒理解が進んでいることが伺える。

児童生徒では「自分のことを先生がしっかりわかってくれるようになったと思う。」の設問に対して「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は学年が進むにつれて、低くなっている。これは発達上の表れであると同時に、学級担任制と教科担当制とのシステムの違いから戸惑いが生じていることが伺える。

今後は、さらに小・中学校の教職員が連携して児童生徒理解を深めた上で、個に応じた指導や支援を充実することにより、「中１ギャップ」解消を目指した取組を進め、児童生徒、保護者の意識を高める必要がある。

１－６「小学校と中学校の教職員が相互に交流を深めること」についての意識

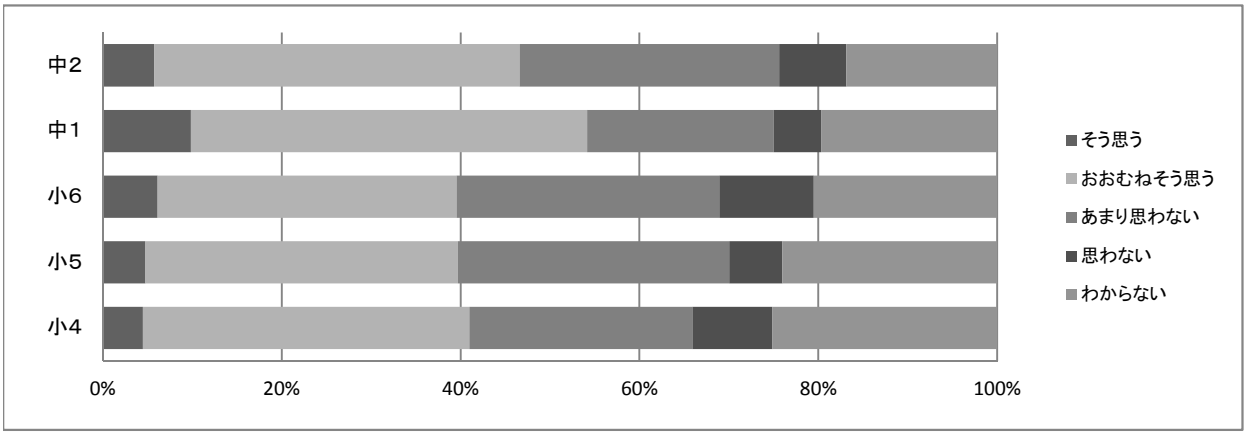
児童生徒　小学校や中学校の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う。〔小学校〕
小学生の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う。〔中学校〕



※ 小学生は６～７割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学校２年生は肯定的回答割合が２割程度にとどまっている。

【児童生徒】
○ 小学生では６～７割が肯定的回答をしており、教科連携教員（小中連携加配）やAETによる指導（授業）が定着していることが伺える。
○ 中学生での肯定的回答割合の低さから、小・中教員による連携した取組の場が小学校主体であることが伺える。

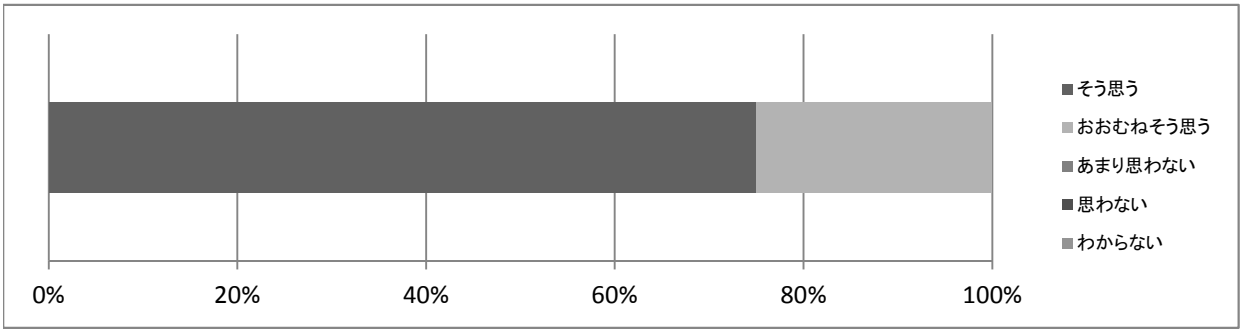
保護者　小・中学校の先生がいっしょに授業参観したり、研修をしたりして交流を深めていると思う。



※ 小学生保護者は４割程度、中学生保護者では５割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ どの学年においても２割程度が「わからない」と回答している。

【保護者】
○ どの学年においても２割程度の保護者が「わからない」と回答しており、保護者には小・中教職員の連携した取組の実態が見えにくいことが伺える。
○ 総じて肯定的回答割合は低いものの、中学校１年生保護者の肯定的回答割合が高いことから、「中１ギャップ」解消を目指した取組が定着しつつあることが伺える。

学校　小中一貫教育の実施により、小・中学校教職員間の交流が深まった。



※ 全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ これまでの取組により、小･中学校間における教職員交流は進んできている。今後はさらに小・中合同研修会を充実させることにより教職員の指導力向上を図っていくことが望まれる。

各中学校ブロックにおける合同研修、授業研究会等の取組や、教科連携教員による授業(指導)、チーフコーディネーターの日常的コーディネーター業務により小・中学校間の教職員交流は深まっている。

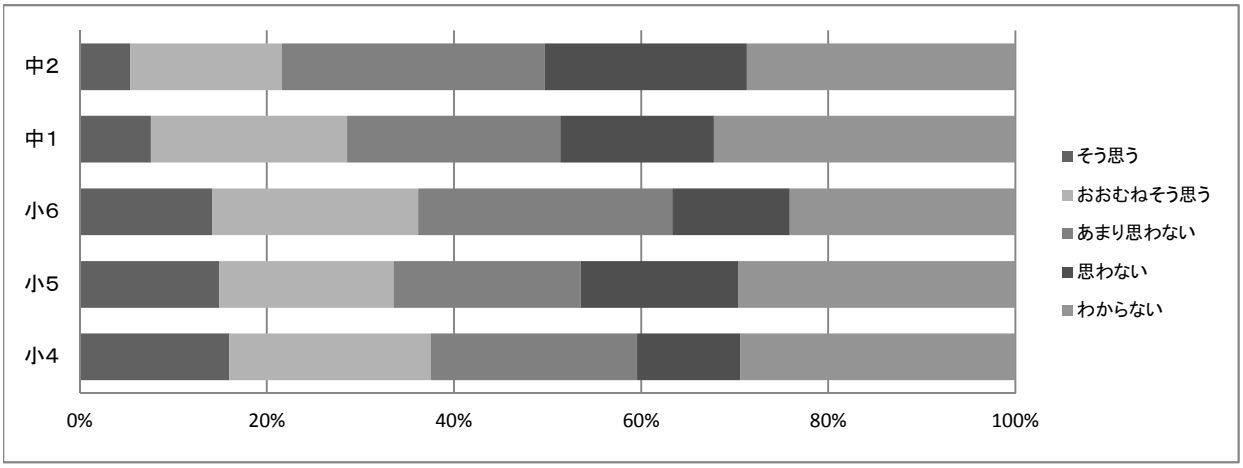
児童生徒においては他学年と比較して小学６年生で肯定的回答が最も高く、中学校１年生保護者の肯定的回答割合が高いこととあわせて「中１ギャップ」解消を目指した取組が定着しつつあると言える。

一方、中学校２年生においては肯定的回答割合が２割程度、保護者においては４割程度と、中学校２年生での落ち込みが見られる。

今後も、小学校と中学校の教職員が相互交流による教育活動の充実や指導方法の工夫改善を行いながら、教職員の指導力の向上を図っていくことが必要である。また、同時に保護者の理解・意識を高めていく取組も必要である。

１－７ 「中学校ブロックを単位とした地域社会・保護者相互の連携を深めること」についての意識

児童生徒　小・中学校がいっしょになった地域での行事やPTA・育友会行事が増えたと思う。

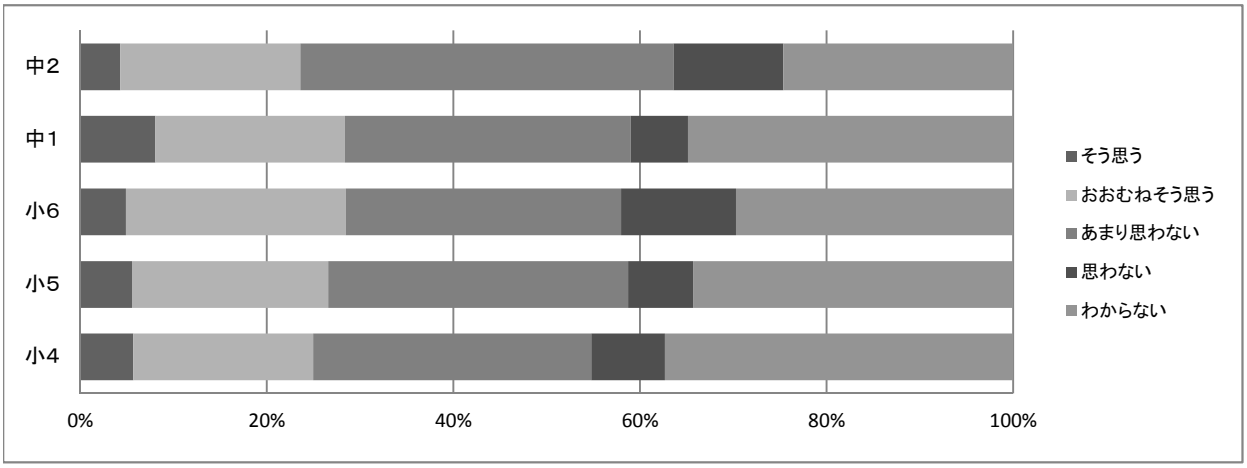


※ 児童生徒は２～４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 児童生徒は２～３割程度が「わからない」と回答している。

【児童生徒】

○ 児童生徒が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した割合は低く、あわせて「わからない」との回答も２～３割程度ある。中学校ブロックを単位とした小・中学校が交流する取組の充実が望まれる。

保護者　中学校ブロックでの地域の集まりやPTA・育友会活動が増えたと思う。

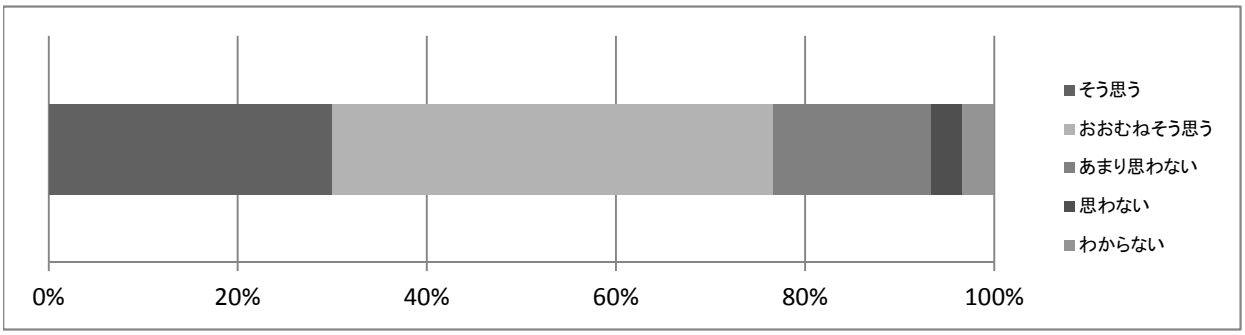


※ 保護者は２～３割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 保護者は２～４割程度が「わからない」と回答している。

【保護者】

○ 「そう思う」「おおむねそう思う」との回答は２～３割程度にとどまり、「わからない」との回答も学年によっては４割程度ある。中学校ブロックを単位とした地域、PTA・育友会が交流する取組の充実が望まれる。

学校　小中一貫教育の実施により、中学校ブロックを単位とした地域社会、保護者相互の連携が深まった。



※ 学校は８割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 中学校ブロックを単位とした地域社会、保護者相互の連携については２割程度が「あまり思わない」「思わない」と回答していることから、より一層の充実が望まれる。

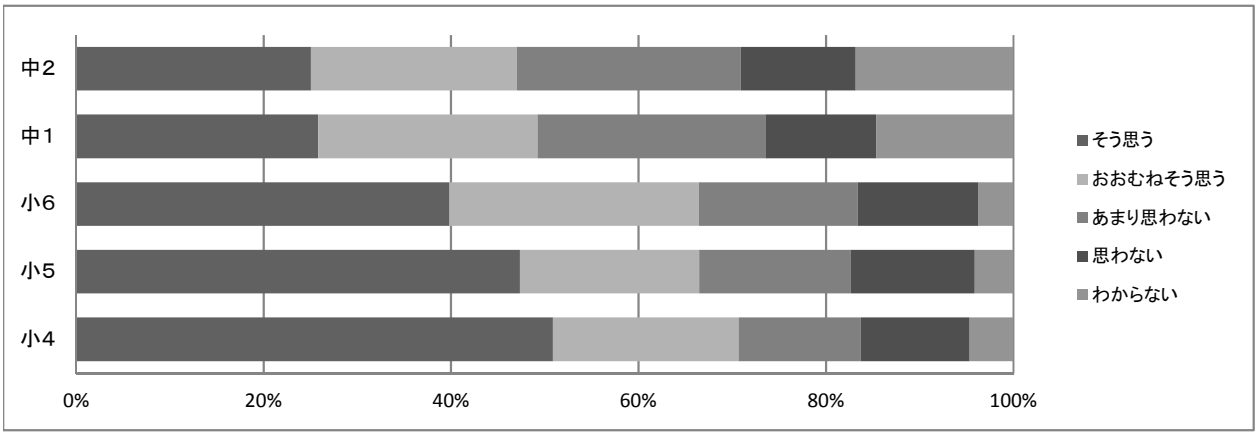
「小・中学校がいっしょになった地域での行事やPTA・育友会行事が増えたと思う」の設問に対して、「そう思う」「おおむねそう思う」と回答した児童生徒は２～４割程度にとどまっている。保護者の回答も２～３割程度にとどまり、学校においても８割と他の設問と比較すると肯定的回答割合は低い。

これまでは小学校区単位での地域諸団体の活動が多かったが、小中一貫教育を推進する中で中学校ブロックを単位としたPTA・育友会や地域諸団体間の連携を図る取組が進められてきた。この取組は学校を支援する新たな地域コミュニティ形成につながると言える。今後は中学校ブロックを単位とした、学校、家庭、地域社会が一体となった教育環境づくりの充実が望まれる。

２ 小中学校間のなめらかな接続をすすめるための取組などについて

２－１ 校種間の乗り入れ授業（指導）について

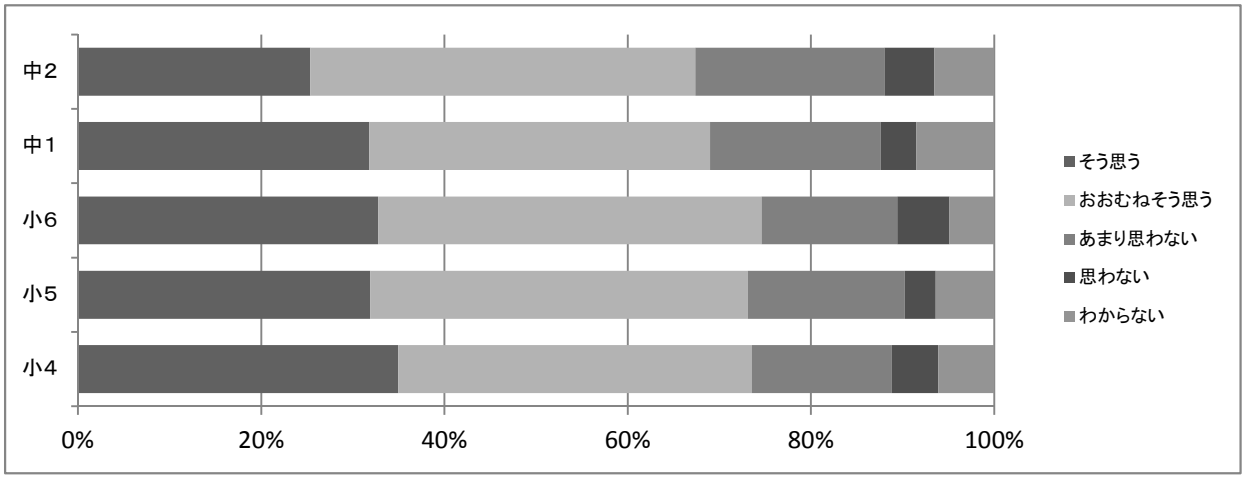
児童生徒　担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う。〔小学校〕
小学校でも、担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらったほうがよいと思う。〔中学校〕



※ 小学校４年生では７割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答しているが学年が進むにつれて、その割合は低くなっている。
※ 中学生は２割程度が「わからない」と回答している。

【児童生徒】
○ 小学生は担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらうことを期待していることが伺える。一方で中学生の肯定的回答割合は低く、小学生段階での教科担当制についての期待は小学生ほど高くないことが伺える。

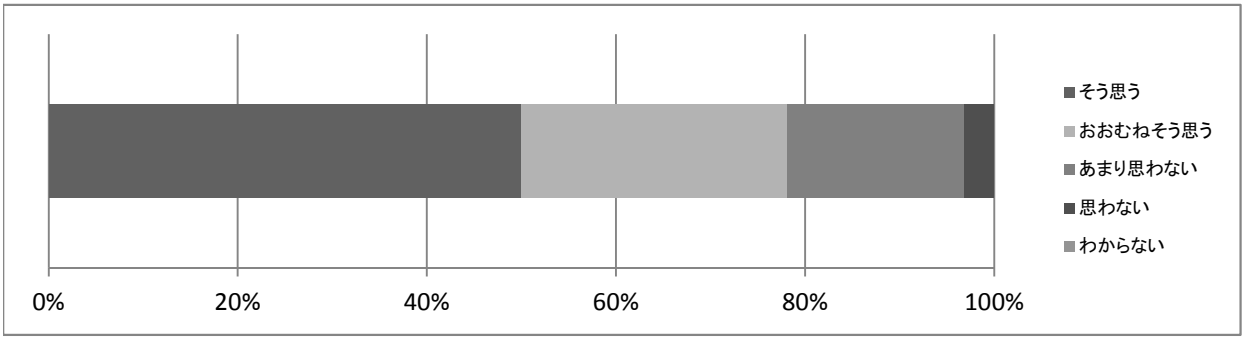
保護者　小学校でも、担任以外の先生や中学校の先生にも我が子を指導してほしいと思う。



※ 保護者は７割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【保護者】
○ 保護者は、小学校でも担任以外の先生や中学校の先生にも我が子を指導してほしいと願っており、学年による大きな差は見られない。

学校　中学校ブロックの体制や条件が整えば、他校での授業や部活動などの指導をしてもよい。



※ 学校は８割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 教員はブロック内の小中学校で乗り入れ授業（指導）を行うことに抵抗を感じていない。

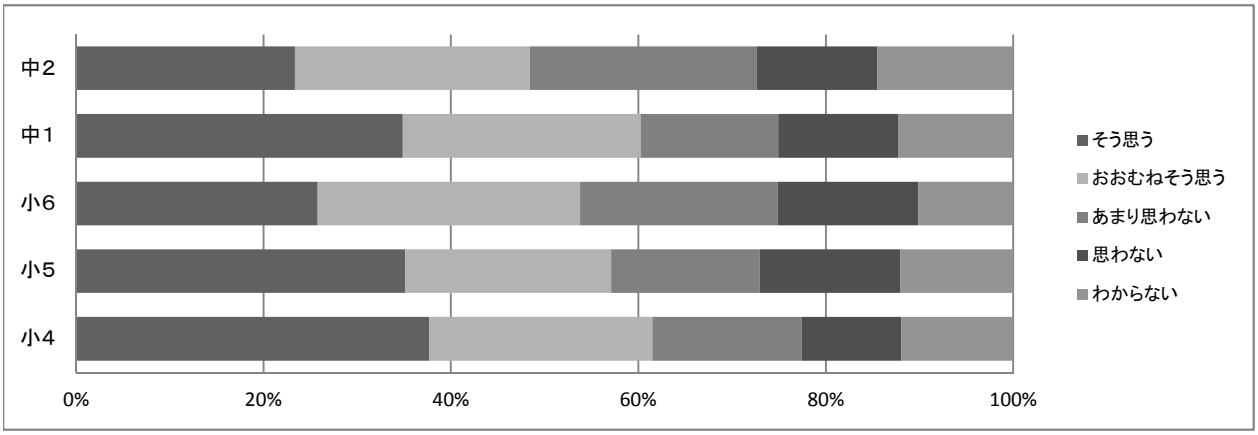
「担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う」の設問に対して中学生の肯定的回答割合は４割程度と低いものの小学生では７割程度が回答しており、小学生の教科担当制に対する期待は大きい。

また保護者においても全学年で肯定的回答割合が７割程度、学校においても８割程度と校種間の乗り入れ授業（指導）についての意識、期待は大きい。

学校は中学校ブロックでの体制や条件が整えば他校で授業や部活動などの指導をしてもよいと回答しており、ブロック内での指導における条件整備が施設分離型小中一貫教育校においての課題である。

２－２ 不安や戸惑いについて

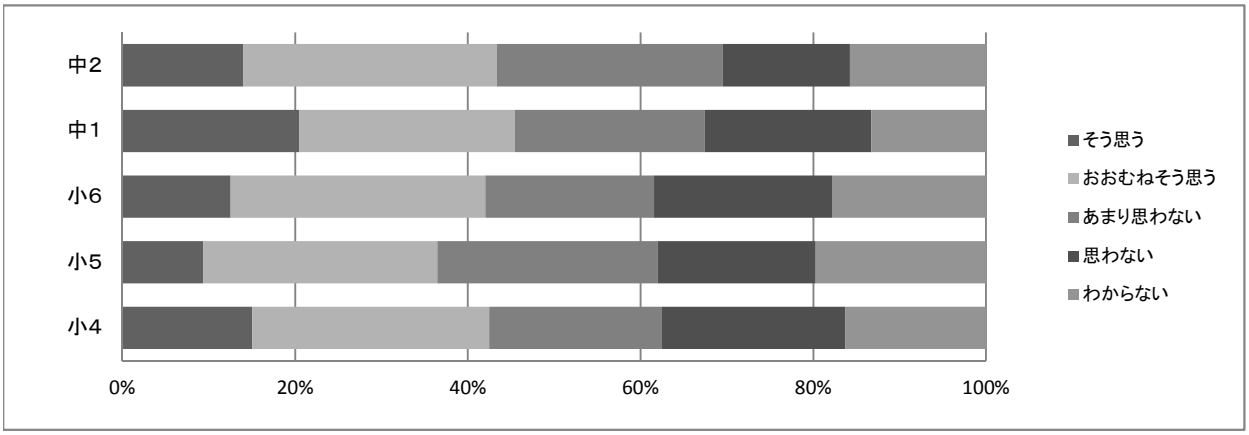
児童生徒　小・中学校がいっしょになって行事などをすることに心配はない。



※ 児童生徒は５～６割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 小学生では学年が上がるにつれて肯定的回答割合が低くなっているが、中学校１年生では肯定的回答割合が増加している。

【児童生徒】
○ 小学生は中学校進学が迫るにつれて中学生との交流について不安が増している。

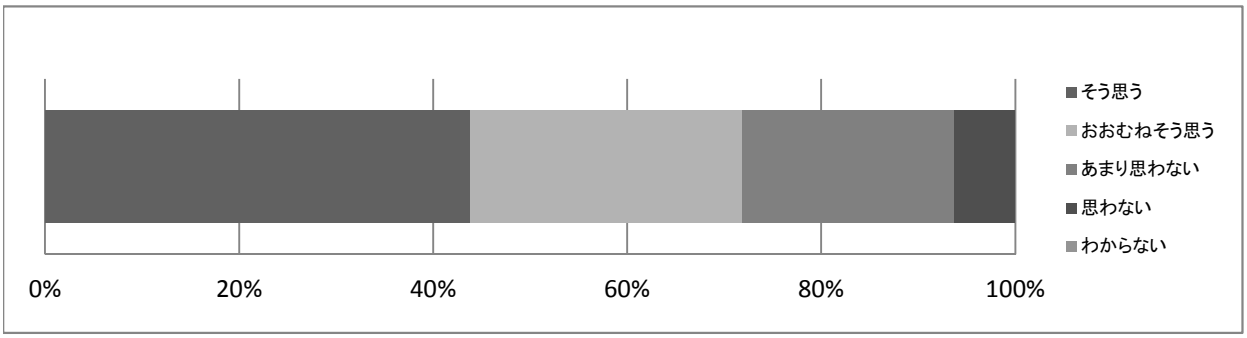
保護者　小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない。



※ 保護者は４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 保護者は１～２割程度が「わからない」と回答している。

【保護者】
○ 保護者の期待される回答割合は４割程度であり、「わからない」との回答割合も１～２割程度ある。保護者に対して今以上に小中一貫教育についての理解を深めていく取組が必要がある。

学校　小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない。



※ 学校は７割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。一方、「あまり思わない」「思わない」との回答が３割程度ある。

【学校】

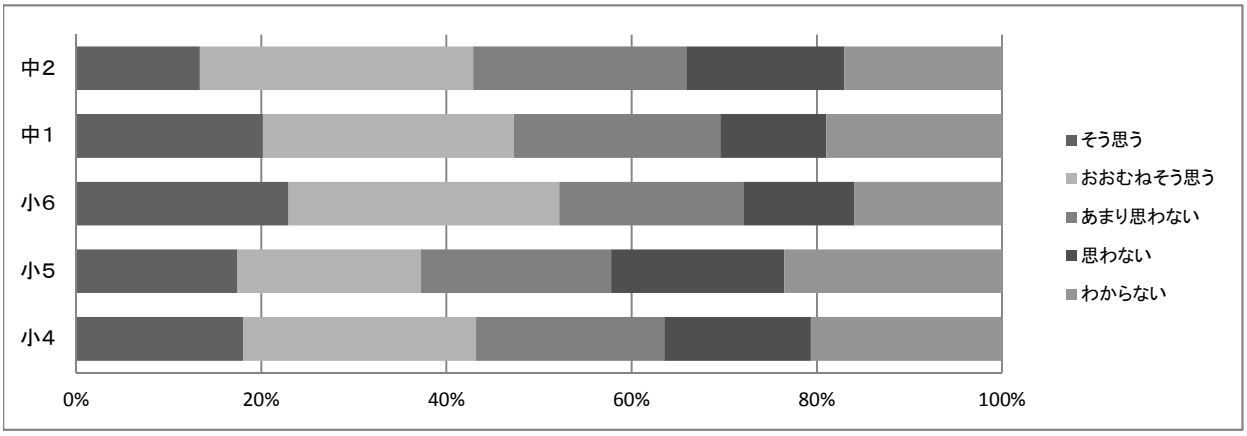
○ 「あまり思わない」「思わない」との回答が３割程度あることから、今後も引き続き小中一貫教育の取組を工夫・改善し、定着させていく必要がある。

児童生徒の肯定的回答割合は５～６割程度、保護者の割合は４割程度、学校においても７割程度と他の設問と比較すると低い。

小中一貫教育においては全面実施２年目であり、まだまだ戸惑いがあるというのが現状である。今後は中学校ブロックがこれまで進めてきた取組をさらに充実、発展させると同時に、現在ある課題を整理し、解決に向けた取組を進めることにより、児童生徒、保護者の期待に応えていくことが必要である。

２－３ 広報活動について

児童生徒　近くの小学校や中学校のようすが、おたよりや掲示物などでわかるようになった。〔小学校〕
近くの小学校のようすが、学校通信や掲示物などでわかるようになった。〔中学校〕



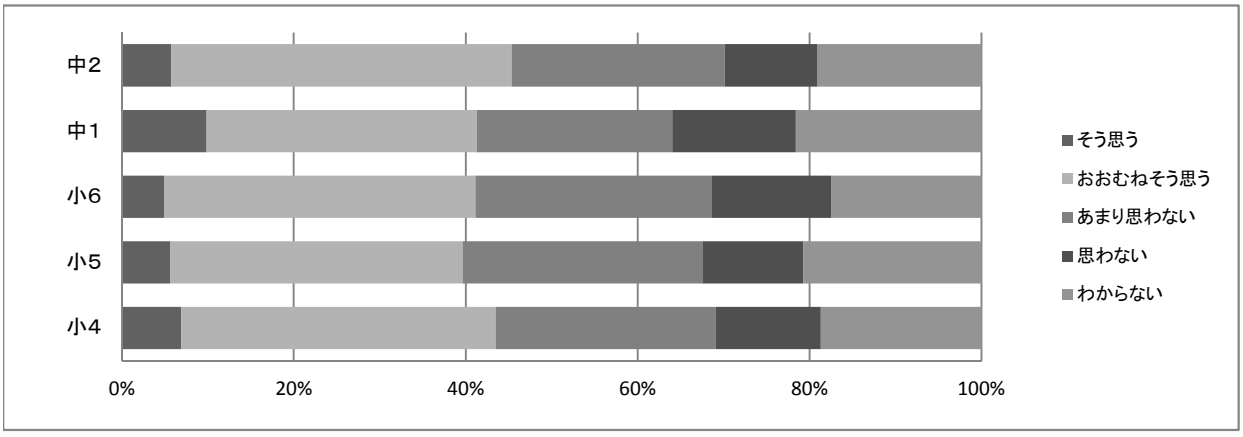
※ 児童生徒は４～５割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【児童生徒】

○ 全学年を通じて、肯定的回答割合は４～５割程度にとどまっている。

○ 他学年との比較では小学校６年生と中学校１年生の肯定的回答割合が高い。

保護者　リーフレットやたより、インターネットなどで、宇治市の小中一貫教育の取組状況を知ることができている。



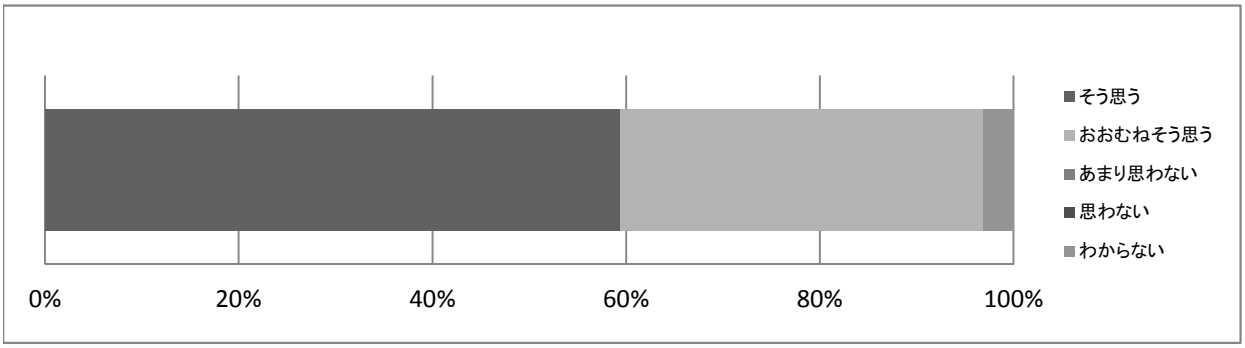
※ 保護者は４割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

※ 全ての学年において２割程度が「わからない」と回答している。

【保護者】

○ 肯定的回答割合が４割程度にとどまり、「わからない」との回答が２割程度あることから、広報活動の充実が必要である。

学校　市教委や中学校ブロックなどが発行するリーフレット（小中一貫教育だより）などは、小中一貫教育の取組全般について保護者や地域住民に広報することに役立っている。



※ 学校はほぼ全てが「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

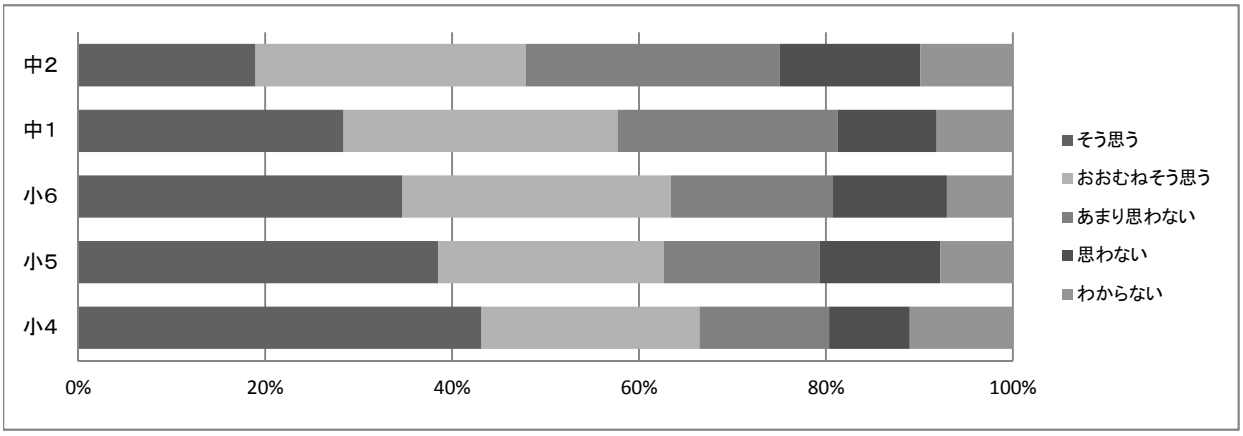
○ 学校は広報誌やリーフレット等が保護者や地域への情報発信の手段のひとつとして有効であると意識している。

児童生徒、保護者の肯定的回答割合は４割程度であり、また、「わからない」との回答が２割程度ある。

これまで学校はリーフレット、たより等を発行することを中心に情報発信について取り組んできた。今後はたより等だけにとどまらずに、実際の取組を参観できる機会を増やす等、多様な方法を用いて情報を発信し、保護者の理解を高めていくことが必要である。

２－４　小・中学生の交流活動や合同行事について

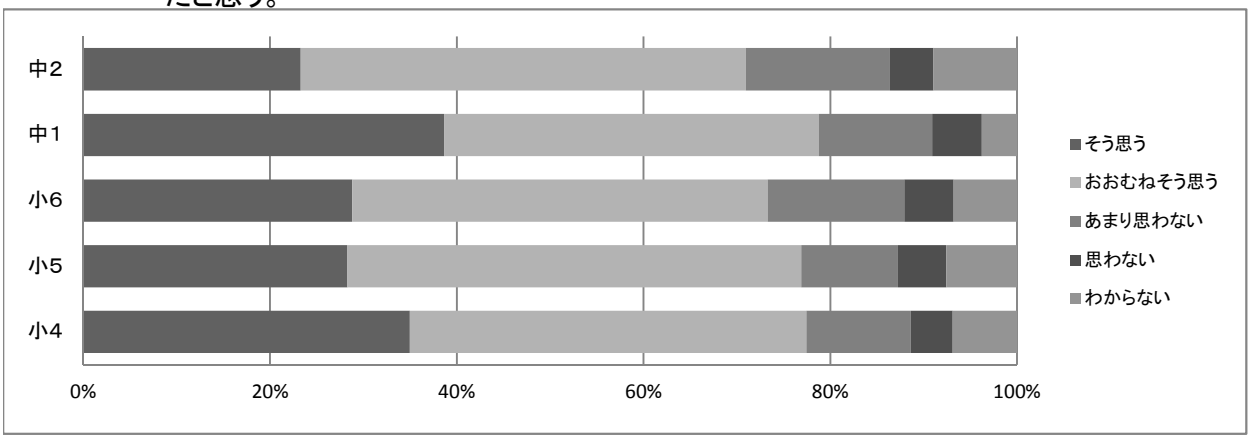
児童生徒　小学生と中学生がいっしょに活動することは大切だと思う。



※ 小学校４年生では６割をこえる児童が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 学年が進むにつれて、肯定的回答割合は低くなっている。

【児童生徒】
○ 学年が進むにつれて肯定的回答割合は低くなっているものの、小学生は小・中学生の交流について期待を持っている。

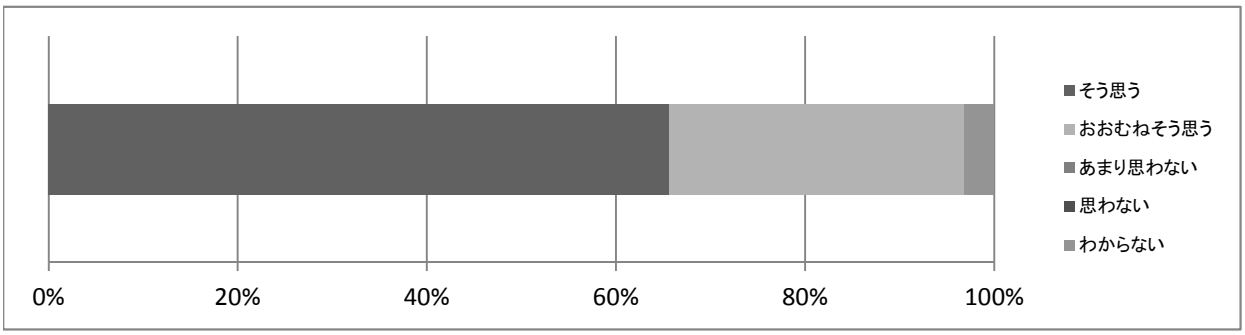
保護者　我が子の成長にとって、小学生と中学生の交流活動や合同行事などを行うことはよいことだと思う。



※ 保護者は７～８割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 中学校１年生保護者は４割程度が「そう思う」と回答している。

【保護者】
○ 肯定的回答割合は７～８割程度であり、小学生と中学生の交流活動や合同行事などの取組に対する期待は大きい。

学校　小･中学生の交流活動や合同行事は教育的に有効である。



※ 学校はほぼ全てが「そう思う」「おおむねそう思う」と回答をしている。

【学校】

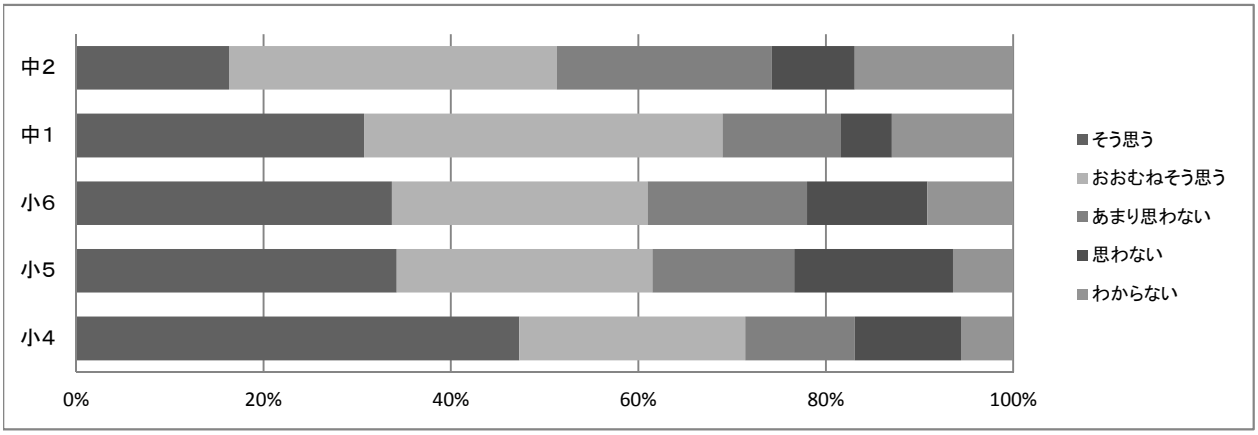
○ 学校は小・中学生の交流活動や合同行事は教育的に有効であると意識している。

保護者、学校においての肯定的回答割合は高く、児童生徒の交流に対する期待は高まっている。また、小学生においても児童生徒交流に対する期待は大きく、これまでの児童生徒交流の取組が定着しつつある。

今後も、各中学校ブロックの特色を活かした小・中学生の交流をすすめ、豊かな人間関係を培うことが望まれる。

２－５ 自尊感情の育成について

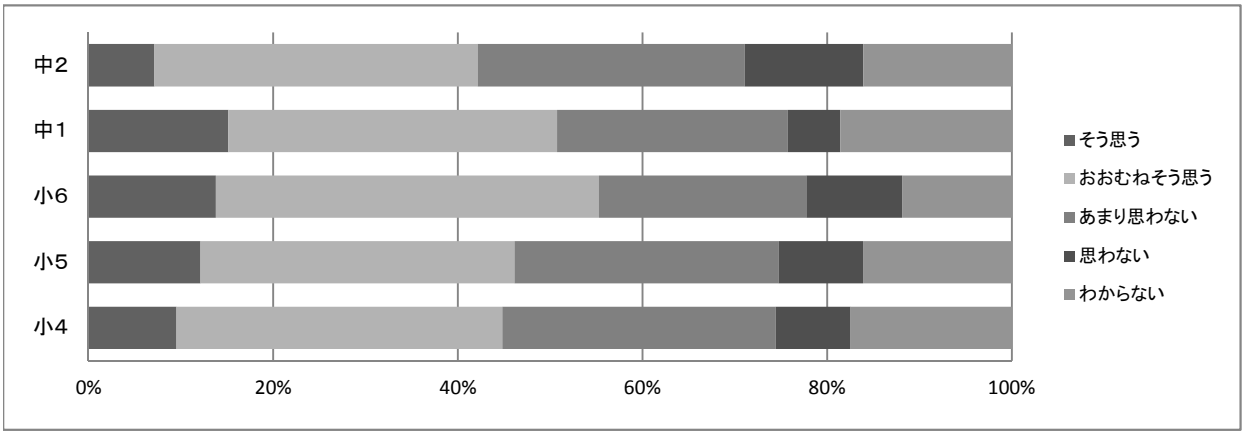
児童生徒　上級生や中学生を、すごいと感じるようになった。〔小学校〕
小学生に対して、中学生としての自信と自覚がでてきた。〔中学校〕



※ 児童生徒は５～７割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 小学校４年生と中学校１年生が他学年との比較において肯定的回答割合が高い。

【児童生徒】
○ 総じて肯定的回答が高いことから自尊感情の醸成が進んでいることが伺える。特に中学校１年生において肯定的回答割合が高いことから、「中１ギャップ」解消を目指した取組が定着しつつあると言える。

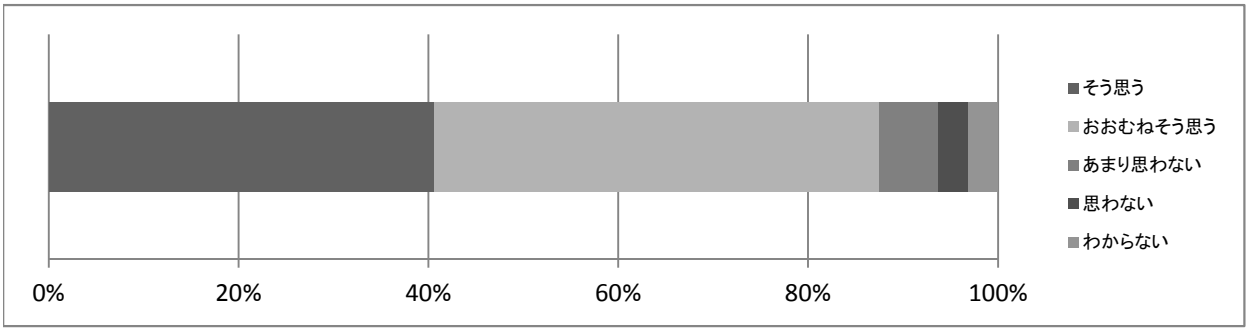
保護者　我が子は交流活動などを通して、上級生をよき兄、姉と感じたり、よき兄、姉になろうとしたりするようになったと思う。



※ 保護者は４～５割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。
※ 小学校６年生保護者の肯定的回答割合は６割程度あり、他の学年より高い。

【保護者】
○ 他の学年と比較して小学校６年生保護者の肯定的回答割合が高いことから「中１ギャップ」解消を目指した取組が定着しつつあると言える。

学校　小中一貫教育により、自尊感情が育つと考えられる。



※ 学校は８割が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校は小中一貫教育を推進することにより自尊感情の醸成が進んでいるとの意識を持っている。

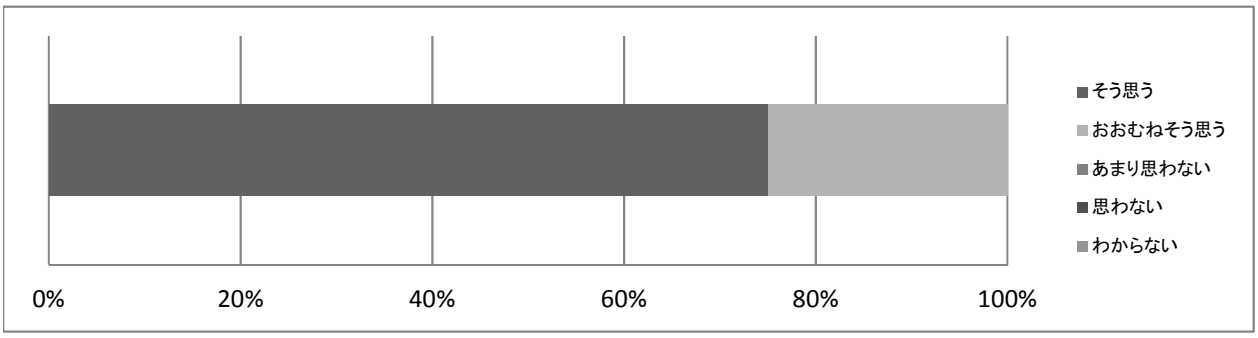
肯定的回答割合が児童生徒で最も高かったのが中学１年生で、保護者では小学校６年生である。ここから「中１ギャップ」解消を目指した取組が定着しつつあると言える。

学校においても期待される回答が８割をこえ、小中一貫教育は自尊感情を育てるにあたって有効であると考えている。

今後も、各中学校ブロックの特色を活かしながら、校種間交流、異学年交流に取り組む中で児童生徒の自尊感情の醸成に努めていく必要がある。

3　小中一貫教育を進める中学校ブロックの体制等について

1　中学校ブロックにつくられている推進組織は、小中一貫教育の推進に役立っている。



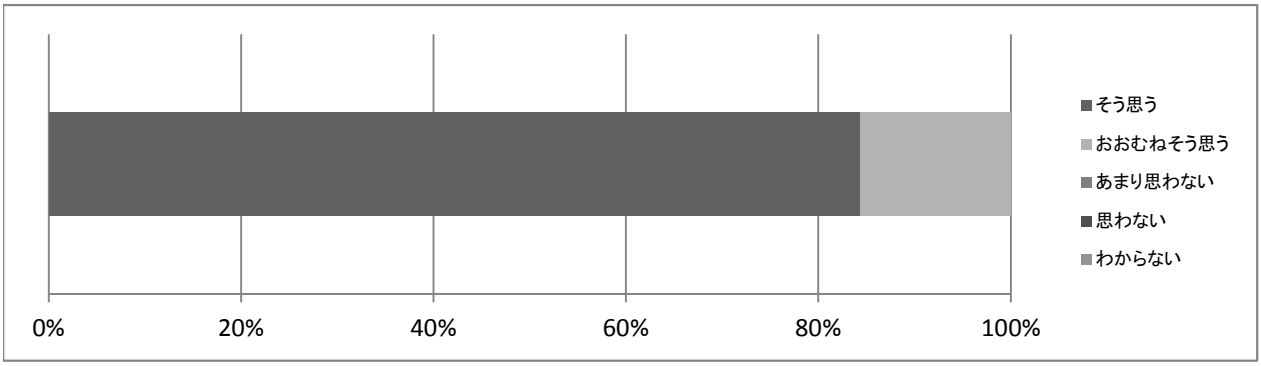
※ 全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校はブロックで組織している推進組織（ブロックにより名称は異なる）が小中一貫教育の推進に役立っていると意識している。

各中学校ブロックで推進組織は確立されており、小中一貫教育の推進に必要である。

2　各校の小中一貫教育コーディネーターの役割は、小中一貫教育の推進に役立っている。



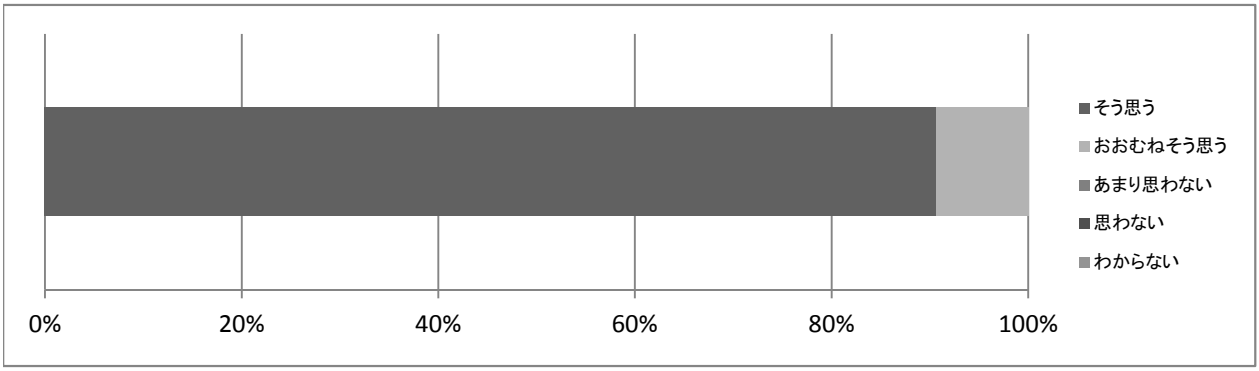
※ 全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校はチーフコーディネーターを要として各校コーディネーターが各中学校ブロックの取組実施にあたって大きな役割を果たしていると意識している。

小中一貫教育チーフコーディネーター並びに小中一貫教育コーディネーターの存在は小中一貫教育推進に必要である。

３ 中学校ブロックの教科連携教員・小中連携加配教員の役割は小中一貫教育の推進に役立っている。



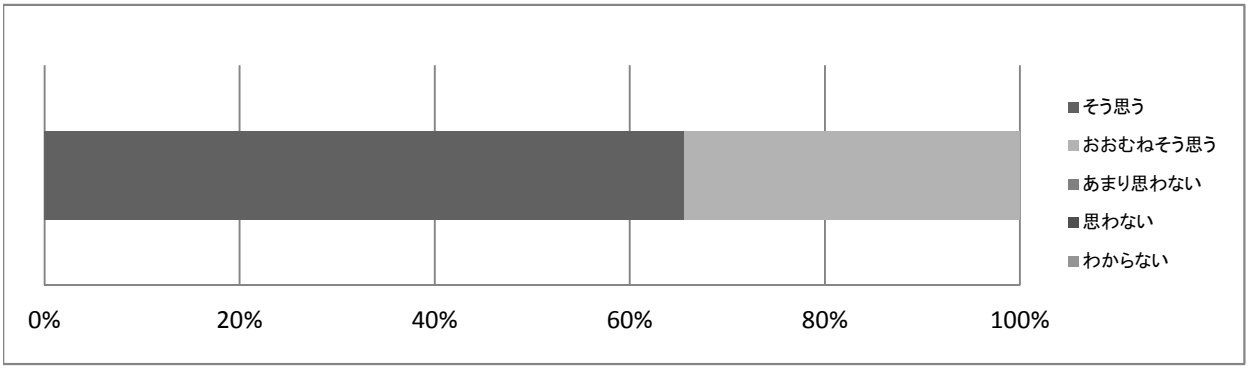
※ 全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校は教科連携教員や小中連携加配教員による中期の児童生徒（小学校５、６年生、中学校１年生）への指導を通じて、小学校から中学校へのなめらかな接続を図り、「中１ギャップ」解消の大きな手立てとなっていると意識している。

教科連携教員や小中連携加配教員は小中一貫教育推進に必要である。

４ 中学校ブロック内の授業や指導の様子を参観することは、児童生徒理解や自校での指導に役立っている。



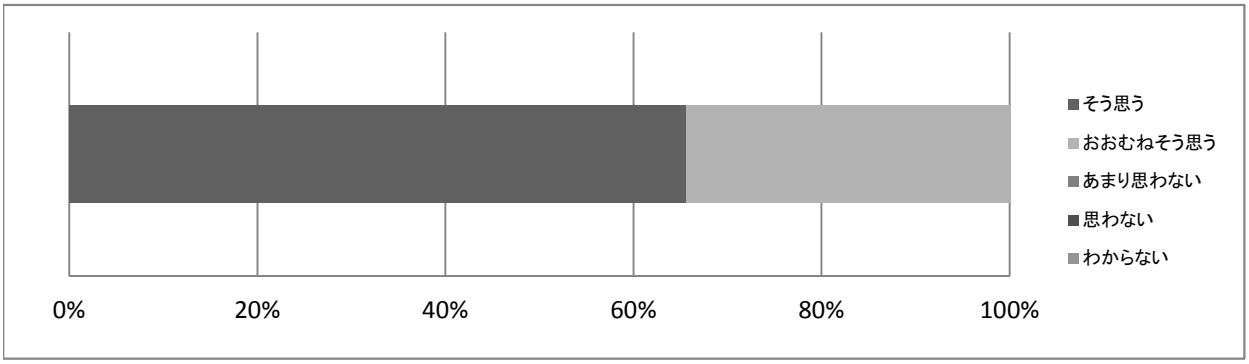
※ 全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

【学校】

○ 学校は小・中学校の教員が相互に授業参観等を実施することは、異校種間の児童生徒理解等に有効であると意識している。

小中一貫教育を推進するにあたり、小・中学校教員が相互に授業を通して交流・研修を実施することは児童生徒理解を進め、指導に役立っている。

５ 中学校ブロックで行う合同研修会は、児童生徒理解や自校での指導に役立っている。



※ 全ての学校が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

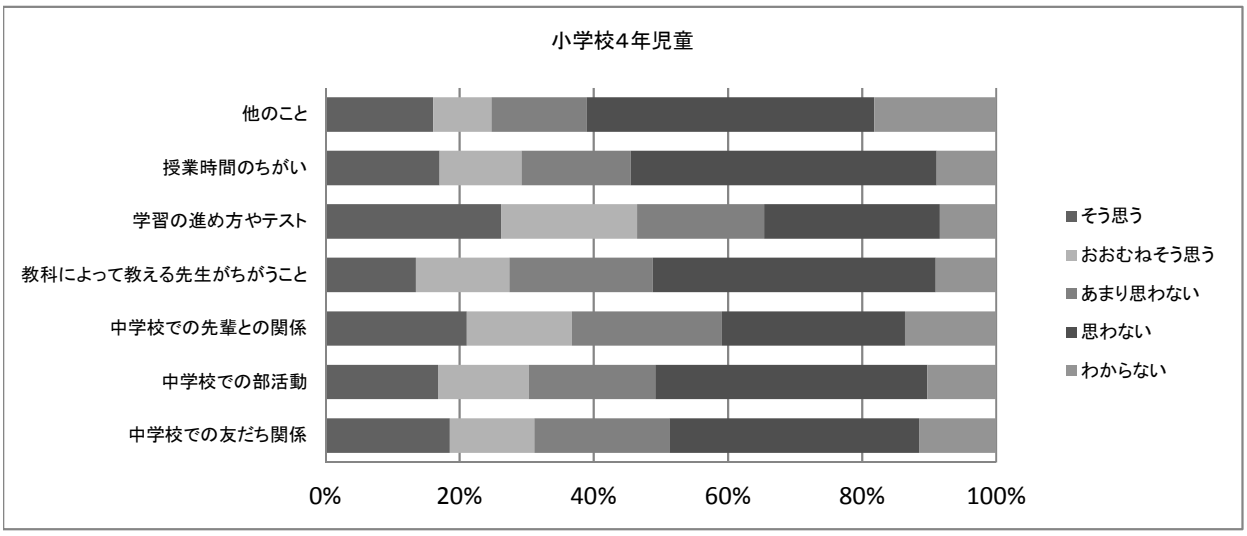
【学校】

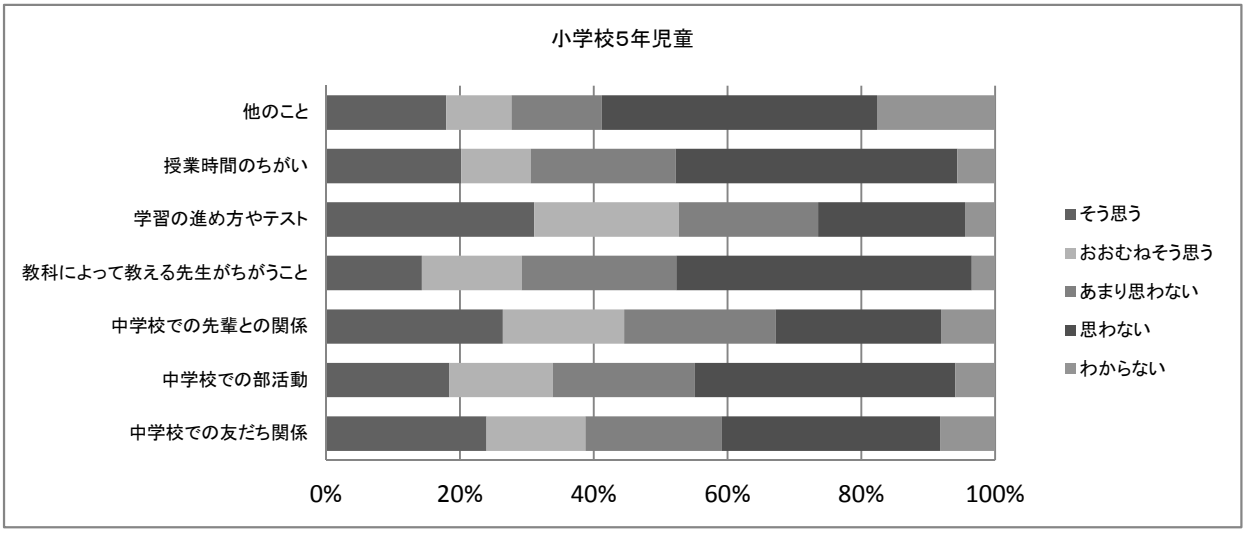
○ 学校は小・中学校教員の合同研修会は、ブロック内の児童生徒理解や９年間を見通した系統的・継続的学習指導を行うために有効であると意識している。

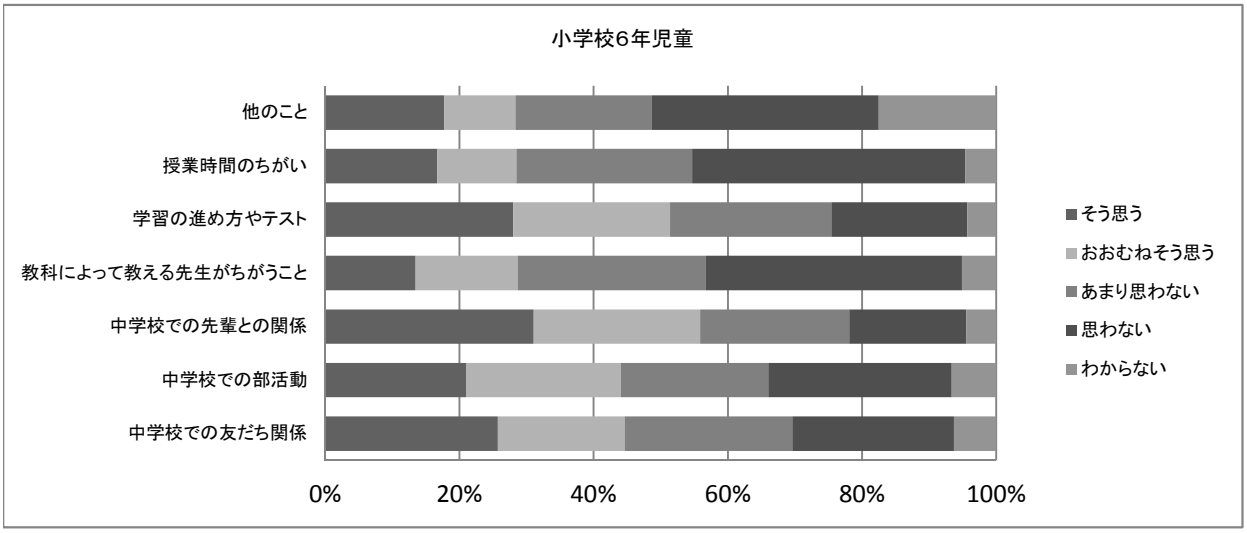
小・中学校教員が合同で研修会を実施することは児童生徒理解を進め、指導に役立っている。今後はより理解を深め、指導力を向上させる取組として、事例研究会等の研究会型の交流を積極的に進めることが必要である。

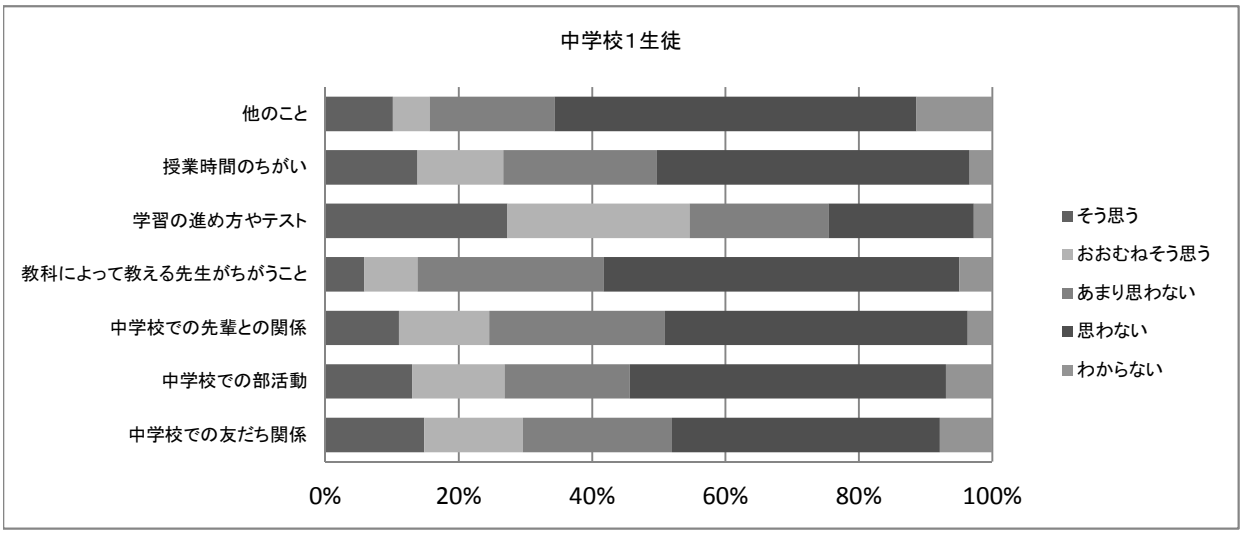
４　中学校入学に係る心配や不安、悩み、戸惑いなどについて

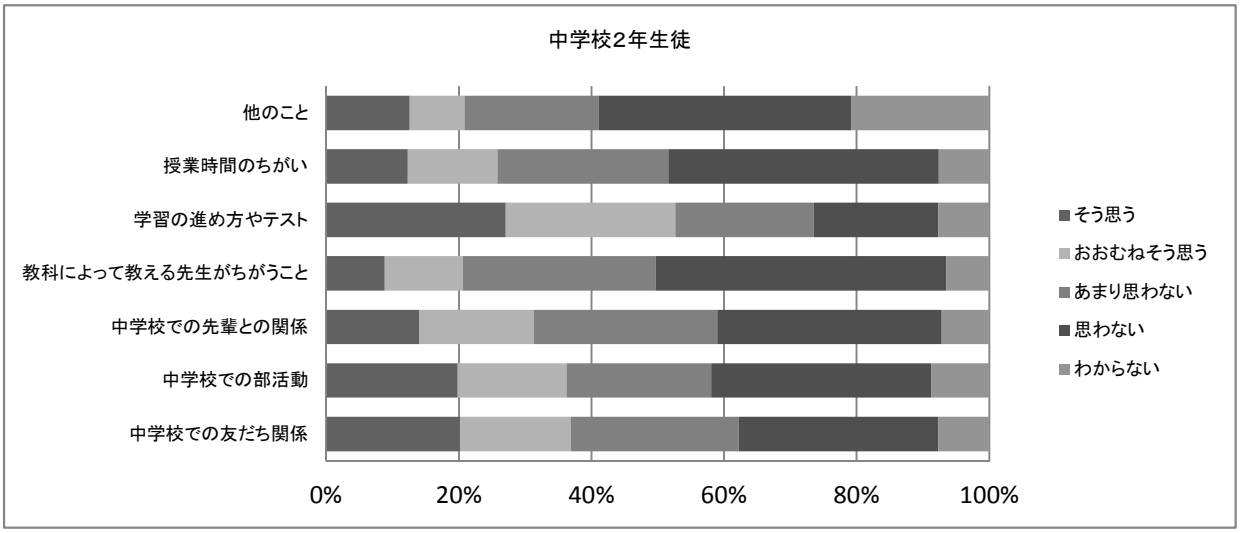
児童生徒　　中学校入学に向け、心配や不安に思うことがありますか。〔小学校〕
中学校入学直後、悩んだり、とまどったりしたことはありましたか。〔中学校〕











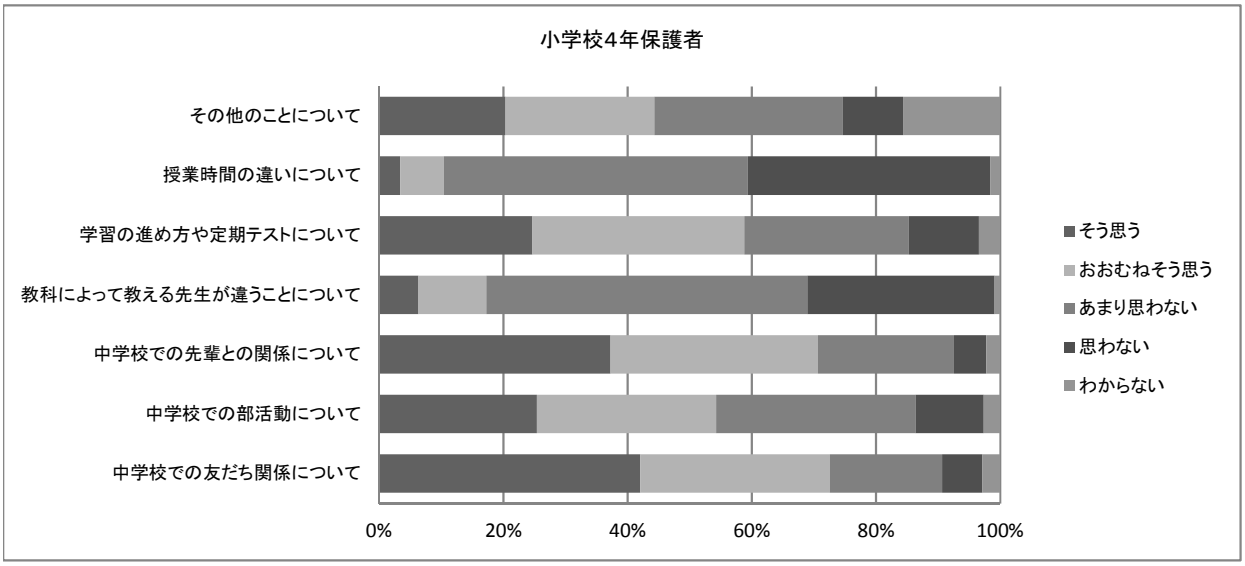
※ 中学校入学に係る心配や不安、悩み、戸惑いについての設問について、小学校６年生が最も不安傾向を示し、中学校１年生で不安傾向は減少している。

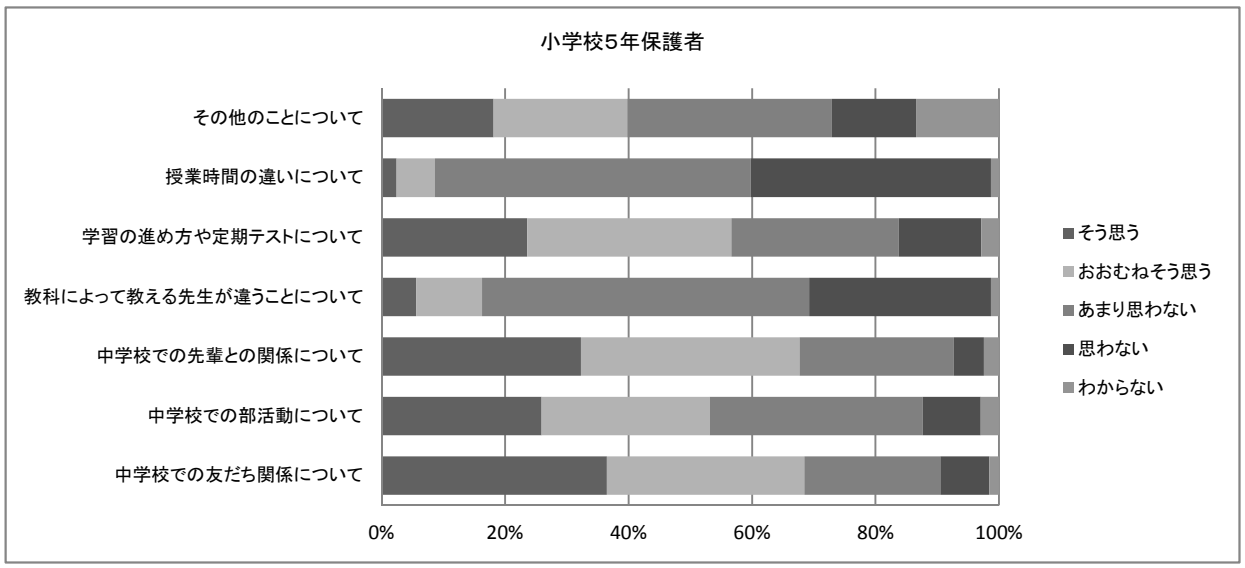
※ 心配や不安、戸惑いが大きい項目は「中学校での友だち関係」「中学校での先輩との関係」「学習の進め方や定期テスト」である。人間関係の不安については中学生において減少しているが、学習についてはどの学年においても不安傾向を示している。

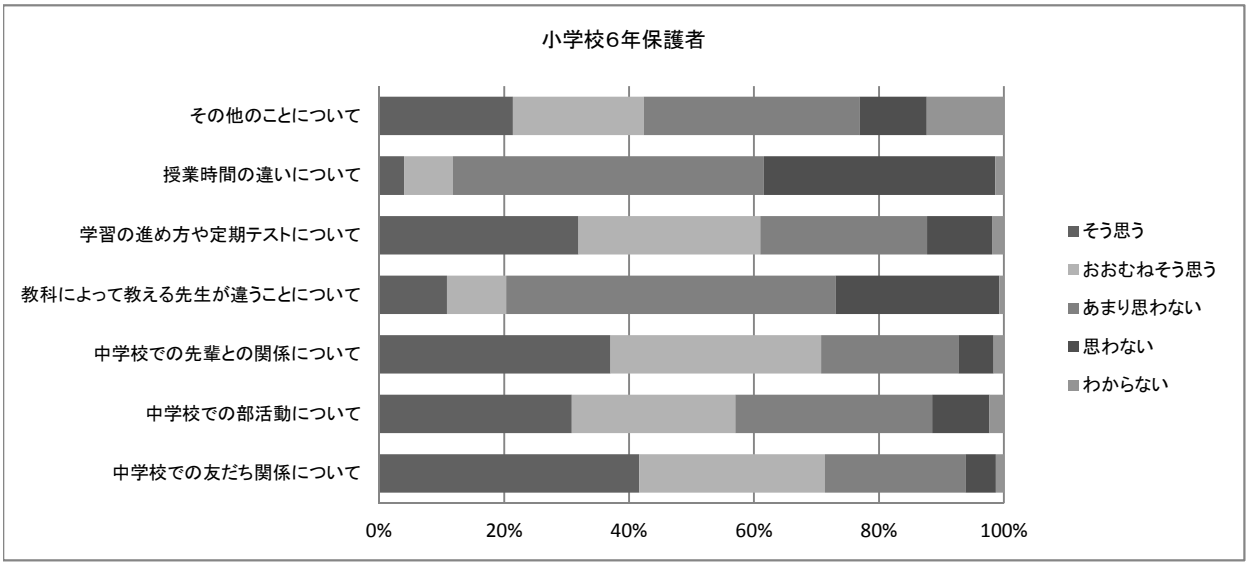
【児童生徒】

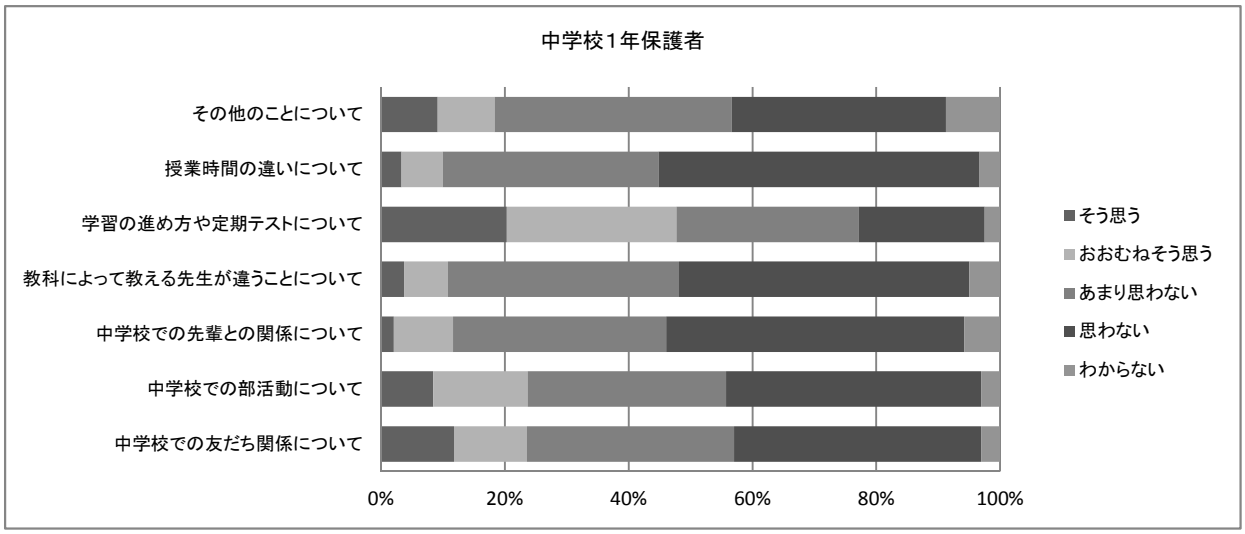
○ 「教科によって教える先生が違う」ことについてはどの学年においても不安傾向は低く、小学校高学年においての教科担当制が定着していることが伺える。

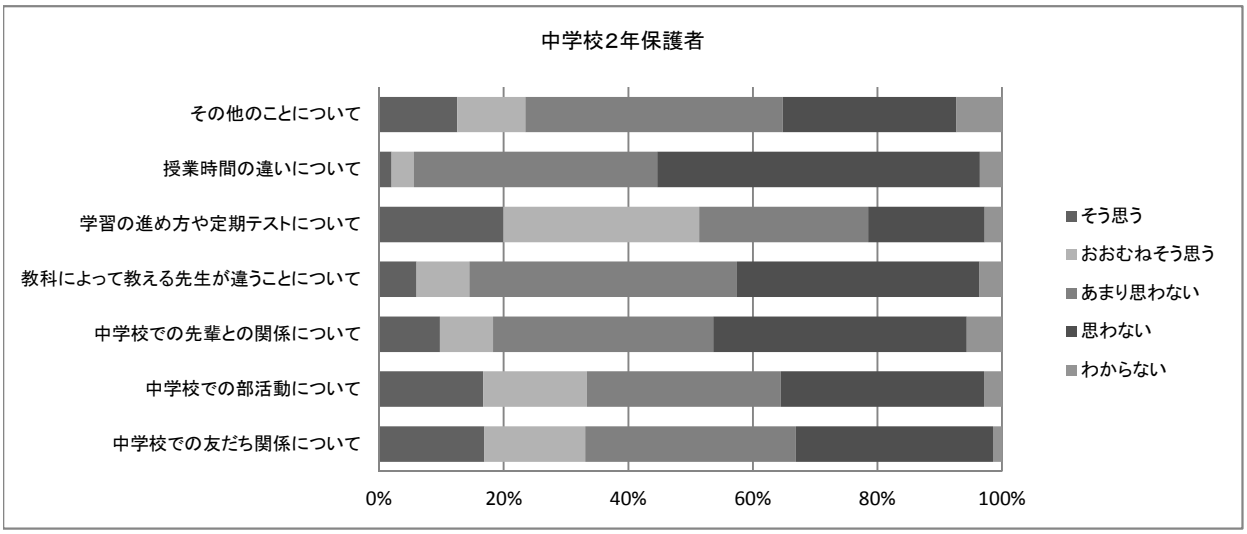
保護者　お子さんの中学校入学に向け、保護者として心配や不安に思っておられることはありますか。〔小学生保護者〕
お子さんが、中学校入学直後、悩んだり、戸惑ったりしていたと感じたことはありましたか。〔中学生保護者〕

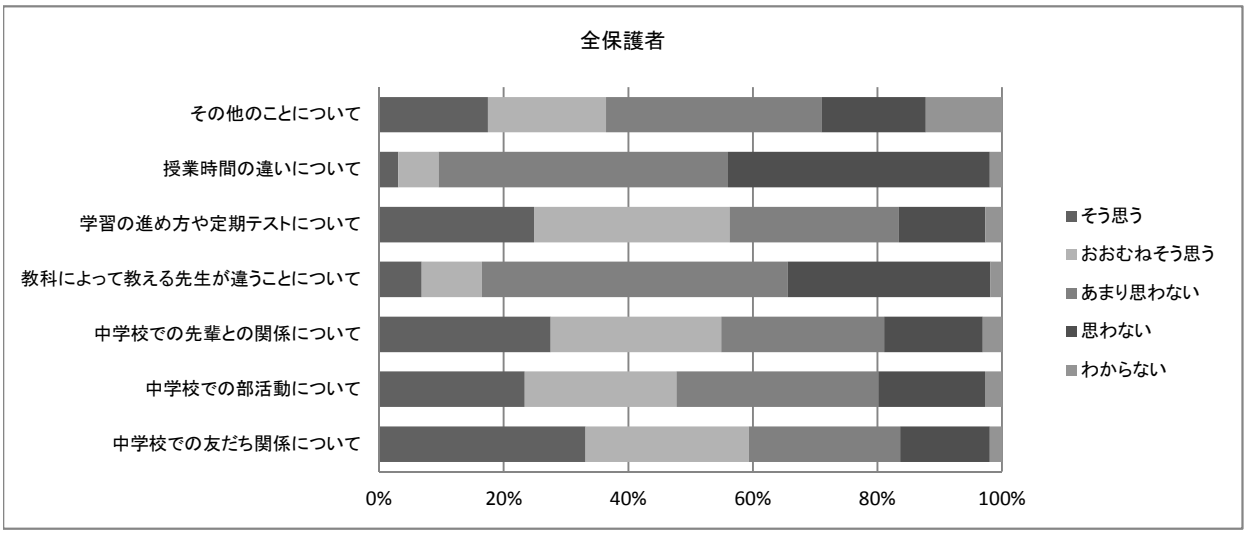










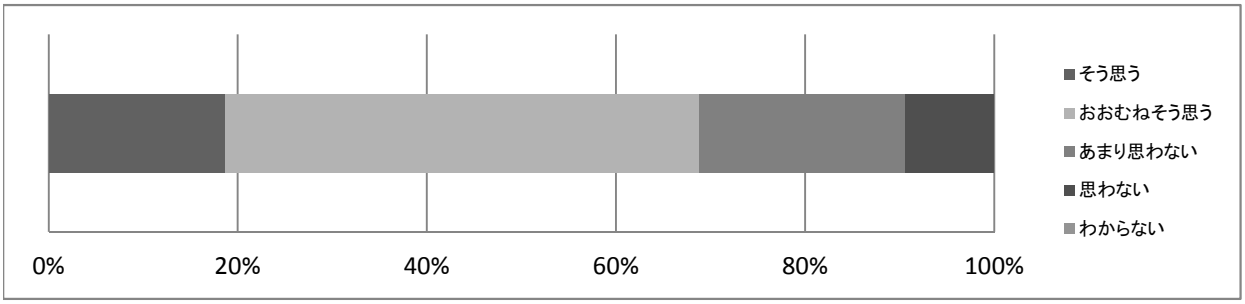


※ 中学校入学に係る心配や不安、悩み、戸惑いについての設問において、小学生保護者は不安傾向を示し、中学生保護者では不安傾向は減少している。

※ 心配や不安、戸惑いが大きい項目は「中学校での友だち関係」「中学校での部活動」「中学校での先輩との関係」「学習の進め方や定期テスト」であり、「部活動」を除き、児童生徒の不安傾向と共通している。「教科によって教える先生が違う」についての不安傾向が少ない点についても児童生徒の不安傾向と共通している。

○ 保護者は子どもの中学校入学に向けて「人間関係」「学習」について不安を持っている。

学校　いわゆる中1ギャップを感じることがある。

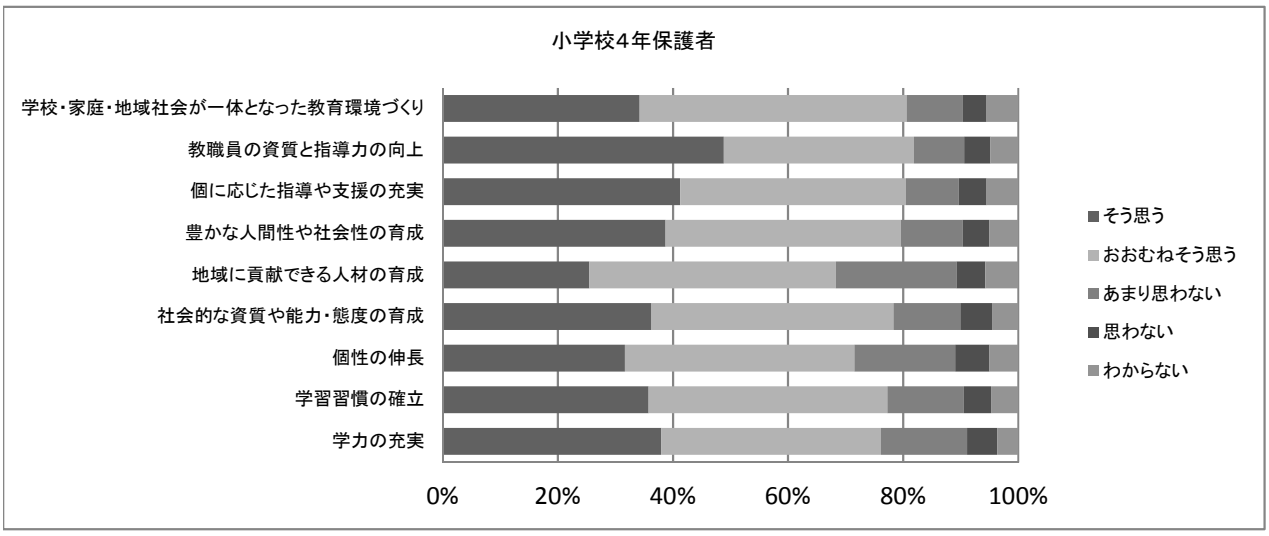


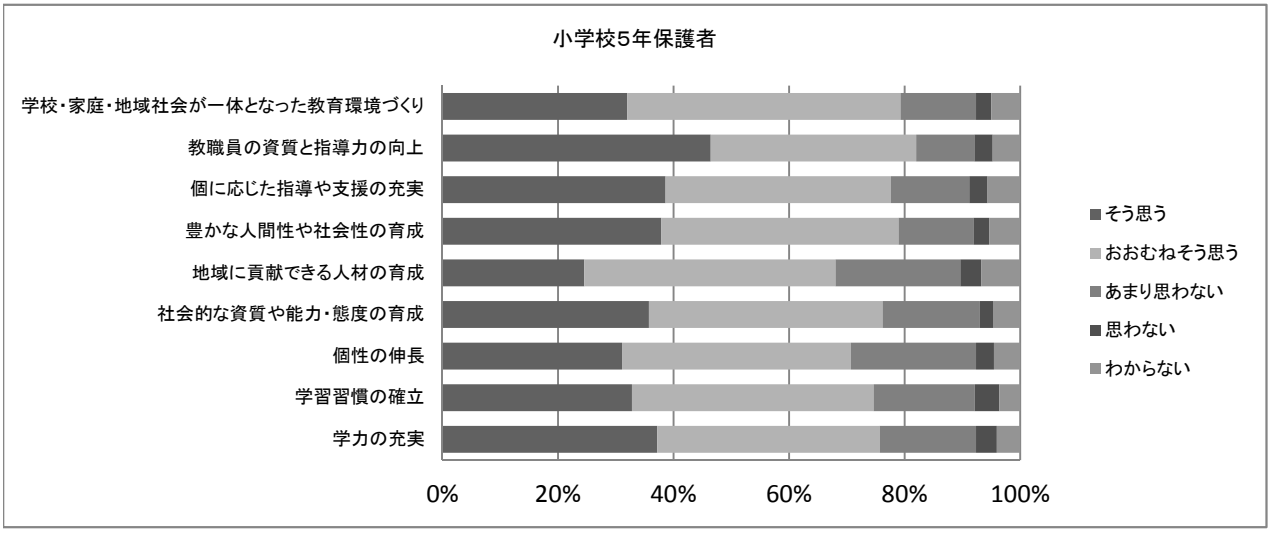
【学校】
○ 7割程度の学校が「中１ギャップ」を感じている。

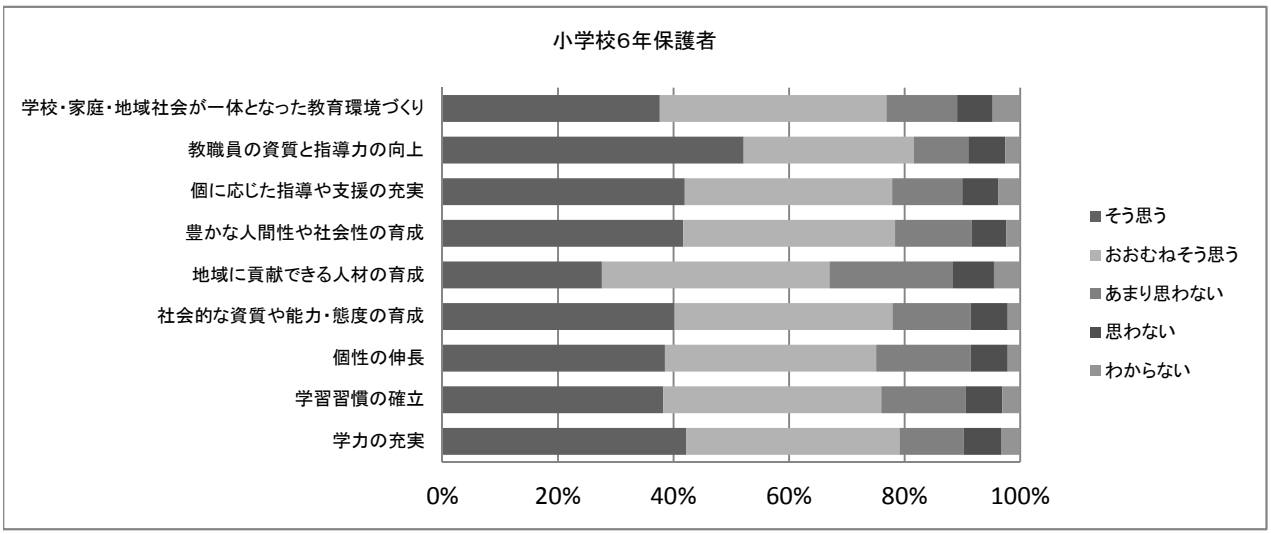
児童生徒、保護者は「中学校での友だち関係」「中学校での先輩との関係」「学習の進め方や定期テスト」について不安を感じている。この点から、小中一貫教育の取組において児童生徒間の交流並びに９年間を見通した系統的・継続的学習指導についての取組の充実が求められている。
中学生保護者の不安が減少している点からは小学生保護者に対して情報を積極的に伝えることによりその不安は減少していく可能性があると言える。
学校においても７割が「中１ギャップ」を感じており、今後も「中１ギャップ」解消を目指した取組について工夫・改善を行いながら充実させていく必要がある。

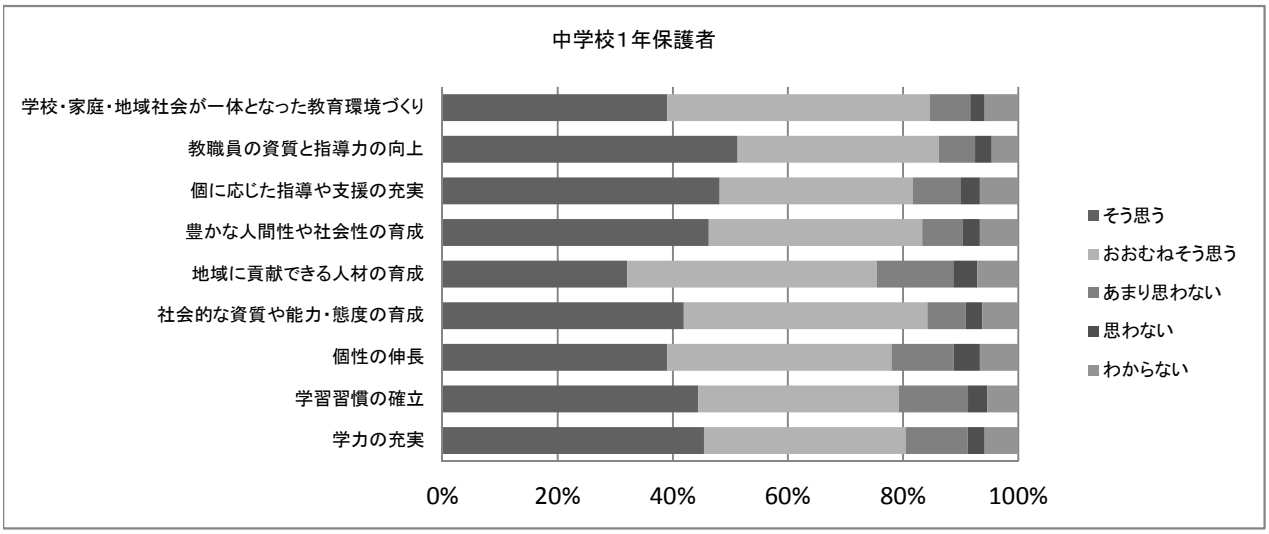
５ 小中一貫教育の取組を進めることにより期待する成果について

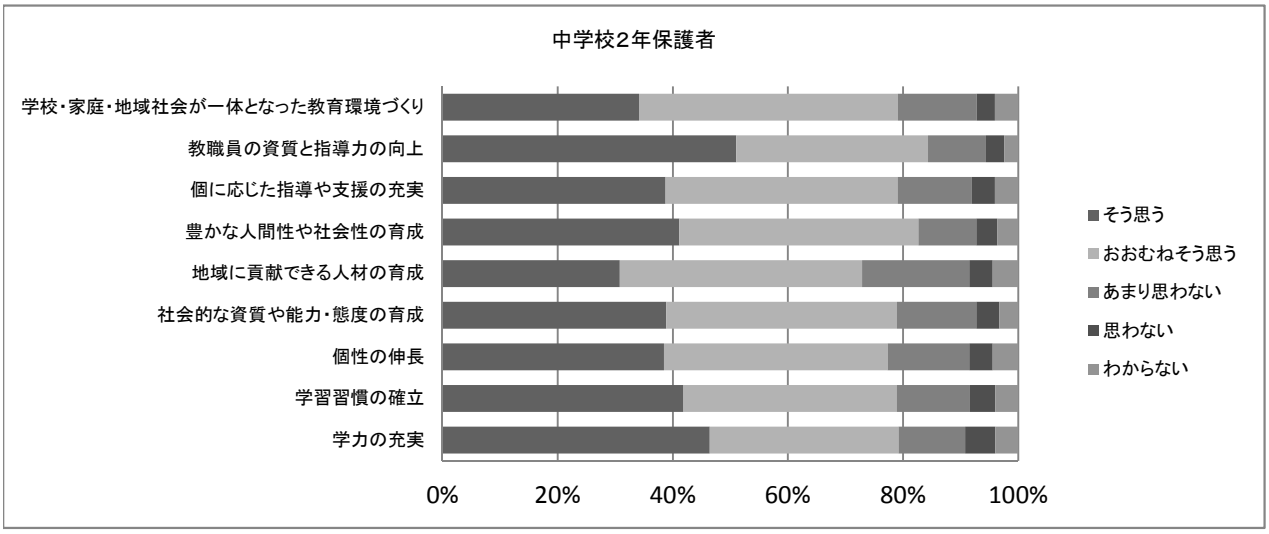
保護者　小中一貫教育を行うことにより、どのような成果を期待しますか。

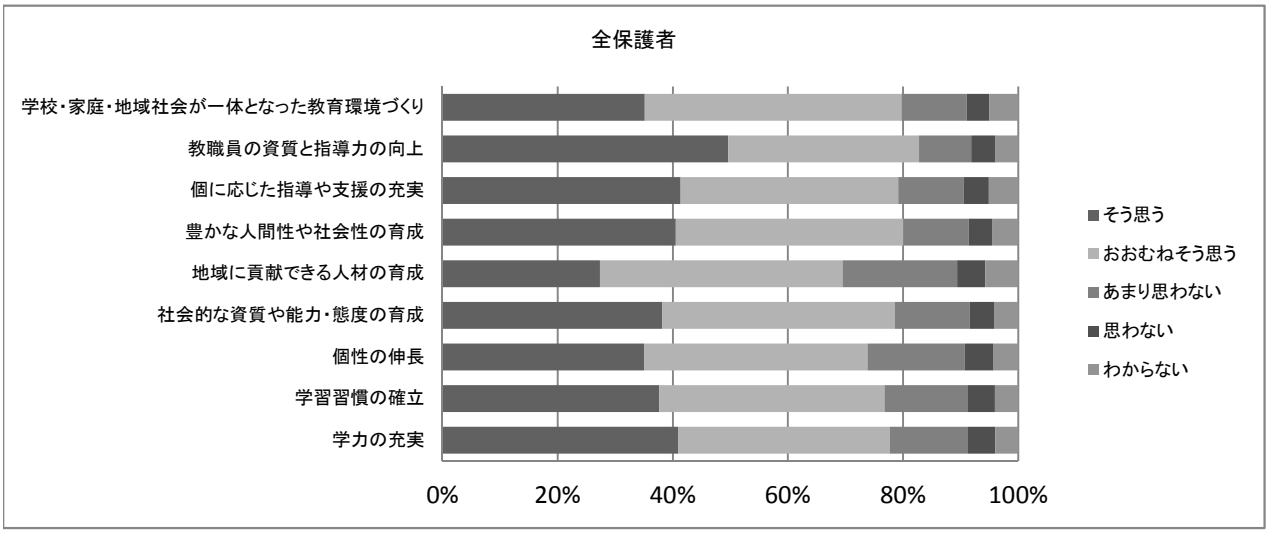












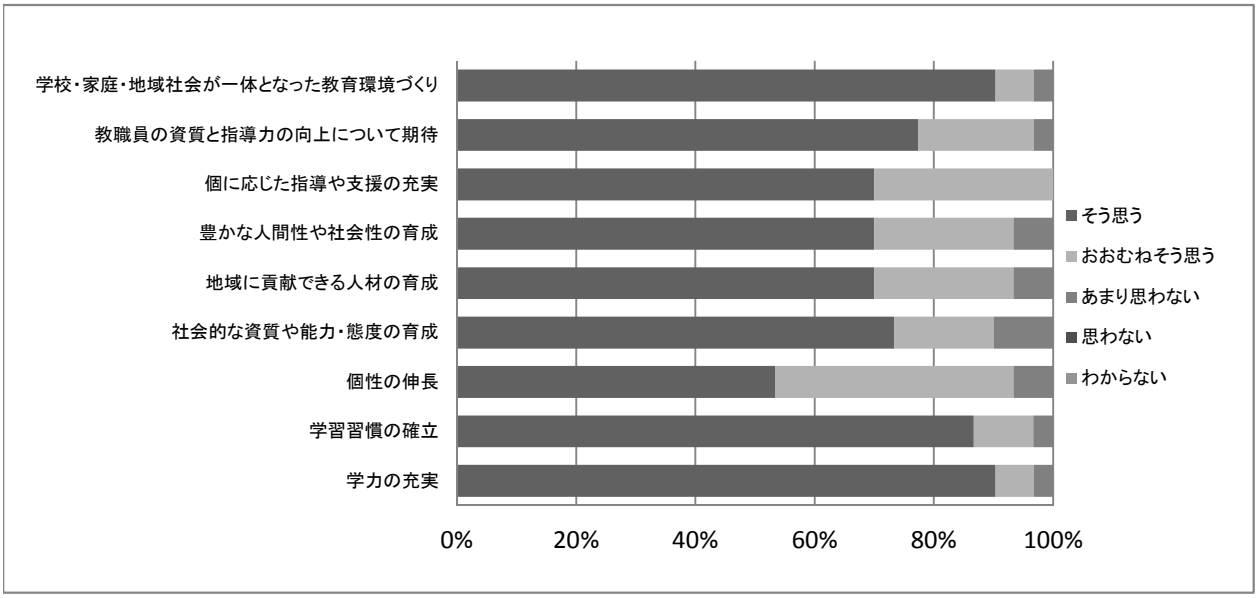
※ 保護者は、ほぼ全ての学年、項目において８割程度が「そう思う」「おおむねそう思う」と回答している。

※ 「学力の充実」「教職員の資質と指導力の向上」「個に応じた指導の充実」「豊かな人間性や社会性の育成」が「そう思う」との回答割合が高い４項目である。特に「教職員の資質と指導力の向上」への期待が大きい。

【保護者】

○ 「教職員の資質能力向上」をはじめとして保護者の小中一貫教育に対する期待は大きい。

学校　小中一貫教育を行うことにより、どのような成果を期待しますか。



※ 学校は「学力の充実」「学習習慣の確立」「学校・家庭・地域社会が一体となった教育環境づくり」の３項目について強く成果を期待している。

【学校】

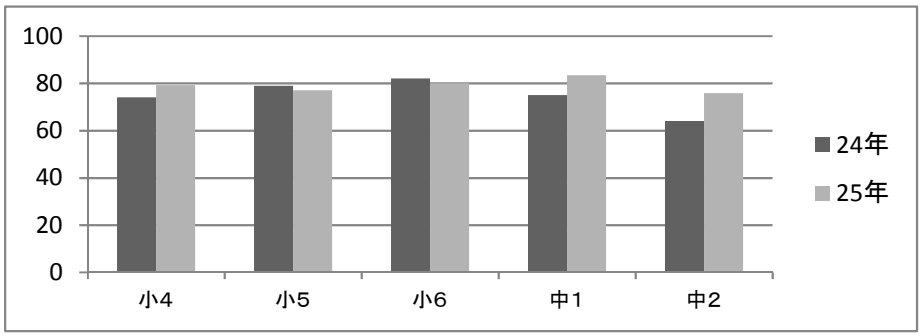
○ 全ての質問項目において９割をこえる学校が小中一貫教育での成果を期待し、小中一貫教育にかける期待は大きい。

保護者、学校の小中一貫教育に対する期待値は大変高く、その中でも保護者、学校が共通して、強く期待している（そう思う）項目は「学力の充実」「教職員の資質能力と指導力の向上」である。これは小中一貫教育の取組において小・中合同研修を通じて、教職員の資質能力が向上し、結果として学力の充実・向上を期待していると言える。

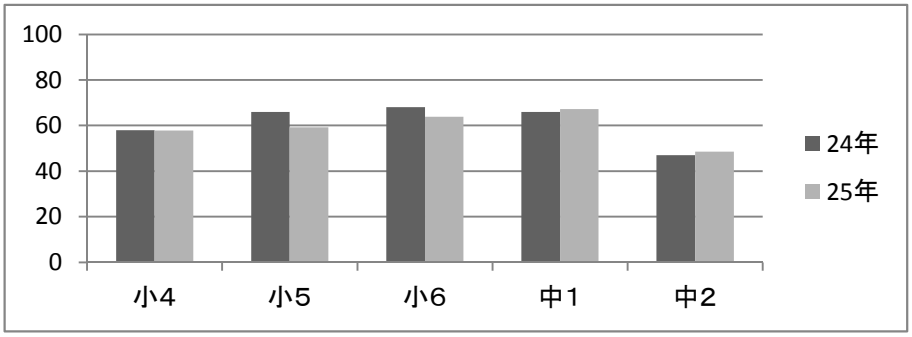
今後も、各ブロックにおける小・中学校合同研修をはじめとした取組によって教職員の資質能力を向上させ、系統的指導の充実を図り、学力の充実・向上等をめざすことが望まれる。

６ 昨年度との比較について　　肯定的回答割合の昨年度との比較

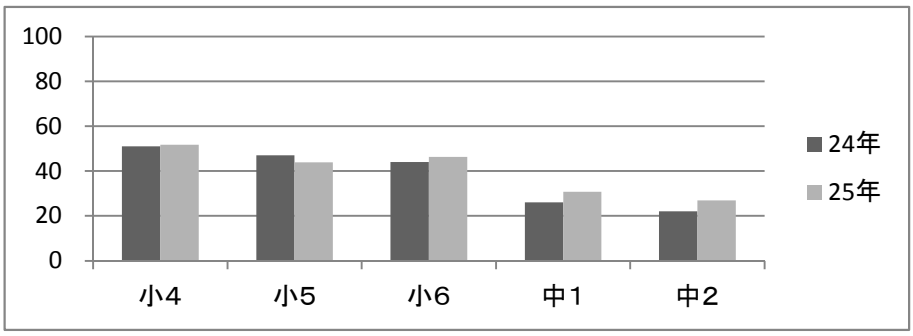
児童生徒　授業はこれまで習ったことやこれから習うことにもふれて進められていると思う。



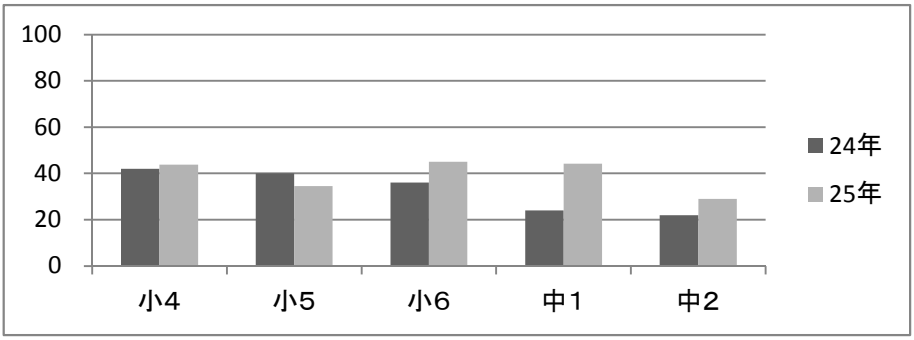
児童生徒　担任の先生だけでなく、他の学級や学年の先生など多くの先生と話したりすることが多くなっていると思う。〔小学校〕
　担任の先生だけでなく、他の学級・学年の先生や小学校の先生など多くの先生とかかわることが多くなっていると思う。〔中学校〕



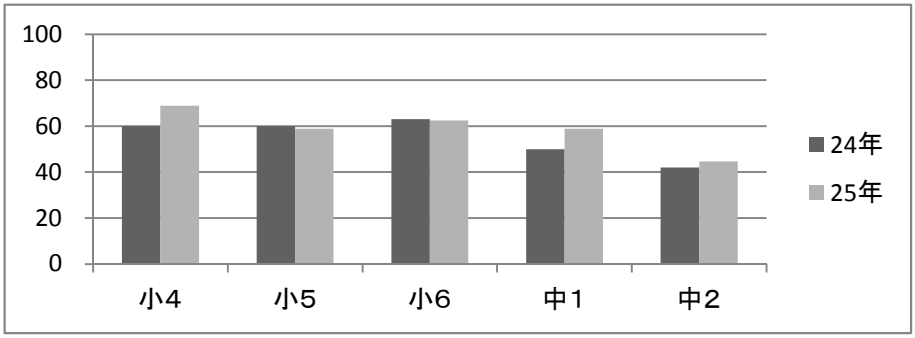
児童生徒　地域を知ったり、地域の人たちといっしょに活動したりする学習が多くなっていると思う。



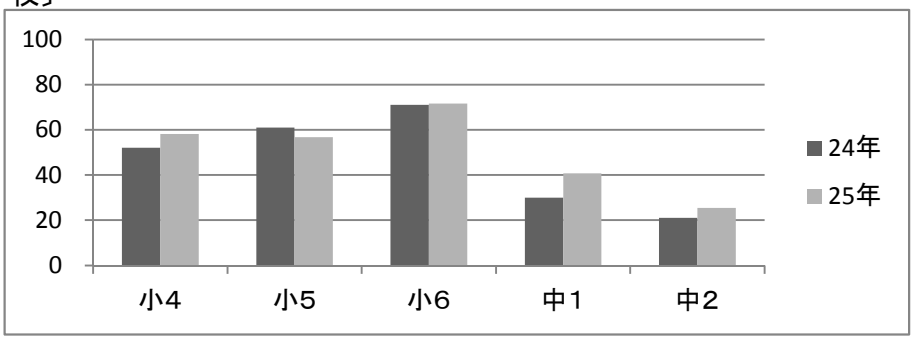
児童生徒　他の学年や近くの小学校、中学校の人といっしょに活動するようになっていると思う。〔小学校〕
　他の学年や近くの小学校の人といっしょに活動するようになっていると思う。〔中学校〕



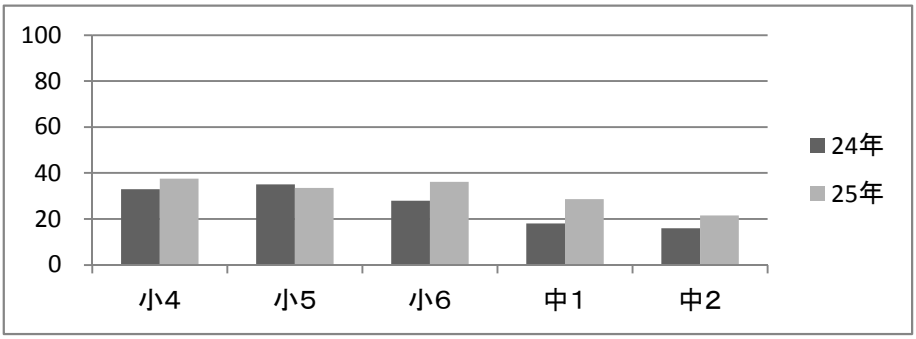
児童生徒　自分のことを先生がしっかりわかってくれるようになったと思う。



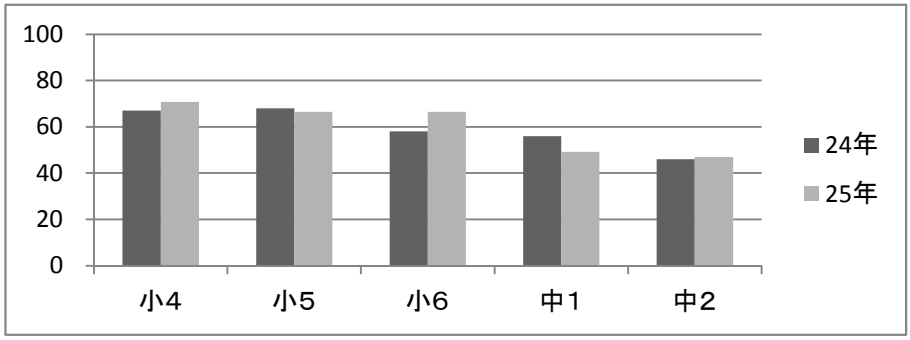
児童生徒　小学生や中学校の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う。〔小学校〕
小学生の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う。〔中学校〕



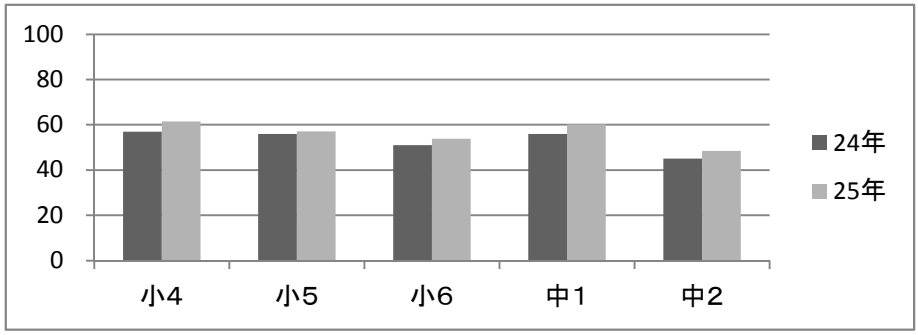
児童生徒　小・中学校がいっしょになった地域での行事やPTA・育友会行事が増えたと思う。



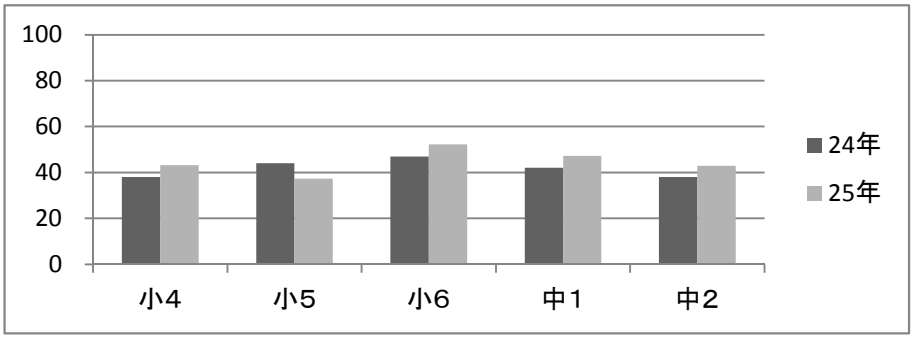
児童生徒　担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う。〔小学校〕
小学校でも、担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらったほうがよいと思う。〔中学校〕



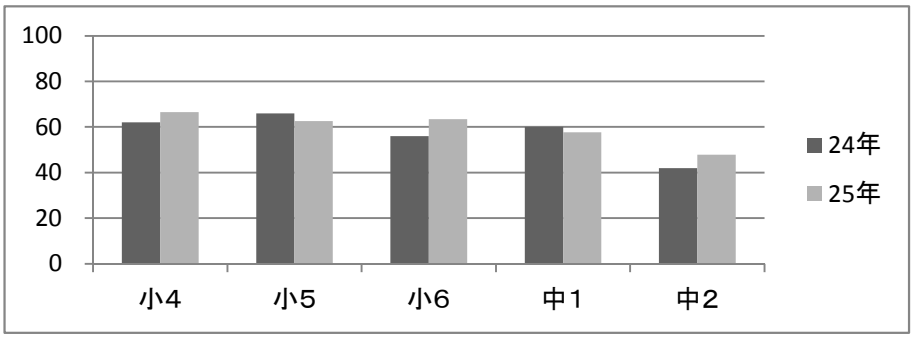
児童生徒　小・中学校がいっしょになって行事などをすることに心配はない。



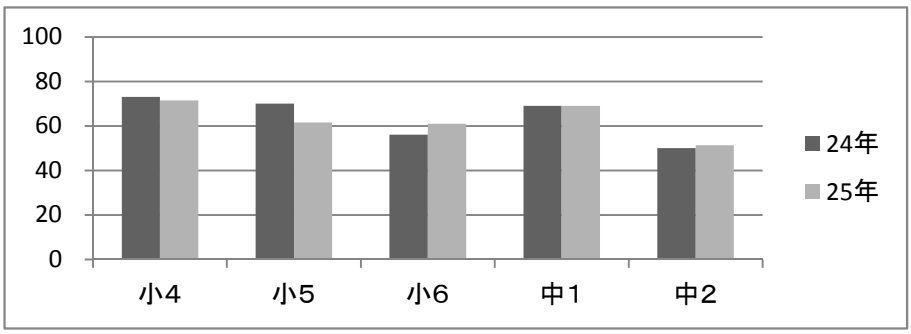
児童生徒　近くの小学校や中学校のようすが、おたよりや掲示物などでわかるようになった。〔小学校〕
近くの小学校のようすが、学校通信や掲示物などでわかるようになった。〔中学校〕



児童生徒　小学生と中学生がいっしょに活動することは大切だと思う。

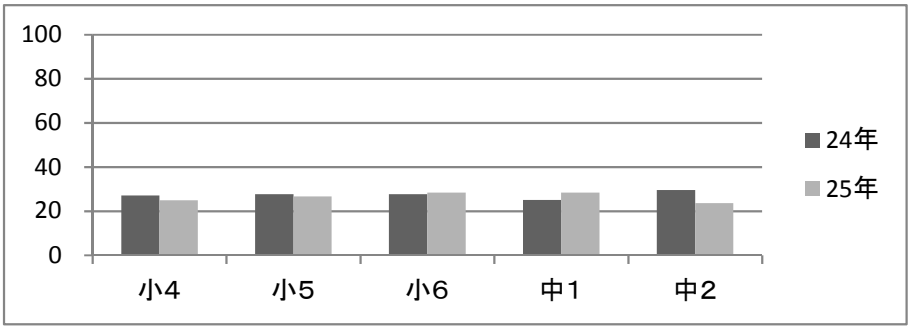


児童生徒　上級生や中学生を、すごいと感じるようになった。〔小学校〕
小学生に対して、中学生としての自信と自覚がでてきた。〔中学校〕

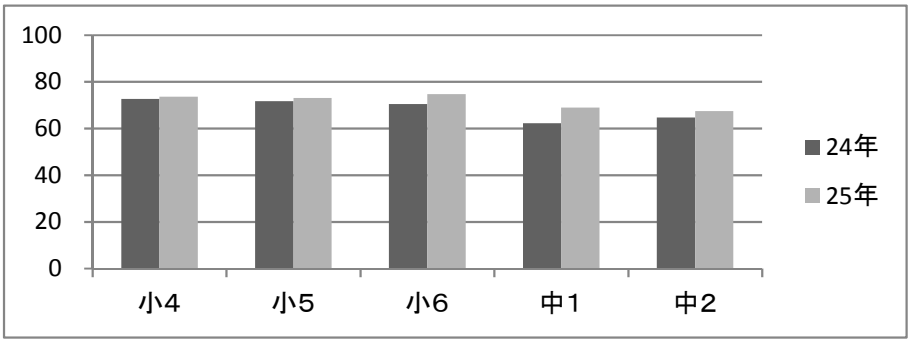


【児童生徒】
○　「系統的学習」「異校種、異学年交流」「小・中教職員の交流」「小・中が交流した地域行事」の４項目において、肯定的回答割合が明らかな差があると考えられる10ポイントを超えて増加した。

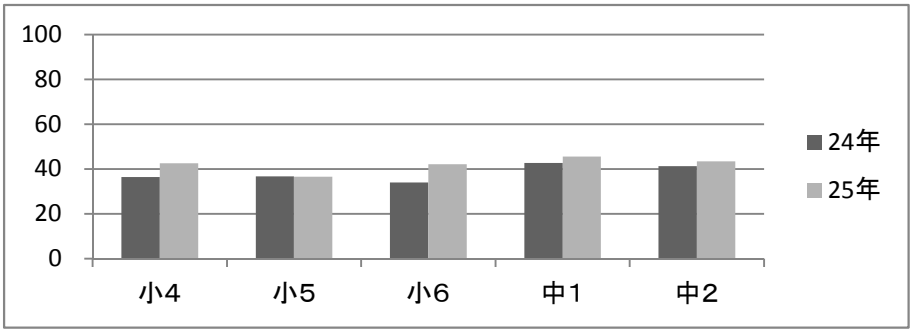
保護者　中学校ブロックでの地域の集まりやPTA・育友会活動が増えたと思う。



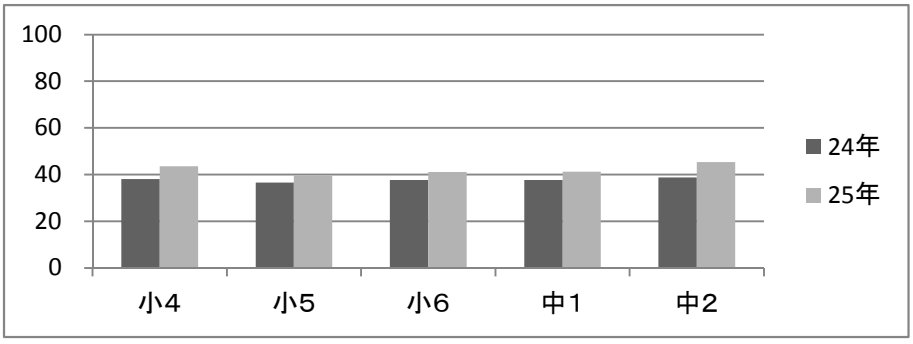
保護者　小学校でも、担任以外の先生や中学校の先生にも我が子を指導してほしいと思う。



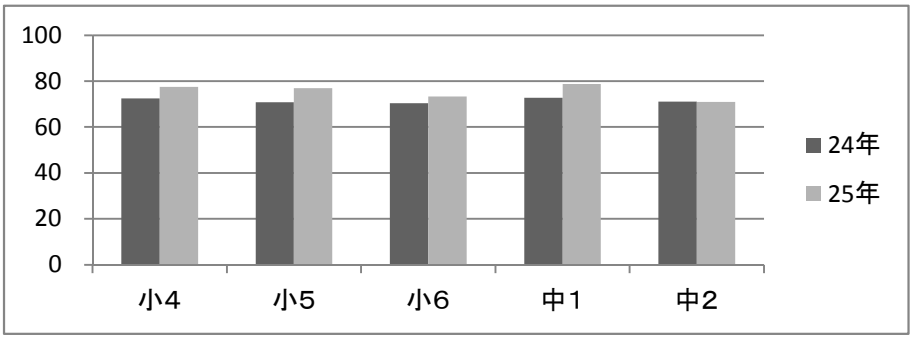
保護者　小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない。



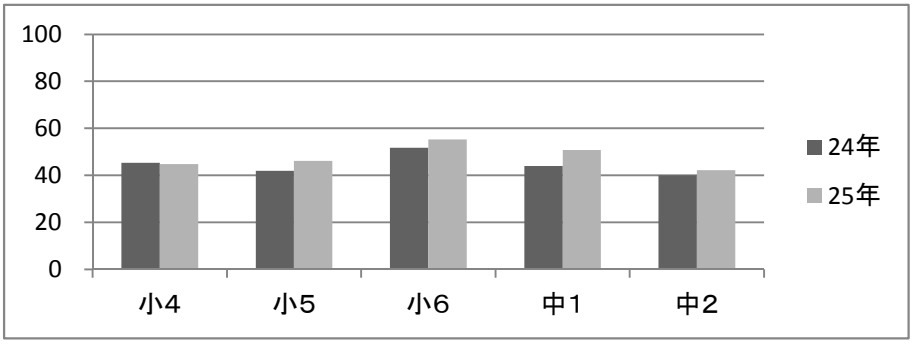
保護者　リーフレットやたより、インターネットなどで、宇治市の小中一貫教育の取組状況を知ることができている。



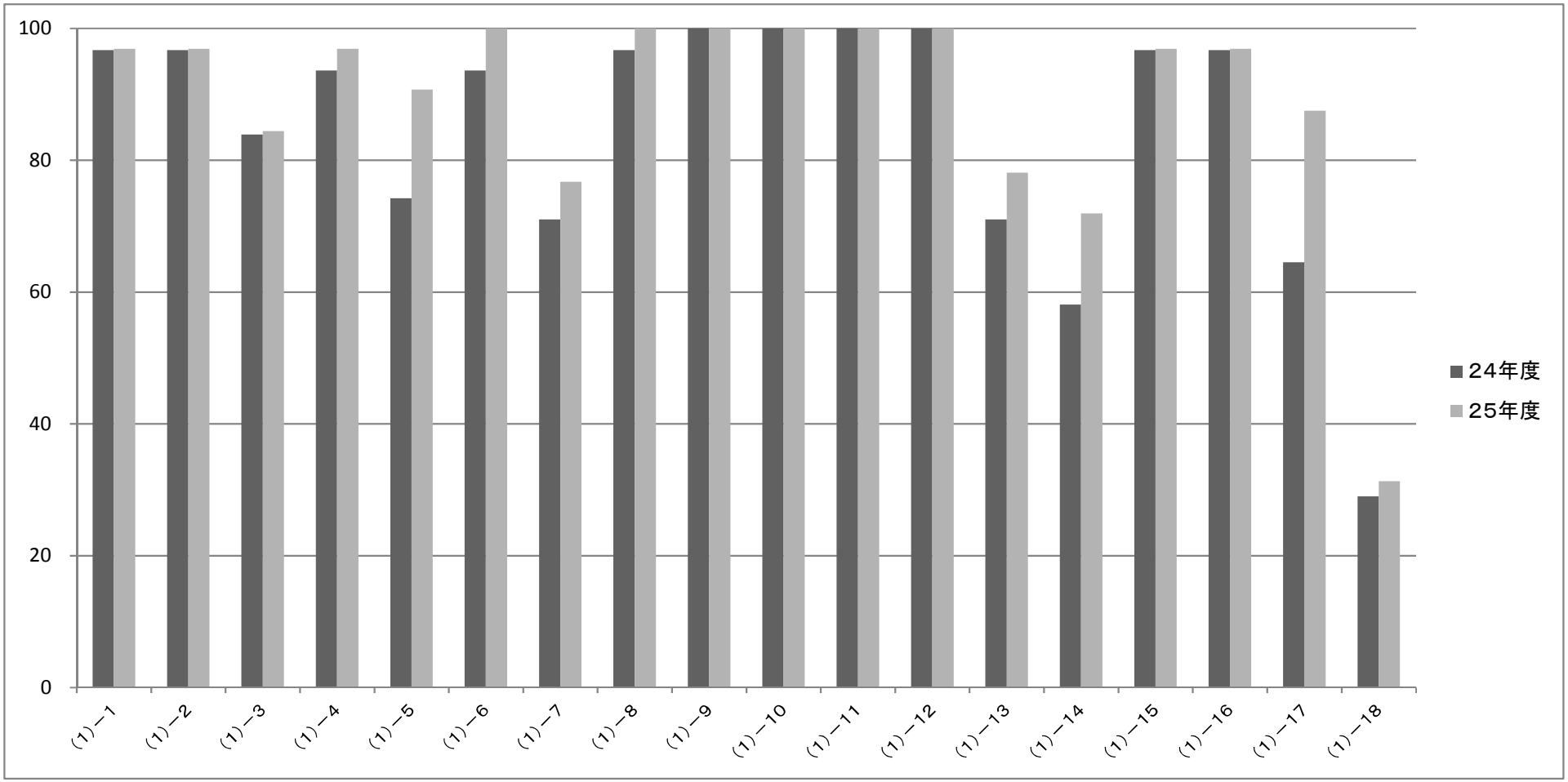
保護者　我が子の成長にとって、小学生と中学生の交流活動や合同行事などを行うことはよいことだと思う。



保護者　我が子は交流活動などを通して、上級生をよき兄、姉と感じたり、よき兄、姉になろうとしたりするようになったと思う。



【保護者】
○全体の８割の項目で肯定的回答割合が増加している。



【学校】
○肯定的回答割合が減少している項目はなく、「児童生徒理解」「小中一貫教育への不安」「自尊感情の育成」において大きく増加している。

児童生徒

肯定的回答割合の増減では、明らかな差があると考えられる10ポイントを超える増加は４項目において見られた。一方、10ポイントを超える減少は見られなかった。
「系統的学習」「異校種、異学年交流」「小・中教職員の交流」「小・中が交流した地域行事」の４項目において肯定的回答割合が10ポイントを超えて増加したが、その内訳は中学校１年生で３項目、中学校２年生で１項目である。他の項目においても総じて中学生の肯定的回答割合の増加が見られる。中学校２年生においては全ての項目において増加しており、中学校１年生においても９項目が増加している。
試行から全面実施において、特に「中１ギャップ」解消を目指した取組が定着しつつあり、その取組を多く経験した中学生において肯定的回答割合が増加している。

保護者

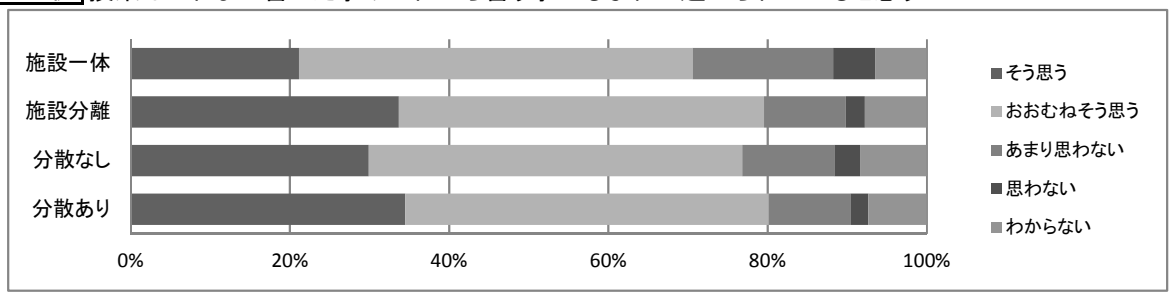
中学生保護者は８割の項目において肯定的回答割合が増加している。総じて中学生保護者の増加ポイントが高く、保護者においても「中１ギャップ」解消を目指した取組により、意識が高まっている。

学校

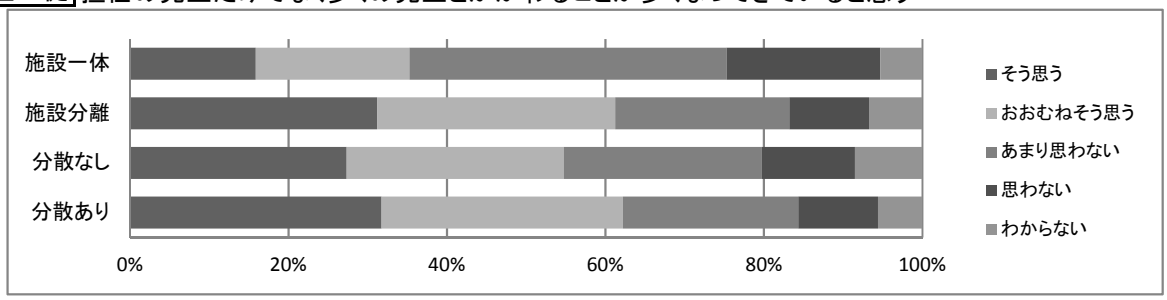
全ての項目において肯定的回答割合の減少は見られない。「児童生徒理解」「小中一貫教育への不安」「自尊感情の育成」の３項目において10ポイントを超える増加が見られる。その３項目は24年度において肯定的回答割合が低い項目であった。学校は小中一貫教育全面実施を通じて、さらに取組の効果を意識していると言える。

7 グループ別の比較について 施設一体型と分離型、分散進学なしとありのグループにおける比較

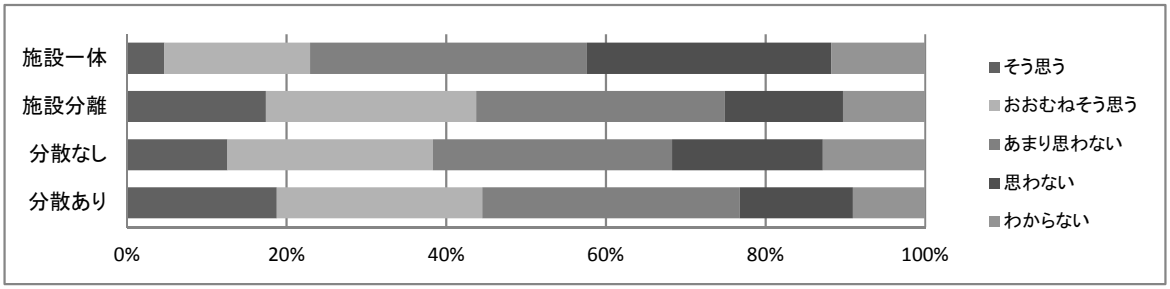
児童生徒 授業はこれまで習った事やこれから習う事にもふれて進められていると思う



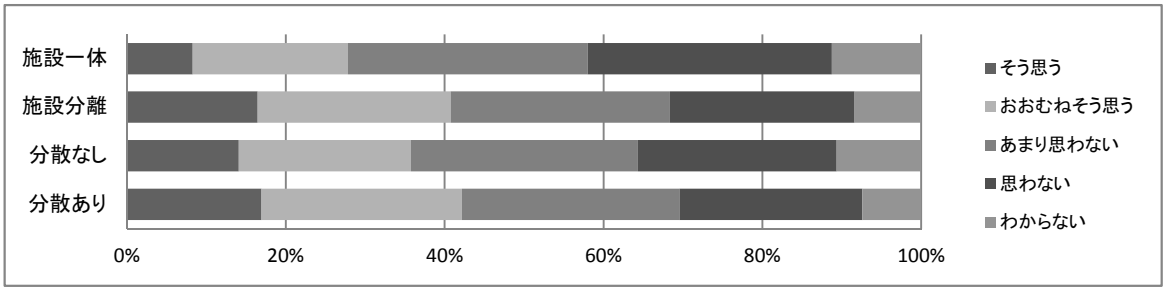
児童生徒 担任の先生だけでなく多くの先生とかかわることが多くなってきていると思う



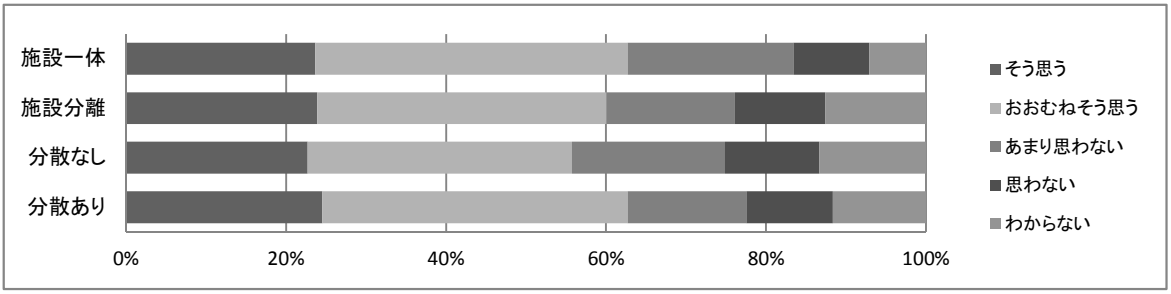
児童生徒 地域を知ったり、地域の人たちといっしょに活動したりする学習が多くなっていると思う



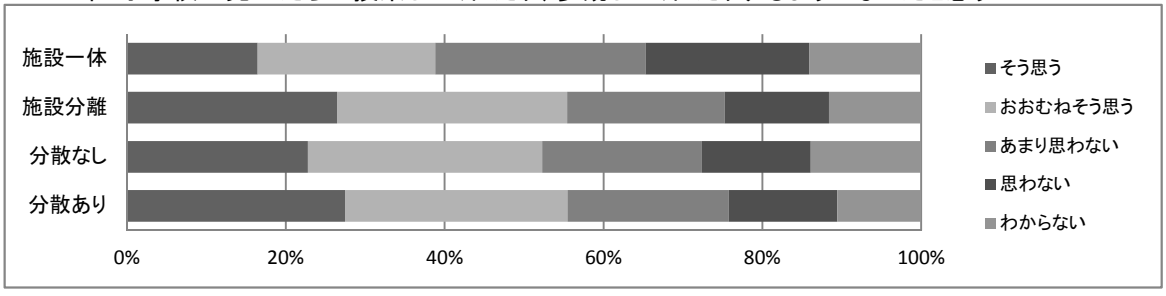
児童生徒 他の学年や近くの小学校の人といっしょに活動するようになっていると思う



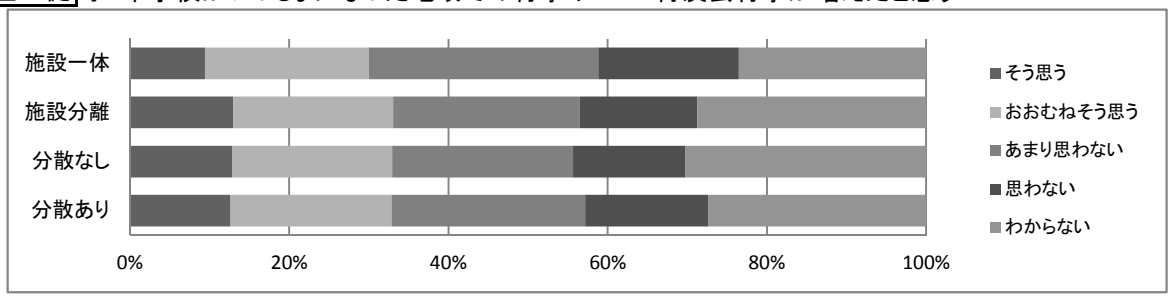
児童生徒 自分のことを先生がしっかりわかってくれるようになったと思う



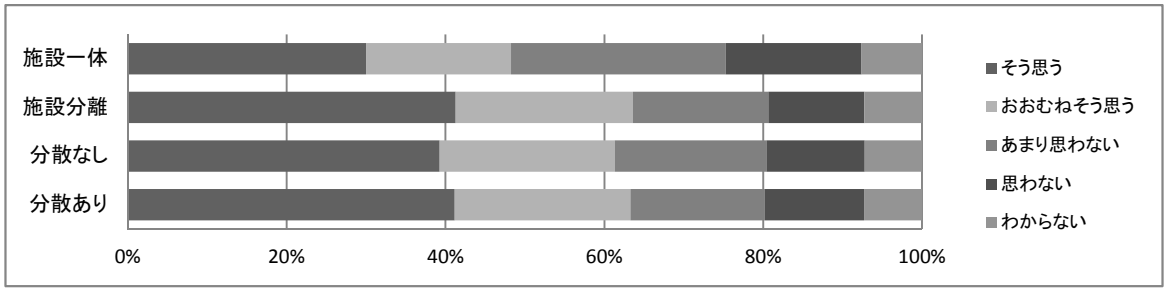
児童生徒 小：小学校や中学校の先生たちが、授業をしてくれたり、参観してくれたりするようになったと思う
中：小学校の先生たちが授業してくれたり、参観してくれたりするようになったと思う



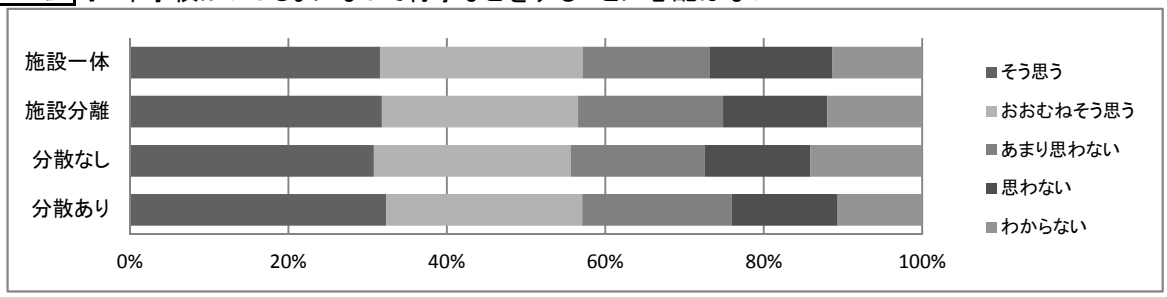
児童生徒 小・中学校がいっしょになった地域での行事やPTA・育友会行事が増えたと思う



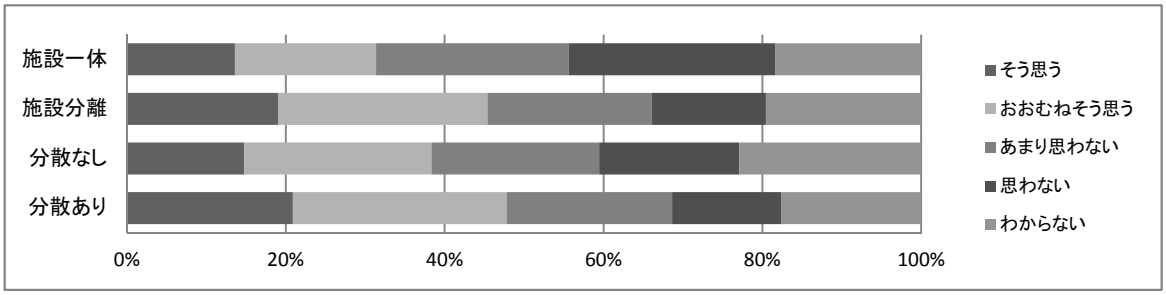
児童生徒 小：担任以外の先生や中学校の先生にも教えてほしいと思う
中：小学生でも、担任以外の先生や中学校の先生にも教えてもらった方がよいと思う



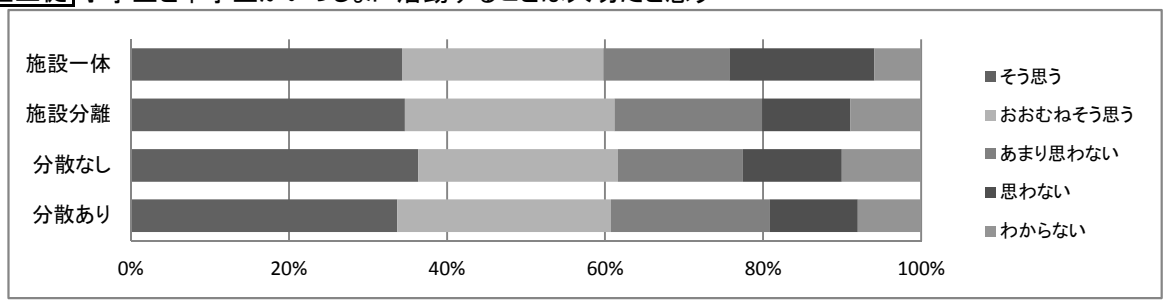
児童生徒 小・中学校がいっしょになって行事などをすることに心配はない



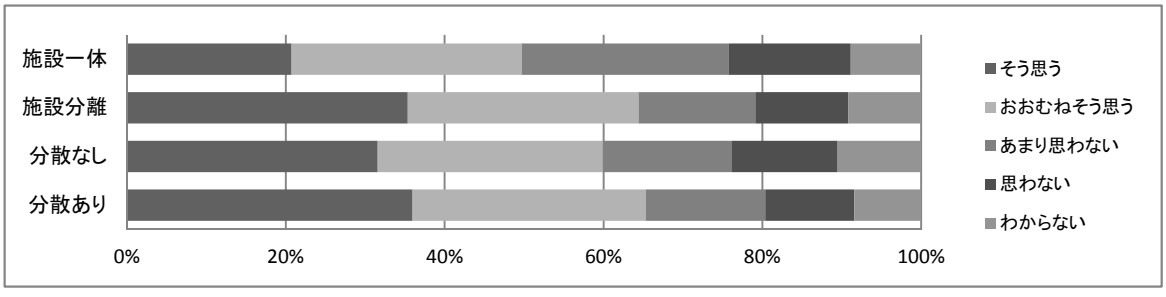
児童生徒 小：近くの小学校や中学校のようすが、おたよりや掲示物などでわかるようになった
中：近くの小学校のようすが、学校通信や掲示物などでわかるようになった



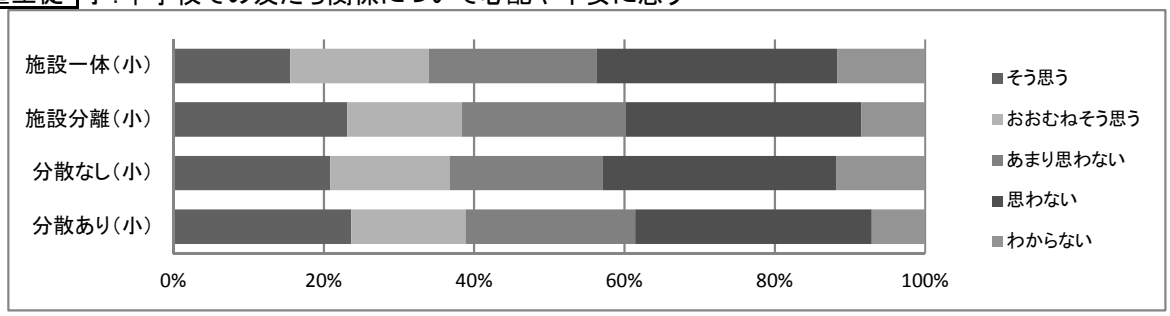
児童生徒 小学生と中学生がいっしょに活動することは大切だと思う



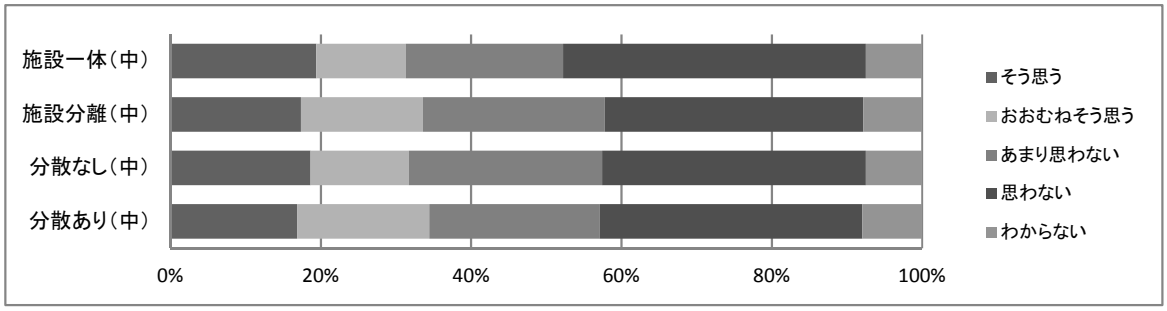
児童生徒 小：上級生や中学生を、すごいと感じるようになった
中：小学生に対して、中学生としての自信や自覚ができた



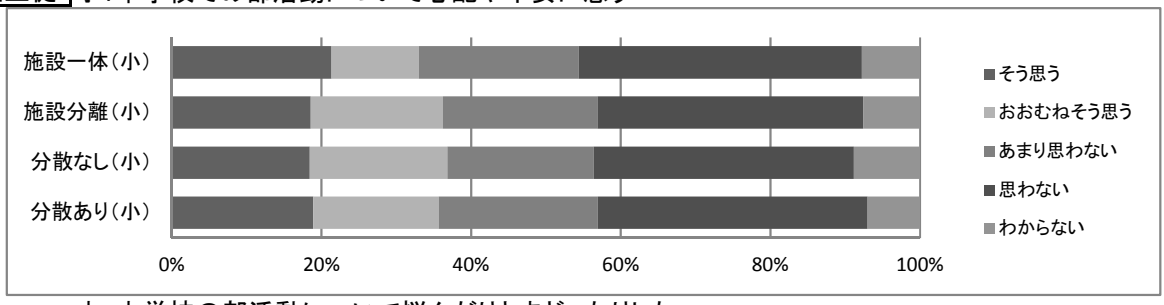
児童生徒 小：中学校での友だち関係について心配や不安に思う



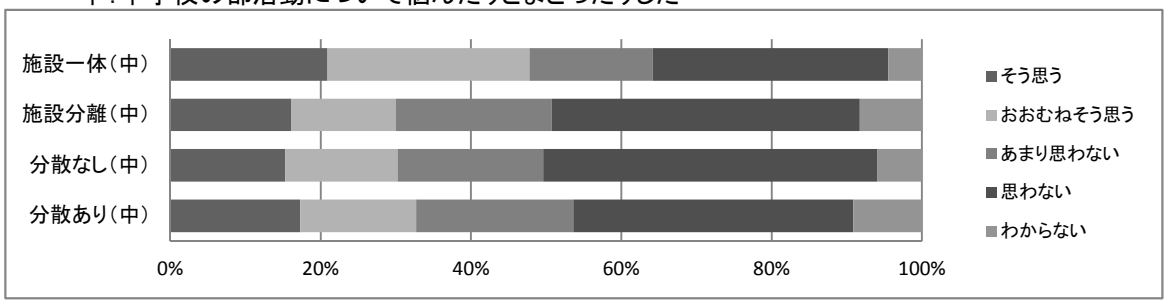
中：中学校での友だち関係について悩んだりとまどったりした



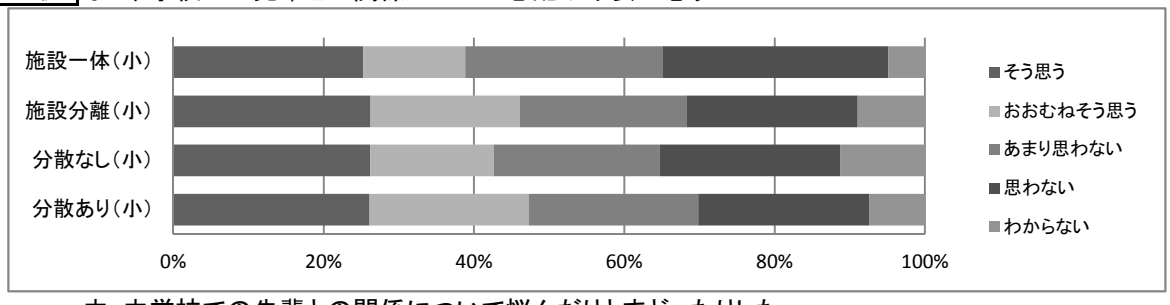
児童生徒 小：中学校での部活動について心配や不安に思う



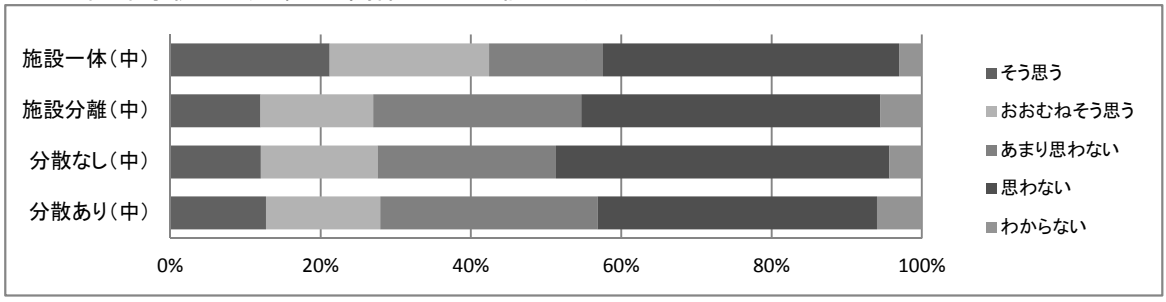
中：中学校の部活動について悩んだりとまどったりした



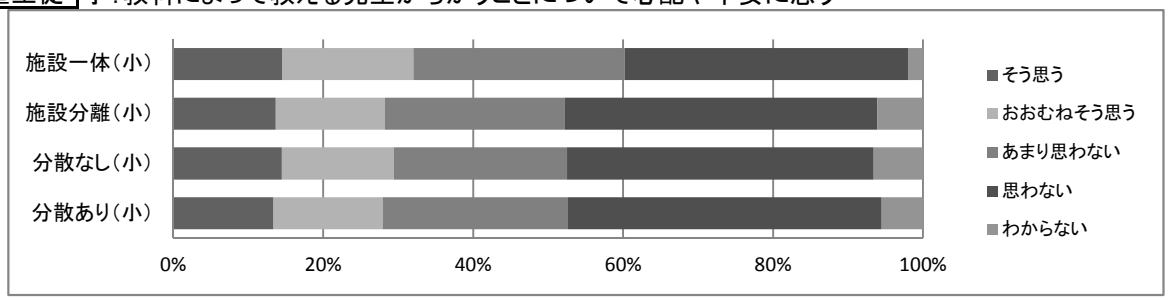
児童生徒 小：中学校での先輩との関係について心配や不安に思う



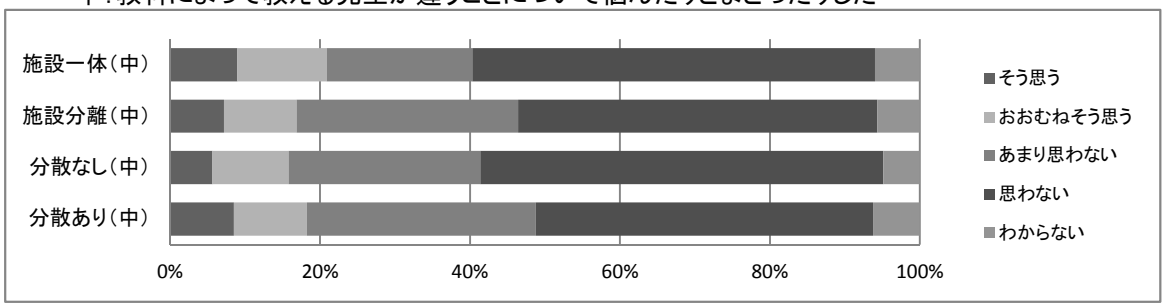
中：中学校での先輩との関係について悩んだりとまどったりした



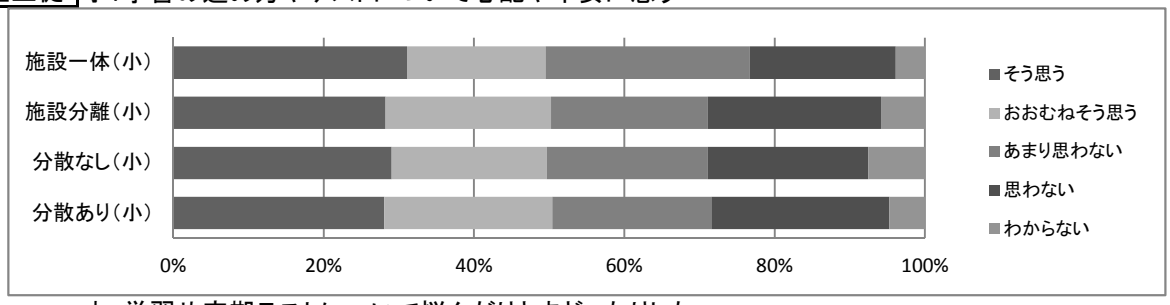
児童生徒 小：教科によって教える先生がちがうことについて心配や不安に思う



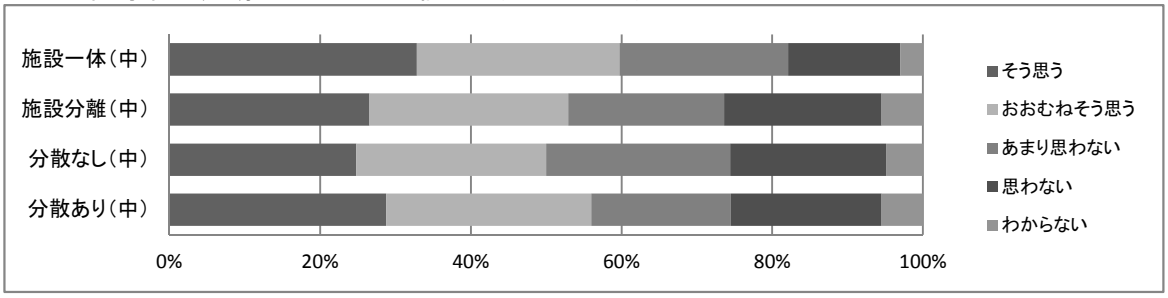
中：教科によって教える先生が違うことについて悩んだりとまどったりした



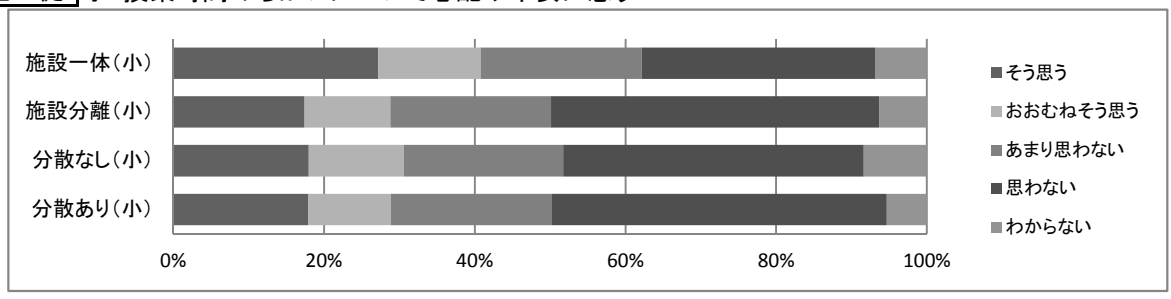
児童生徒 小：学習の進め方やテストについて心配や不安に思う



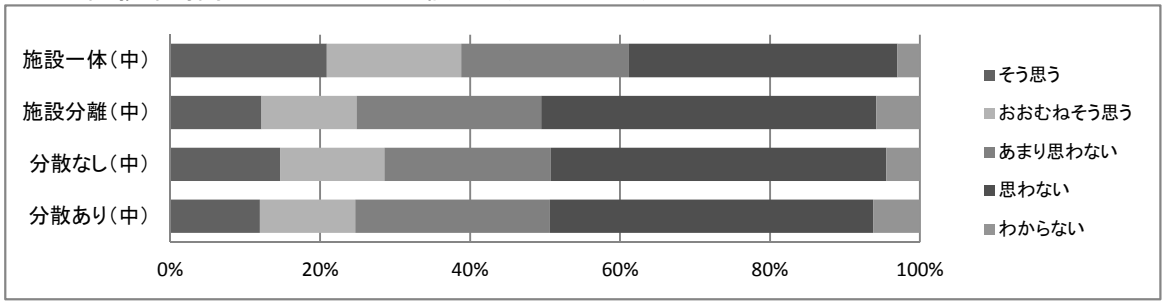
中：学習や定期テストについて悩んだりとまどったりした



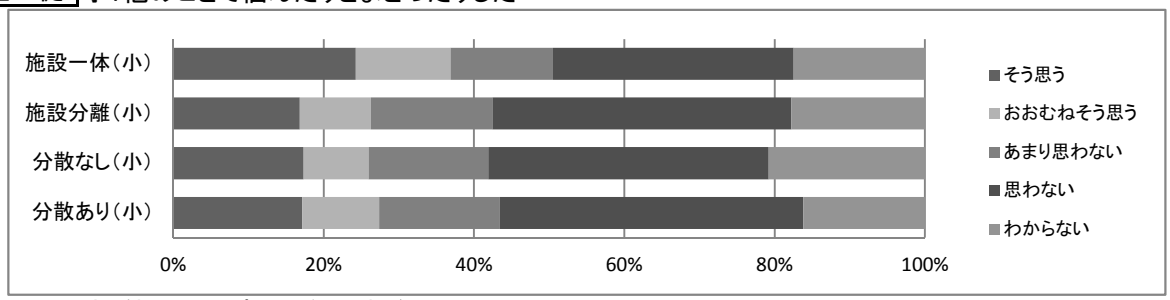
児童生徒 小：授業時間のちがいについて心配や不安に思う



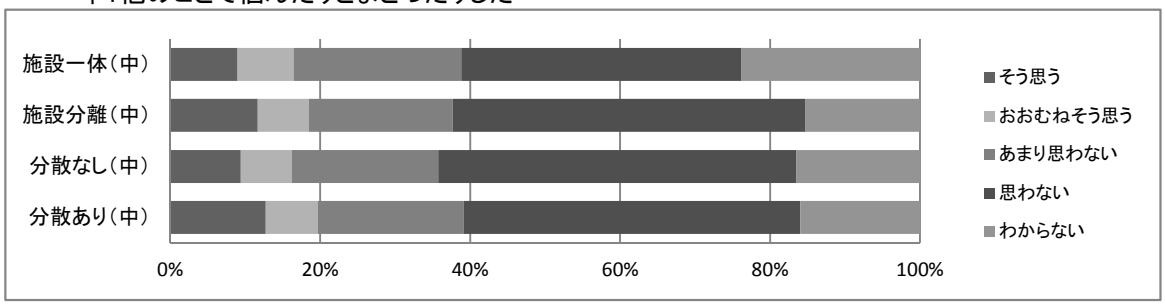
中：授業時間のちがいについて悩んだりとまどったりした



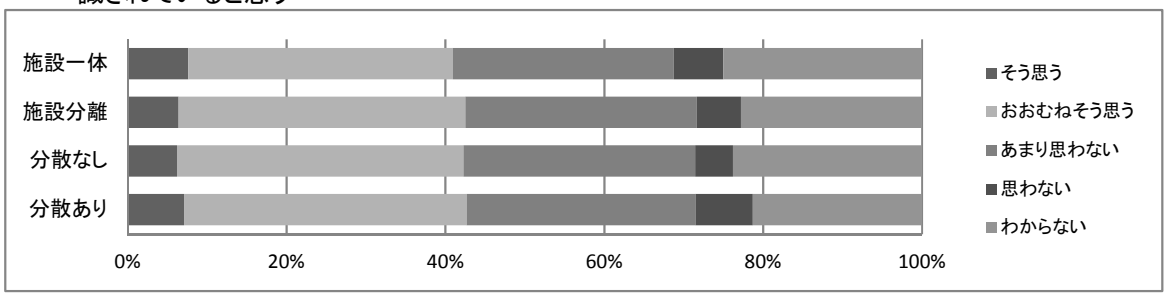
児童生徒 小：他のことで悩んだりとまどったりした



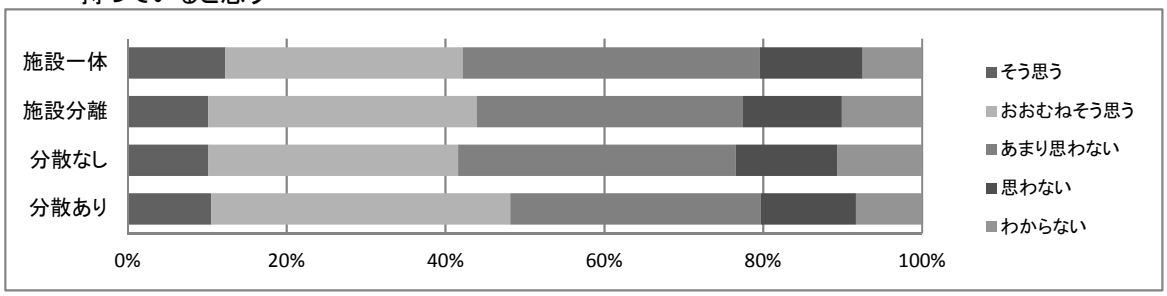
中：他のことで悩んだりとまどったりした



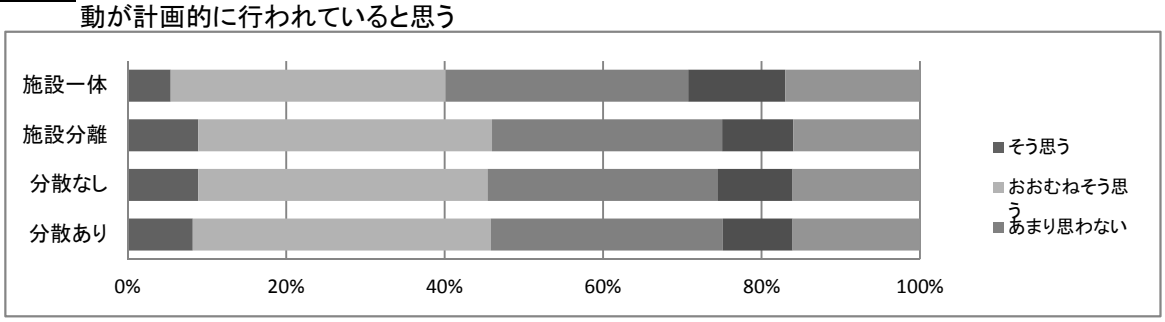
保護者　授業で、これまで習った事や今後習うことにもふれるなど、学習内容のつながりが意識されていると思う



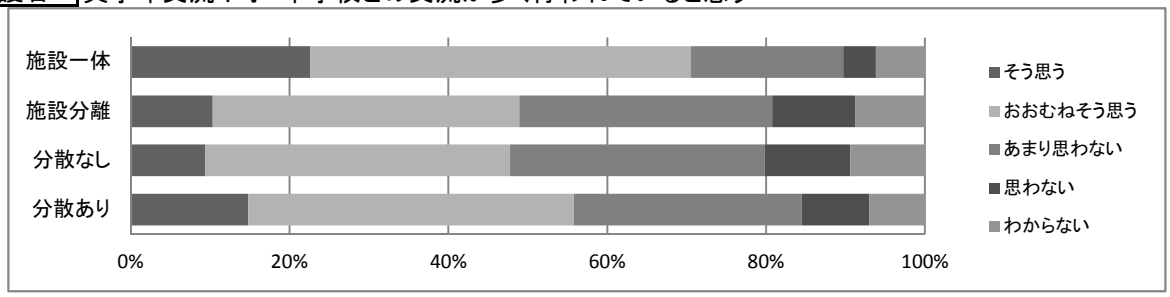
保護者　担任や学年の先生に限らず、他学年の先生など多くの先生と我が子がかかわりを持っていると思う



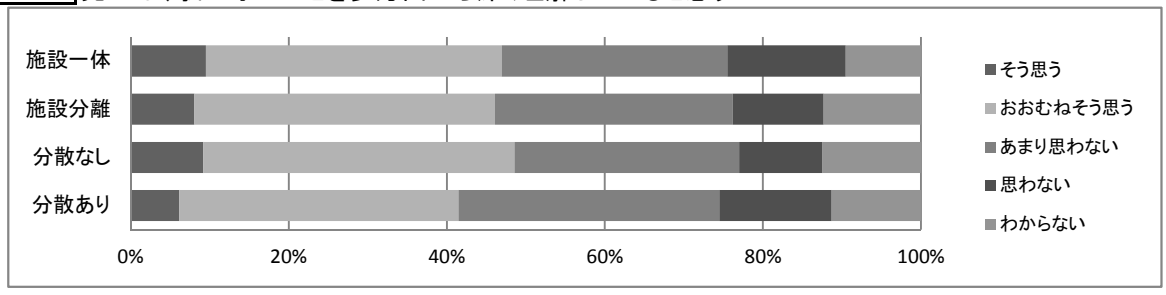
保護者　地域の方を先生として招いたり校区の良さを知る活動など、地域と結びついた教育活動が計画的に行われていると思う



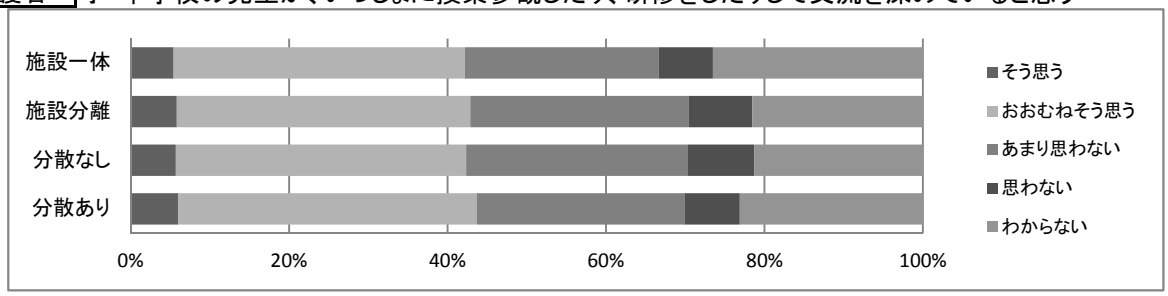
保護者　異学年交流や小・中学校との交流が多く行われていると思う



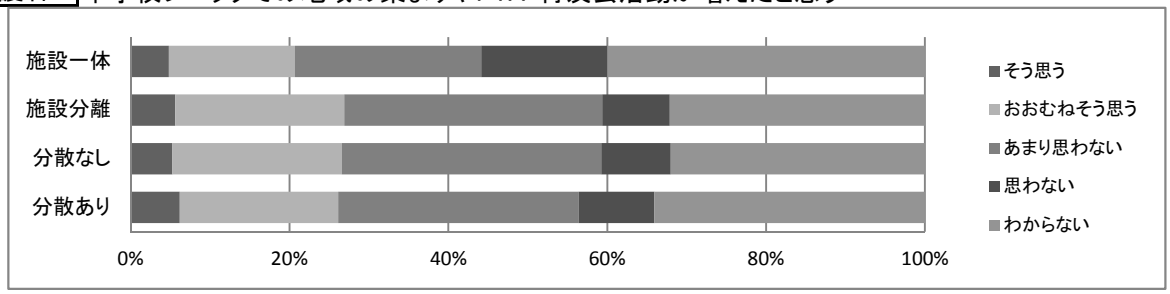
保護者　先生は、我が子のことを多方面から深く理解していると思う



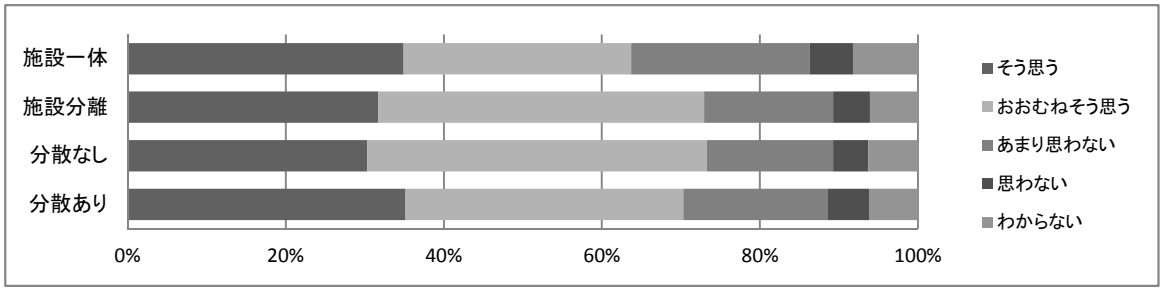
保護者　小・中学校の先生が、いっしょに授業参観したり、研修をしたりして交流を深めていると思う



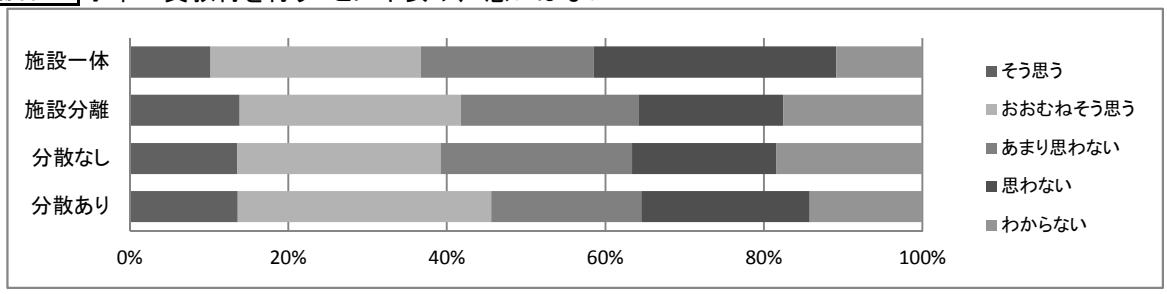
保護者　中学校ブロックでの地域の集まりやPTA・育友会活動が増えたと思う



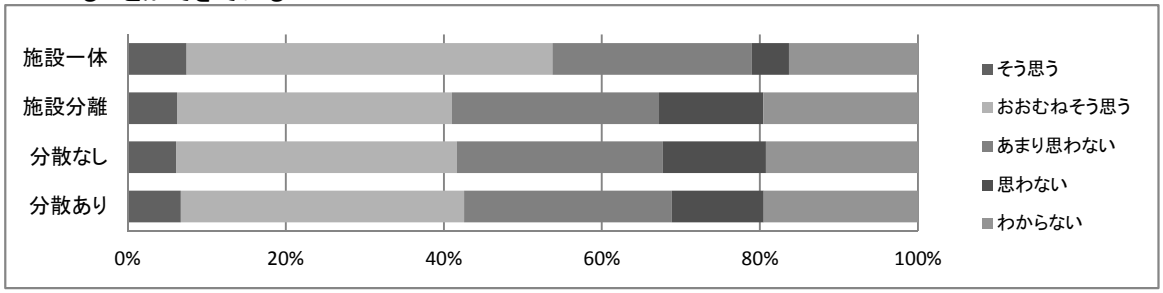
保護者　小学生でも、担任以外の先生や中学校の先生にも我が子を指導してほしいと思う



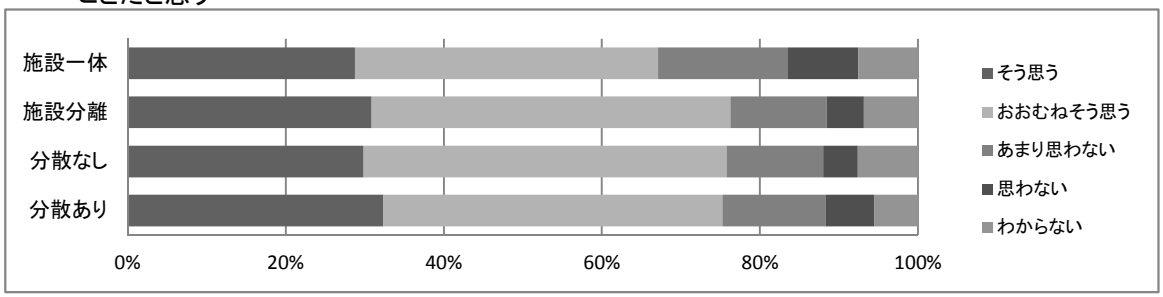
保護者　小中一貫教育を行うことに不安や戸惑いはない



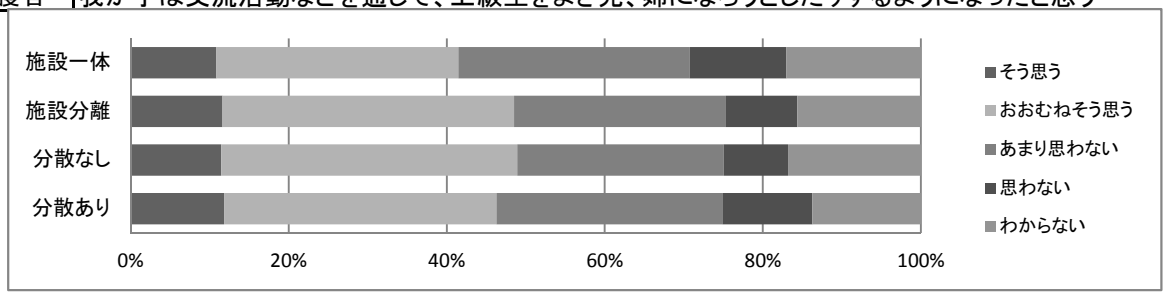
保護者　リーフレットやたより、インターネットなどで、宇治市の小中一貫教育の取組状況を知ることができている



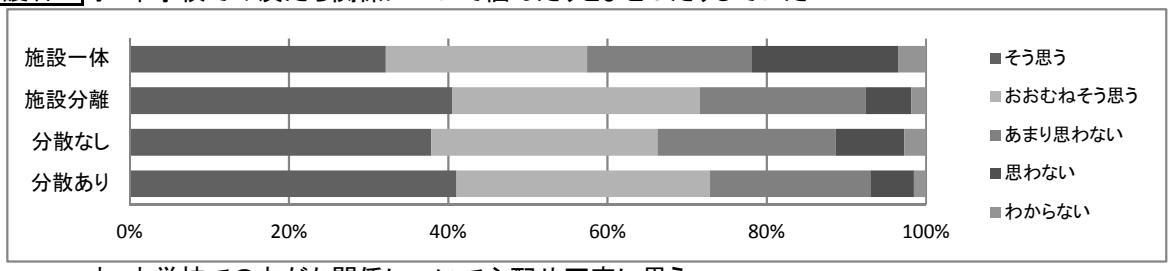
保護者　我が子の成長にとって、小学生と中学生の交流活動や合同行事などを行うことはよいことだと思う



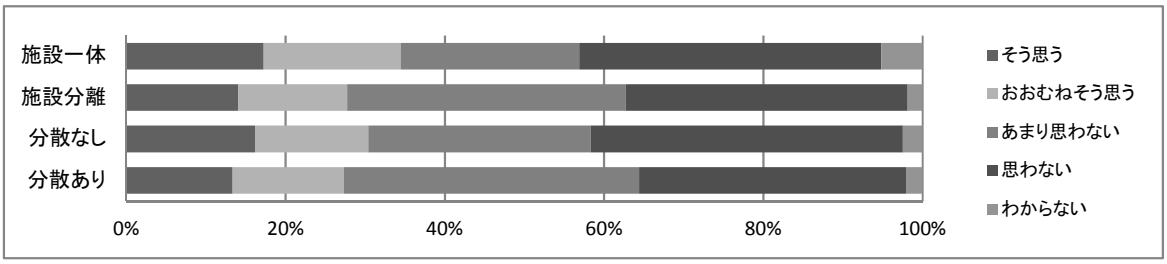
保護者　我が子は交流活動などを通して、上級生をよき兄、姉になろうとしたりするようになったと思う



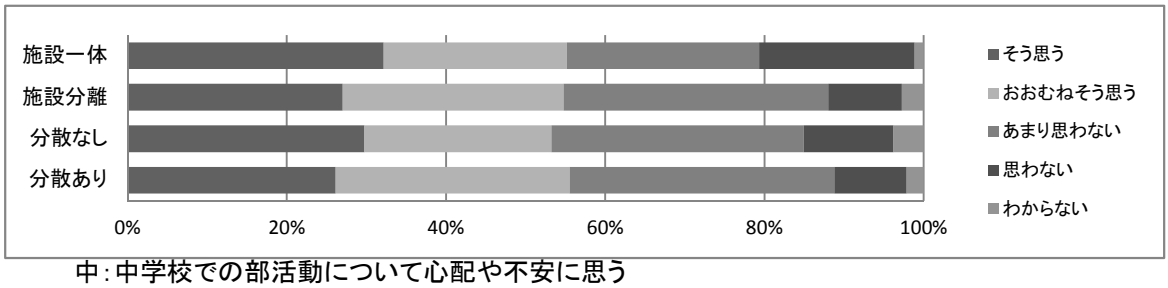
保護者　小：中学校での友だち関係について悩んだりとまどったりしていた



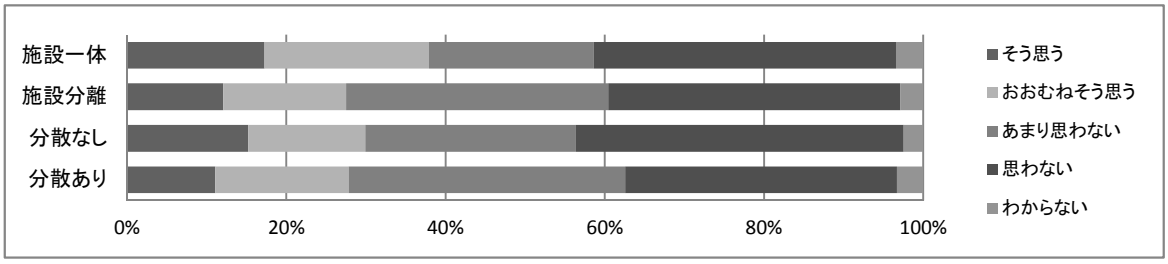
中：中学校での友だち関係について心配や不安に思う



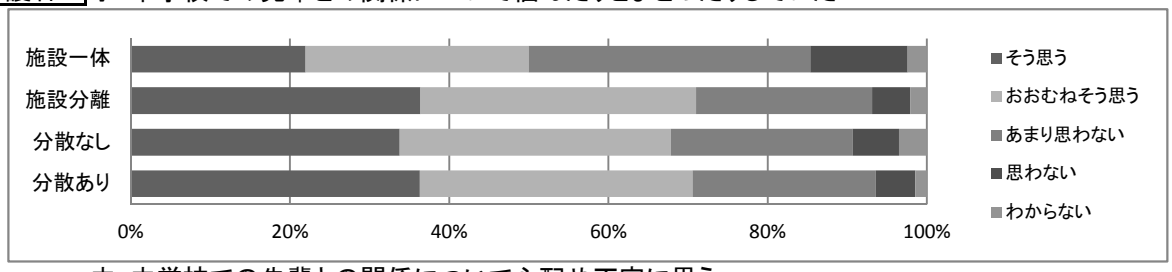
保護者　小：中学校での部活動について悩んだりとまどったりしていた



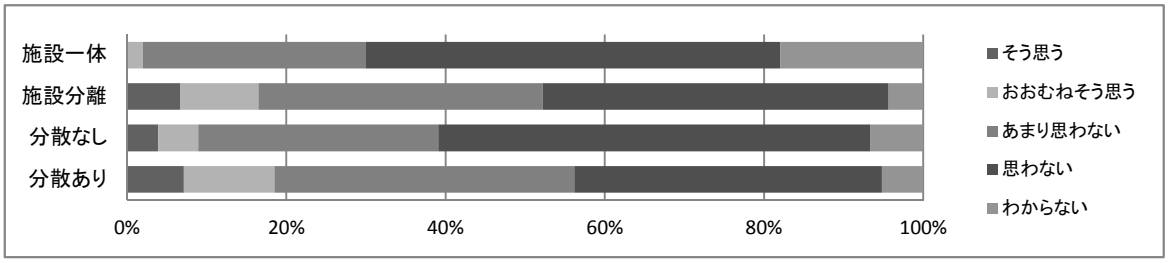
中：中学校での部活動について心配や不安に思う



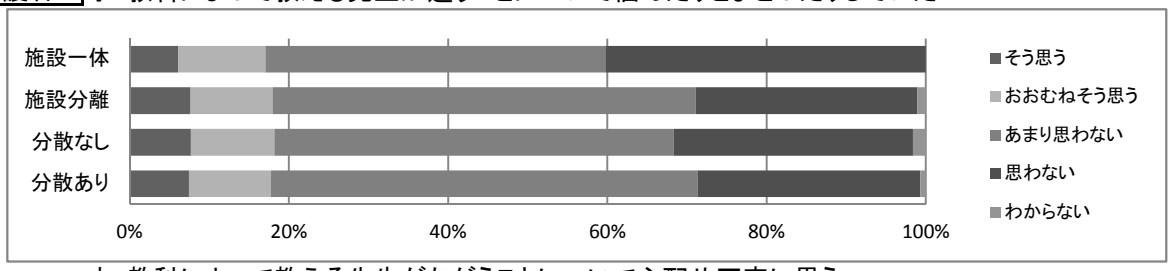
保護者　小：中学校での先輩との関係について悩んだりとまどったりしていた



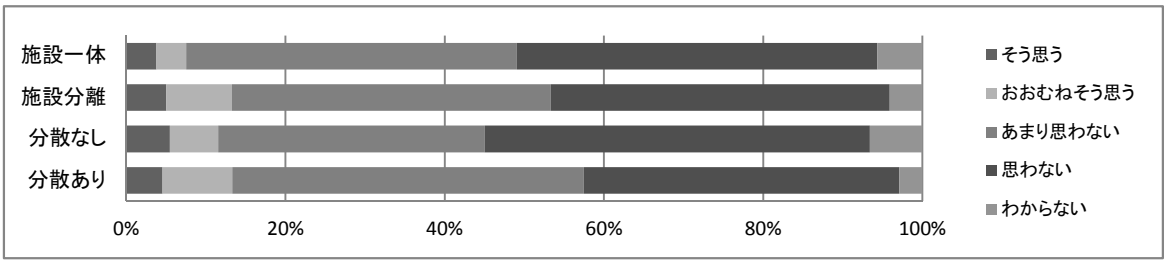
中：中学校での先輩との関係について心配や不安に思う



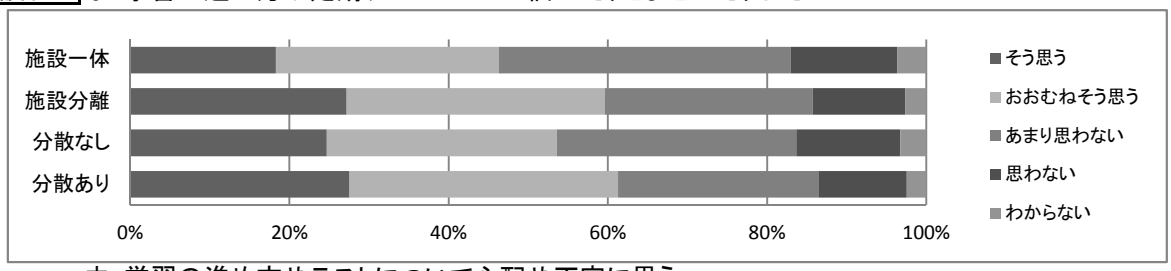
保護者　小：教科によって教える先生が違うことについて悩んだりとまどったりしていた



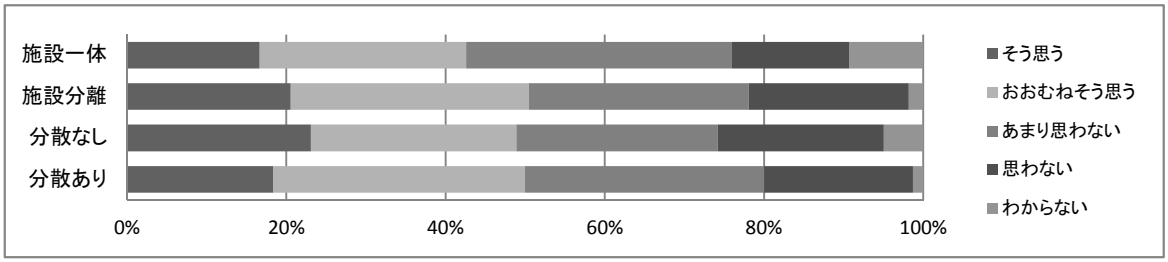
中：教科によって教える先生がちがうことについて心配や不安に思う



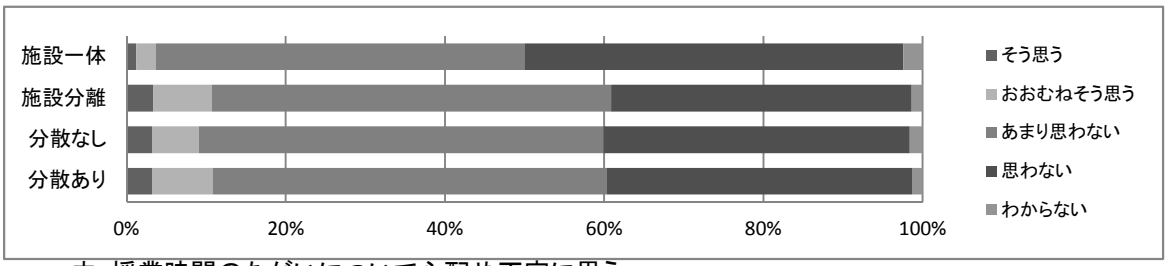
保護者　小：学習の進め方や定期テストについて悩んだりとまどったりした



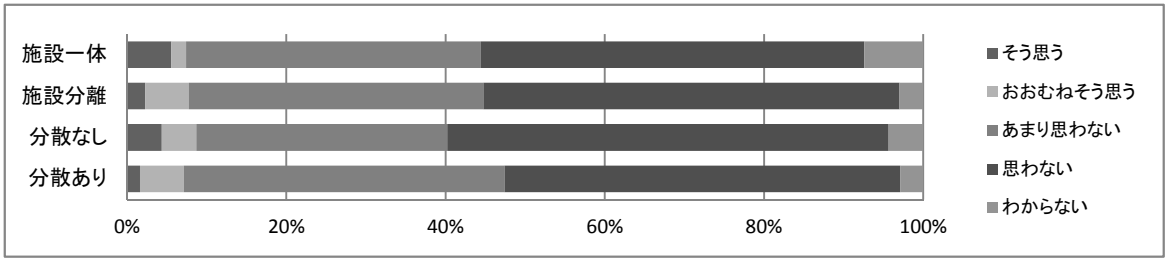
中：学習の進め方やテストについて心配や不安に思う



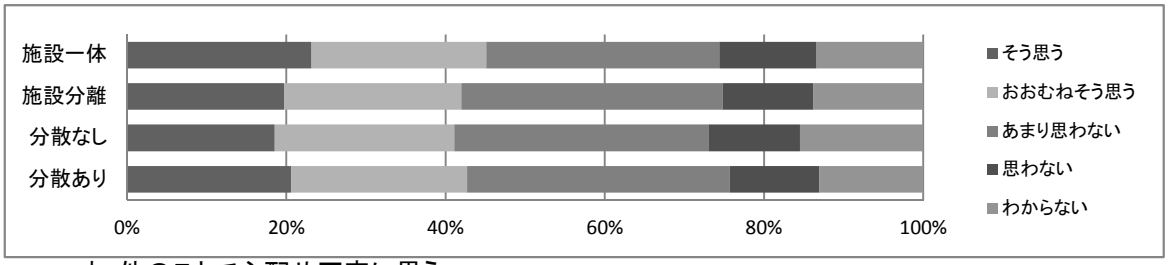
保護者　小：授業時間のちがいについて悩んだりとまどったりした



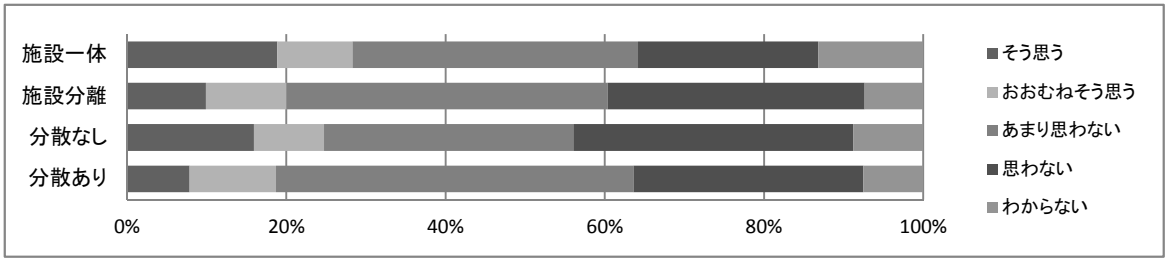
中：授業時間のちがいについて心配や不安に思う



保護者　小：他のことで悩んだりとまどったりした



中：他のことで心配や不安に思う



児童生徒

「分散進学なし」「分散進学あり」のグループ別比較では、「ねらい・取組」を問う設問において明らかな差があると思われる10ポイント以上の差があった項目は「広報活動」の１項目のみで「分散あり」グループの方が肯定的回答割合が高かった。総じて「分散進学」におけるグループ間では大きな差は見られず、意識の差があるとは言えない。

「施設一体型」「施設分離型」のグループ別比較では、「ねらい・取組」を問う設問において明らかな差があると思われる10ポイント以上の差があった項目は７項目あり、すべてが「分離型」の肯定的回答割合が高かった。児童生徒においては「分離型」において意識が高い傾向が見られる。

保護者

「分散進学なし」「分散進学あり」のグループ別比較では明らかな差があると思われる10ポイント以上の差があった項目はなく、保護者においても「分散進学」グループ間において大きな意識の差はない。

「施設一体型」「施設分離型」のグループ別比較では明らかな差があると思われる10ポイント以上の差が出た項目は９項目である。その内「分離型」においては４項目で、「一体型」においては５項目が優位となっており保護者の「施設」についての意識差を一概に述べることはできない。